

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (216)

県内遺跡発掘調査等事業に伴う河川コレクション発掘調査報告書 (5)

う え か せ だ
上加世田遺跡 2

4～6次調査

(南さつま市加世田川畑)

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
(216)

上加世田遺跡 2

二〇二二年三月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



鹿児島県

2022年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

序 文

この報告書は、令和3年度に文化庁の補助金を受け実施した県内遺跡発掘調査等事業のうち、「よみがえる『河ロコレクション』の世界」と呼称する事業に伴い、昭和40年代に発掘された上加世田遺跡の調査成果をまとめた記録です。

『河ロコレクション』とは、昭和20年代から半世紀以上の長きにわたり、鹿児島県内の考古学的調査に携わってこられた、故河ロ貞徳氏が収蔵・保管されていた考古関係資料のことで、平成24年12月に遺族の方々のご厚意により、当センターに「河ロ貞徳氏所蔵考古関連資料」として寄贈されました。この資料は、「考古資料」・「書籍類」・「地形図類」・「写真類」からなり、一括資料として『河ロコレクション』と呼ばれてきました。

本事業では、この寄贈資料の中から学史的に重要で、全国的にも著名な遺跡に関する資料を選び、あらためて調査内容の整理を行い、その情報や評価について県内外へ発信し、有効活用するための基礎・土台作りを目的としています。

今回報告する上加世田遺跡は、縄文時代後期後葉から晩期前半期の南九州を代表する遺跡で、「上加世田式土器」の標式遺跡にもなっています。過去12回にわたって実施された発掘調査のうち、1次調査（昭和43年10,11月）から6次調査（昭和48年3月）までが『河ロコレクション』に収められており、昨年度は1～3次の調査報告書を刊行し、本年度は残りの4～6次調査の記録を刊行することとなりました。

我が国において、埋蔵文化財行政が本格スタートする前の開発対応調査に、総括者として取り組まれた河ロ氏を中心としながら、多くの有志・考古学徒達が上加世田遺跡に集い、真摯かつ前向きに躍動した姿が浮かび上がってきます。

本書が県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心と理解をいただくとともに、文化財の普及・啓発の一助となることを願っております。

最後になりますが、本書の刊行にあたりご協力をいただきました南さつま市教育委員会及び関係機関や多くの関係者の皆様方に厚く御礼を申し上げます。

令和4年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 長 中 原 一 成

報告書抄録

ふりがな	うえかせだいせき							
書名	上加世田遺跡2							
副書名	県内遺跡発掘調査等事業に伴う河口貞徳コレクション発掘調査報告書(5)							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第216集							
編集者名	前迫亮一							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 TEL 0995-48-5811							
発行年月	西暦2022年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査 起因
		市町村	遺跡番号					
うえかせだいせき 上加世田遺跡	かごしまけん 鹿児島県 みなみ 南さつま市 かせだ 加世田 かわ 川畑	46220	220-11	31° 24' 55"	130° 19' 31"	4次 1970. 12. 25 ～ 1971. 1. 7	394	宅地 造成
						5次 1971. 12. 25 ～ 1972. 1. 6		
						6次 1973. 3. 2 ～ 1973. 3. 14		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
上加世田遺跡	集落跡	縄文時代後期後葉～晩期前半	土坑、ピット群 「楕円形窪地」関連遺構 礫群・焼土域・灰土域・埋設土器・土器集中域等	縄文土器：上加世田式土器・入佐式土器 石器：打製石鏃・石錐・石匙・スクレイパー・磨製石斧・打製石斧・石錘・円盤形石器・有溝砥石・石槍・分銅形石製品・異形石器・小玉・軽石加工品 炭化種実（イチイガシ） 骨粉（人骨・獣骨等）		上加世田式土器の標式遺跡		
遺跡の概要	<p>上加世田遺跡は、鹿児島県南さつま市加世田の標高約20mの河岸段丘上に位置する遺跡である。県内の縄文時代後期後葉から晩期前半を代表し、上加世田式土器の標式遺跡となっている。</p> <p>本遺跡は、1968（昭和43）年10月から11月に実施された1次調査を皮切りに、これまで12回の調査が行われている。これらのうち、1～6次調査において故河口貞徳氏が調査主体者もしくは調査責任（総括）者として深く関わった。その成果に関する資料や遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターと南さつま市教育委員会に保管されており、4次～6次の調査成果を今日の視点で整理したのが本報告書である。</p> <p>4次～6次調査では、「楕円形窪地」部分を中心として、土坑や礫群、焼土域や灰土域、埋設土器等が検出されるとともに、大量の土器・石器、土偶や軽石製岩偶等の祭祀行為を想起させる各種の製品類、また勾玉や管玉などの玉製品や砥石等、玉作り関係の遺物も多く出土した。</p>							



万之瀬川河口域のハマ木ウ群落及び干潟生物群集

上加世田遺跡位置図 (1 : 25,000)

例言・凡例

- 1 本書は鹿児島県が文化庁の補助を受け、本県で「よみがえる『河口コレクション』の世界事業」と呼称する事業に伴う発掘調査報告書である。
- 2 上加世田遺跡は、鹿児島県南さつま市上加世田川畑に所在する。
- 3 報告書作成（整理作業）は、鹿児島県教育委員会が事業主体者となり、鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下、本章にわたって「県立埋文センター」）が担当し実施した。
- 4 本文中での人名は、河口貞徳氏を含め敬称略を基本とする。
- 5 これまで12回にわたって実施された上加世田遺跡の発掘調査のうち、河口は1次から6次の調査責任者として参加した。本書は4～6次の発掘調査報告書である。なお、本文の表2にあるように、4～6次の調査成果については既にいくつかの文献が存在する。本書では、河口コレクションとして収蔵・保管されている遺物・現場での実測図・現場写真等を中心に取扱い、併せて遺跡の調査成果全体の総括も記した。
- 6 掲載遺物番号は通し番号とし、本文・挿図・表・図版中の番号は一致する。各実測図に付した「南」付の番号は、南さつま市教育委員会刊行（2020年3月）の『南さつま市埋蔵文化財発掘調査報告書（11）上加世田遺跡』の掲載遺物番号のこと、番号のみ付したものは、鹿児島県立埋蔵文化財センター刊行（2021年3月）の『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（209）上加世田遺跡1』の掲載遺物番号のことである。
- 7 遺物の観察表の法量において、括弧内に記載してある数値は残存値である。
- 8 挿図の縮尺は、挿図ごとに示した。
- 9 発掘調査での各種実測図は、河口の他、上村俊雄・出口 浩・諏訪昭千代・戸崎勝洋・弥栄久志・本田道輝・有元彰順・吉永正史・楠原郁子・中村耕治・木下孝司・池崎譲二等の各調査参加者が作成したものである。
- 10 出土遺物の実測・トレースは、河口コレクション担当の埋文センター職員（会計年度任用職員を含む）を中心として行い、土器実測の一部を大福コンサルタント株式会社、石器実測の一部を株式会社イビソクにそれぞれ委託した。
- 11 自然科学分析は、いずれも株式会社パレオ・ラボに委託した。
- 12 本書で使用した挿図の一部は、南さつま市教育委員会作製の図面を使用し、その出典については当該図のキャプション等で示した。
- 13 本書図版で用いた現場写真は、河口コレクションとして収蔵・保管されているものの他、調査参加者である本田道輝氏提供の写真（有元彰順氏他撮影）を使用させていただいた。
- 14 出土遺物の写真撮影は、西園勝彦が行った。
- 15 本遺跡から出土した種実等の圧痕関係遺物の同定については眞邊彩（鹿児島県教育庁文化財課）、骨片（粉）等については宮崎大和（〈公財〉鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財センター）の協力を得た。
- 16 本書の編集は前迫亮一が行ったが、基本的な整理作業については、前任者の松山初音（〈公財〉鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財センター）によるところが大きい。
- 17 本書の執筆分担は、以下を除きすべて前迫が行った。
第2章第3節（1）①, ②の石器 中原一成
第2章第4節 榊パレオ・ラボ

本文目次

序文	
抄録	
例言・凡例	
目次	
第1章 事業の経緯と経過	1
第1節 事業の経緯と内容	1
第2節 整理・報告書作成業務	1
第3節 整理作業の方法と報告書の構成	1
第2章 4～6次調査の概要と成果	3
第1節 遺跡の位置と環境	3
第2節 調査の概要	6
第3節 4～6次調査の概要と成果	7
(1) 調査の概要	7
(2) 調査の成果	12
① 遺構	12
② 遺物	37
第4節 自然科学分析	55
(1) 放射性炭素年代測定	55
(2) 上加世田遺跡から出土した炭化種実	57
(3) 上加世田遺跡出土の石製玉類の蛍光X線分析	59
第3章 上加世田遺跡発掘調査の総括	61
第1節 発掘調査の総括	61
第2節 上加世田遺跡の総括	64
写真図版	71

挿図目次

第1図 上加世田遺跡と周辺の主な遺跡位置図	4	第15図 礫群3と周辺遺物の出土状況	19
第2図 古地図に見る上加世田遺跡付近の変遷	5	第16図 礫群4・礫群5の検出状況	20
第3図 上加世田遺跡の基本層序	6	第17図 礫群4・礫群5と周辺遺物の出土状況	21
第4図 各調査位置図	7	第18図 礫群6～9の検出状況	23
第5図 グリッド配置図	8	第19図 礫群6～9と周辺遺物の出土状況	24
第6図 4次調査の遺構検出および遺物出土状況	9	第20図 礫群10と周辺遺物の出土状況	26
第7図 5・6次調査遺物出土状況	11	第21図 礫群10・礫群11の検出状況	27
第8図 1号土坑実測図	13	第22図 礫群12・礫群13と周辺遺物の出土状況	29
第9図 1号土坑内出土遺物	13	第23図 礫群14と周辺遺物出土状況	30
第10図 第3層下部地形図および遺物分布	14	第24図 焼土1・焼土2の検出状況	31
第11図 楕円形窪地内およびその周辺の遺物出土状況	15	第25図 遺物出土状況図1	33
第12図 4次調査区北壁土層断面図	16	第26図 遺物出土状況図2	34
第13図 礫群1と周辺遺物の出土状況	17	第27図 遺物出土状況図3	35
第14図 礫群2・礫群3の検出状況	18	第28図 遺物出土状況図4	36

第29図	縄文土器 1	38	第39図	縄文時代の石器 8	49
第30図	縄文土器 2	39	第40図	縄文時代の石器 9	50
第31図	縄文土器 3	40	第41図	縄文時代の石器10	51
第32図	縄文時代の石器 1	42	第42図	縄文時代の石器11	52
第33図	縄文時代の石器 2	43	第43図	暦年較正結果	56
第34図	縄文時代の石器 3	44	第44図	1～12次調査位置図	62
第35図	縄文時代の石器 4	45	第45図	南九州縄文晩期土器型式編年表	65
第36図	縄文時代の石器 5	46	第46図	九州縄文晩期土器編年関係表	65
第37図	縄文時代の石器 6	47	第47図	上加世田遺跡 4～6次調査出土縄文土器	66
第38図	縄文時代の石器 7	48			

表 目 次

表 1	上加世田遺跡の発掘調査履歴一覧	2	表 8	上加世田遺跡から出土した炭化種実	57
表 2	上加世田遺跡の関係文献一覧	2	表 9	上加世田遺跡出土の大型植物遺体	57
表 3	出土土器観察表	41	表10	分析対象	59
表 4	出土石器観察表 1	53	表11	比重および半定量分析結果	59
表 5	出土石器観察表 2	54	表12	上加世田遺跡発掘調査（1～6次）の 主な調査者・参加者動向	63
表 6	測定試料および処理	56	表13	上加世田遺跡から出土した 石器・石製品の数量	68
表 7	放射性炭素年代測定 および暦年較正の結果	56			

図 版 目 次

図版 I	上加世田遺跡 B 1 土坑 1 から出土した炭化種実	58			
図版 II	分析対象遺物の測定位置と実体顕微鏡写真	60			
図版 1	遺跡の遠景・近景	71	図版15	4次調査遺物出土状況	85
図版 2	遺跡の近景・発掘調査風景 1	72	図版16	5次調査遺物出土状況	86
図版 3	発掘調査風景 2	73	図版17	6次調査遺物出土状況	87
図版 4	発掘調査風景 3	74	図版18	熱きあの日のアルバム	88
図版 5	発掘調査風景 4	75	図版19	縄文土器 1	89
図版 6	発掘調査風景 5	76	図版20	縄文土器 2	90
図版 7	発掘調査風景 6・楕円形窪地 1	77	図版21	縄文土器 3	91
図版 8	楕円形窪地 2	78	図版22	縄文時代の石器 1	92
図版 9	楕円形窪地 3	79	図版23	縄文時代の石器 2	93
図版10	遺構検出状況 1	80	図版24	縄文時代の石器 3	94
図版11	遺構検出状況 2	81	図版25	縄文時代の石器 4	95
図版12	遺構検出状況 3	82	図版26	縄文時代の石器 5	96
図版13	遺構検出状況 4	83	図版27	縄文時代の石器 6	97
図版14	遺構検出状況 5	84	図版28	発掘調査（5次）参加者集合写真	98

第1章 事業の経緯と経過

第1節 事業の経緯と内容

本書は、鹿児島県の考古学界に多大な功績を残された河口貞徳氏の収蔵品、いわゆる「河コレクション」の中にある上加世田遺跡（鹿児島県南さつま市加世田川畑所在）に関する考古学的情報について整理した報告である。

氏は平成23（2011）年1月に101歳でご逝去された。明治42（1909）年生まれの氏は、埋蔵文化財保護行政が確立される以前から、鹿児島県内の遺跡調査に携われ、多くの考古学的・歴史的知見を確認し、整理・発表されてきた。

昭和23（1948）年から昭和42（1967）年まで鹿児島市立玉龍高等学校教諭として教壇に立たれる一方、昭和24（1949）年には寺師見國氏や三友國五郎氏らと鹿児島県考古学会を創立。そして、昭和46（1971）年から亡くなられる平成23（2011）年まで、その考古学会の会長として、鹿児島県の考古学界を牽引されたのであった。

長年にわたる調査・研究の成果は、結果として多くの考古資料が考古学会の事務局を兼ねていた氏の自宅に蓄積されることとなり、研究や蔵書保管のためのスペースはもちろん、専用の収蔵庫も設け、資料の保管・管理に尽力されたのであった。

幸いこれらの資料は、遺族の方々のご厚意により、平成24（2012）年12月に、鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下、「県立埋文センター」とする）に寄贈され、その今日的評価を検討・提示すべく、緊急雇用創出事業や文化庁の国庫補助事業等を活用し、調査・整理を進めてきた。

氏が調査された遺跡は、昭和24（1949）年9月の笹貫遺跡（鹿児島市）をスタートとして、最後の発掘調査となった昭和59（1984）年10月の中甫洞穴（知名町）第3次調査まで、97遺跡、延べ139回を数える。これまで、県立埋文センターでは、『山ノ口遺跡』（2018）、『吐噶喇・奄美の遺跡』（2019）、『出水貝塚』（2020）と報告・刊行してきた。令和2（2020）年度からは、文化庁の国庫補助事業を活用した『よみがえる「河コレクション」の世界』事業をスタートさせ、まず『上加世田遺跡1』（2021）を刊行。そして今回、『上加世田遺跡2』の報告することとなった。

第2節 整理・報告書作成業務

本報告書刊行に伴う整理・報告書作成作業については、令和3（2021）年4月から令和4（2022）年3月にかけて、県立埋文センターで行った。ただし、基礎的な整理作業は、令和元（2019）年度から着手し、寄贈された資料と

既報告（発表）分の資料との照合作業等を行った。後ほど詳述するが、基本的には『上加世田遺跡1』で1～3次調査分を、そして今回の『上加世田遺跡2』では4～6次調査分を取り扱うという方針で進めてきた。

本整理・報告書作成に関する業務体制は、以下のとおりである。

〈令和3年度 業務体制（整理作業）〉

事業主体	鹿児島県
調査主体	鹿児島県教育委員会
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター
	所 長 中原 一成
調査企画	次長兼総務課長 大口 浩嗣
	調査課長 寺原 徹
	第一調査係長 三垣 恵一
調査担当	文化財主事 前迫 亮一
事務担当	主 査 和田 賢
調査指導	鹿児島県文化財保護審議会委員 本田 道輝 文化庁文化財部文化財第二課 芝 康次郎

なお、本報告書の刊行にあたり、掲載内容の妥当性等について下記の委員会を開催し、検討を行った。

報告書作成指導委員会 令和3年11月24日他、4回。
寺原調査課長他6名

報告書作成検討委員会 令和3年11月29日他、4回。
中原所長他6名

第3節 整理作業の方法と報告書の構成

本報告書は上加世田遺跡の2冊目、『上加世田遺跡2』として報告を行うが、1冊目の『上加世田遺跡1』との関係を含め、整理作業の方法や報告書の構成内容等について説明する。

上加世田遺跡の発掘調査については、昭和43（1968）年10月から11月の1次調査から、平成8（1996）年9月から翌年の平成9（1997）年3月の12次調査まで実施されている。これらのうち、「河コレクション」として県立埋文センターに寄贈・保管されているのが、1～3次調査に係るすべての調査記録と遺物、4～6次調査に係るすべての調査記録と2割程度の遺物である。遺物の残り8割については、南さつま市教育委員会に保管され、その内容については、同市教育委員会により『上加世田遺跡 4～6次調査』として平成2（2020）3月に報告・刊行された（表2文献15）。

県立埋文センターでは、保管している1～6次調査の整理・刊行を2か年のスケジュールで計画し、その内容

や分量を考慮した結果、1年目に1～3次調査を、2年目に4～6次調査を整理し、報告・刊行することとなり、令和3（2021）年3月には、『上加世田遺跡1 1～3次調査』を刊行した。

本報告書は、残る4～6次調査を対象とした報告ということになるが、これまで12回実施された発掘調査の

成果も含め、上加世田遺跡の総括編的な位置づけも行うこととしたい。

なお、今回の報告では、調査内容・成果の基本的部分について、南さつま市刊行の報告書をはじめとする既刊の報告資料を利用・転載させていただいていることをご了解いただきたい（転載の際は出典等を明記）。

表1 上加世田遺跡の発掘調査履歴一覧

調査回数	調査期間	調査起因等	調査主体	備考
1	昭和43(1968)年10月10日～11月10日	宅地造成	河口貞徳	
2	昭和43(1968)年12月25日～昭和44(1969)年1月5日	宅地造成	鹿児島県史蹟調査会	
3	昭和44(1969)年8月11日～8月18日	宅地造成	河口貞徳	
4	昭和45(1970)年12月25日～昭和46(1971)年1月7日	宅地造成	加世田市教育委員会(4～6次調査の調査総括として河口貞徳が参加)	発掘未了部があったため、9日以降に3日間の追加調査を実施
5	昭和46(1971)年12月25日～昭和47(1972)年1月6日	宅地造成		
6	昭和48(1968)年3月2日～3月14日	宅地造成		
7	昭和59(1984)年2月13日～3月28日	加世田川激甚災害特別緊急事業	加世田市教育委員会	2～3月に第1地点、6～9月に第2地点の調査を実施
	昭和59(1984)年6月4日～9月2日			
8	昭和60(1985)年4月22日～5月17日	加世田川激甚災害特別緊急事業		7次調査第1地点隣接地の調査を実施
	昭和61(1986)年2月24日～3月19日			樹木の移植により、2期に分けて実施
9	平成6(1994)年5月	急傾斜崩壊対策事業		調査成果は12次調査報告書に掲載
10	平成6(1994)年6月	個人住宅建築(試掘調査)		調査成果は12次調査報告書に掲載
11	平成6(1994)年10月13日～12月19日	重要遺跡確認緊急調査		遺跡範囲の確認を目的として実施
12	平成8(1996)年9月2日～平成9(1997)年3月28日	個人住宅建築等		最終的な発掘調査で記録保存を図る

表2 上加世田遺跡の関係文献一覧

文献番号	刊行年	文献名	掲載調査回数	備考
1	昭和44(1969)年	「鹿児島県上加世田遺跡」『考古学ジャーナル』30 ニューサイエンス社	1, 2	1次調査aトレンチと2次調査cトレンチを中心に報告。遺物は写真で紹介
2	昭和44(1969)年	「上加世田遺跡」『加世田』3 加世田高等学校	2	遺物は写真で紹介。1, 2次調査のトレンチ配置図を掲載
3	昭和46(1971)年	『上加世田遺跡発掘調査概報』加世田市教育委員会	4	トレンチ配置図・遺構配置及び遺物出土状況図、現場写真、遺物写真を掲載
4	昭和47(1972)年	『上加世田遺跡発掘調査概報』加世田市教育委員会	5	発掘区域図(含地形図)、年度別発掘区分図(含遺物出土状況図)、現場写真、遺物写真を掲載
5	昭和48(1973)年	「上加世田遺跡」『鹿児島考古』7 鹿児島県考古学会	6	年度別発掘区分図(含遺物出土状況図)、遺構実測図、実測図(土器9点・石器17点・岩偶他9点)、現場写真、遺物写真を掲載
6	昭和48(1973)年	「上加世田遺跡」『日本考古学年報』24 日本考古学協会	5	5次調査の概要
7	昭和56(1981)年	「上加世田遺跡」『日本考古学年報』21～23 日本考古学協会	1～4	1～4次調査の概要をそれぞれ10行程度で報告
8	昭和60(1985)年	『上加世田遺跡-1』加世田市教育委員会	7	第1地点、第2地点の調査成果を合本して報告
9	昭和62(1987)年	『上加世田遺跡-2』加世田市教育委員会	8	7次調査第1地点隣接地の調査成果を報告
10	昭和63(1988)年	「上加世田遺跡」『日本の古代遺跡38 鹿児島』保育社		上加世田遺跡の紹介
11	平成2(1990)年	「縄文晩期の土器」『鹿児島考古』24 鹿児島県考古学会	3	3次調査出土の土器を中心に晩期土器の分類を行っている。6次調査分の土器もあり
12	平成8(1996)年	『上加世田遺跡』加世田市教育委員会	11	
13	平成17(2005)年	「上加世田遺跡」『先史・古代の鹿児島 資料編』鹿児島県教育委員会		上加世田遺跡の紹介
14	平成27(2015)年	『上加世田遺跡 12次調査』南さつま教育委員会	12	「発掘の経緯」に「9次調査の成果については本報告書に掲載している」とあり
15	令和2(2020)年	『上加世田遺跡 4～6次調査』南さつま教育委員会	4～6	4～6次調査の本報告書
16	令和3(2021)年	『上加世田遺跡1 1～3次調査』鹿児島県立埋蔵文化財センター	1～3	「河口コレクション」にある1～3次調査の報告

第2章 4～6次調査の概要と成果

第1節 遺跡の位置と環境

上加世田遺跡が所在する南さつま市は、薩摩半島の南西端に位置している。南及び西側は東シナ海に面し、行政区としては、北側が鹿児島市・日置市、南側が枕崎市・南九州市にそれぞれ接している自治体で、平成17（2005）年に1市4町が合併して誕生した。

海岸線の北西部は日本三大砂丘の一つにも数えられる吹上浜があり、南西部の変化に富んだリアス式海岸へと続く。その接点でもある旧加世田市街地から旧金峰町（現在、日置市）の南部に位置する阿多平野付近にかけて、一級河川の万之瀬川が流れ、沖積平野を形成している。

上加世田遺跡は、その万之瀬川の支流である加世田川の下流域にあり、沖積平野の南側に広がる比較的緩やかな丘陵地から伸びたシラス台地の縁辺に位置している。

かつて遺跡の西側には加世田川が大きく蛇行して流れ、周辺は急崖となっていたが、河川改修や道路拡幅等が進んだ現在では、調査が始まった当時の面影・景観からは程遠いものとなっている。

上加世田遺跡の周辺には、縄文時代草創期から古代・中世にかけて、南九州を代表する遺跡が集中していることでも知られている。草創期から早期にかけての遺跡として、上加世田遺跡から約1km北に位置する丘陵上に楢ノ原遺跡がある。特に草創期の遺構（煙道付炉穴・配石炉・集石遺構等）・遺物（大量の隆帯文土器・丸ノミ状石斧等）からなるその内容は、縄文時代草創期における南九州の先進性を示す縄文遺跡として、平成9（1997）年に国の史跡に指定された。

縄文時代前・中期頃の遺跡としては、南九州を代表する貝塚として、令和2（2020）年に同じく国指定史跡となった阿多貝塚のほか、上焼田遺跡・堀川貝塚などが知られている。

縄文時代後期の遺跡としては中津野遺跡がある。指宿式土器や市来式土器が、万之瀬川支流の境川（阿多平野を介し万之瀬川へ注ぐ。改修され直線化）沿いで大量に出土した。中津野遺跡は弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての土器として設定された中津野式土器の標式遺跡でもある。また、弥生時代初頭のものと考えられる船の舷側板が出土したことで話題となった。

縄文時代後期後葉から晩期前半にかけての遺跡として、本報告の上加世田遺跡がある。上加世田式土器の標式遺跡となっている。

縄文時代晩期終末の遺跡として、中津野下原遺跡がある。また、弥生時代前期から中期にかけての遺跡として、高橋貝塚、後期の遺跡として松木菌遺跡がある。いずれも阿多平野を臨む微高地の先端に位置している。高橋式

土器（前期）や松木菌式土器（後期）等の土器型式は、いずれも南九州の弥生土器編年に欠かせない存在となっている。

高橋貝塚の遺物は「河口コレクション」を構成する代表的な考古資料でもある。靱痕のある土器や石包丁・柱状石斧等、稲作の存在を示す出土品や南海産貝輪の未製品が出土するなど、当時の交流の様子をうかがわせる貴重な資料として、発掘調査された昭和37（1962）年以來、研究の対象となってきた。また、尾下台地に位置する松木菌遺跡からはV字溝が発見されており、弥生時代後期から古墳時代にかけての環濠集落の存在が示唆されている。

古代においては、須恵器の窯跡として中岳山麓古窯跡群や「阿多」の墨書土器が出土した小中原遺跡等が知られている。小中原遺跡は、古代阿多郡の郡衙跡ではないかと推定されている。

中世では、万之瀬川の河川改修関係で調査された持鉢松遺跡が著名である。万之瀬川の右岸に位置する遺跡からは、多種多様な輸入陶磁器と、東海地方や近畿・瀬戸内地方から流入したと考えられる国産陶磁器が数多く出土した。

これらの遺跡の内容を総合して考慮すると、万之瀬川やその支流が形成した沖積平野：阿多平野は、吹上浜の砂州に守られた入り江を形成し、長く天然の良港として人々の暮らしを支えてきた地域であったと考えられることができよう。

阿多平野周辺の中津野台地や尾下台地はもちろん、吹上浜の砂丘陵や万之瀬川流域（平野の低地部を含む）には、まだまだ数多くの埋蔵文化財が包蔵されているものと考えられ、この地域が果たした歴史的意義は、ただ単に南九州の一隅の歴史にとどまらず、わが国の歴史を考えるうえで極めて重要な地域であることを再認識するのである。

上加世田遺跡発見の経緯は道路の新設であったが、その後も宅地造成や河川改修事業等、いわゆる開発事業に伴う発掘調査であったため、遺跡本体は記録保存と引き換えに消滅・変貌しているというのが実状である。

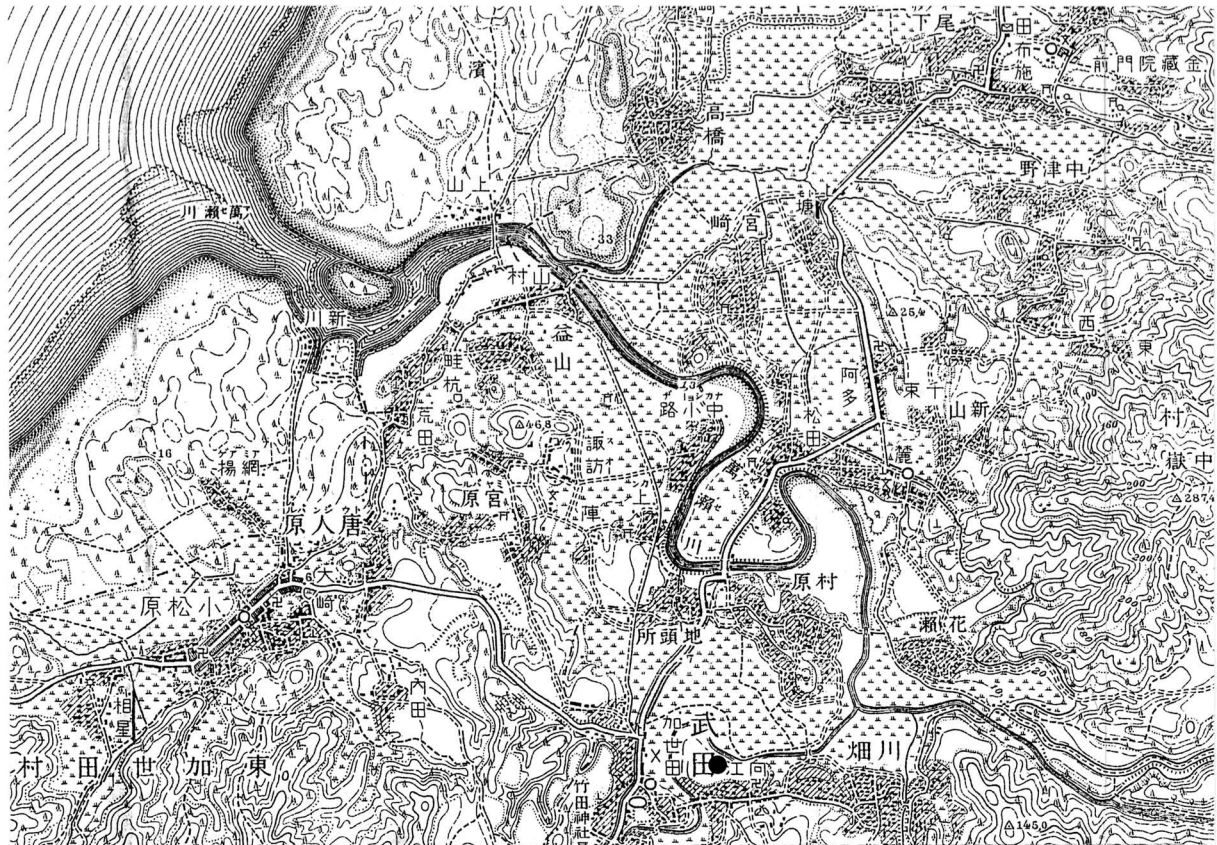
とは言え、遺跡が立地していた小丘陵の一部は残っており、現地を訪れると当時の周辺地形との関係を彷彿とさせる環境が体感できる。具体的には、三方を万之瀬川の支流である加世田川に囲まれ、北には中岳（標高287.5m）と金峰山（同636.3m）、南には長屋山（同513.1m）がそびえ、地域のランドマークとして存在感を見せている。当時の縄文人にとって、これらがどのような存在であったか注目される場所である。



国土地理院 5万分の1「加世田」平成18年8月1日発行より

第1図 上加世田遺跡と周辺的主要遺跡位置図

- 1 上加世田
- 2 原流山
- 3 水原
- 4 芝原
- 5 渡持
- 6 小鉢
- 7 中鉢
- 8 松原
- 9 原原
- 10 白高
- 11 下高
- 12 上小
- 13 阿多
- 14 松木
- 15 中津
- 16 野野
- 17 中津野 (県理七調査：縄文後期)
- 18 南小園 (河口貞徳調査推定地)
- 19 小園
- 20 観音寺跡
- 21 奥山古墳



(上) 大日本帝国陸地測量部 5万分の1「川邊」明治42年7月20日発行より

(下) 地理調査所 5万分の1「川邊」昭和21年12月28日発行より



第2図 古地図に見る上加世田遺跡付近の変遷 (●印が上加世田遺跡)

第2節 調査の概要

上加世田遺跡における発掘調査の概要については、第1章第3節にある表1, 2を参照して頂きたいが、まずの発端は、県道の開削工事であった。その新設の県道沿いで始まった宅地造成が遺跡発見の契機となった。昭和43(1968)年9月のことである。当時ラ・サール高等学校に勤務していた上村俊雄教諭のもとに、前任校の県立吹上高等学校の一学徒から、工事中の斜面で大量の土器を発見したとの一報が入った。上村は考古学の恩師で、当時鹿児島市立玉龍高等学校教諭であった河口貞徳県文化財専門委員(当時)に報告。河口が現地を確認した後、同年10月10日から11月10日にかけて河口らによる1次調査が実施された。

その後も宅地造成を起因とする調査が6次まで続いた。2次は鹿児島県史蹟調査会、3次は河口が調査主体となって実施されたが、4～6次調査は、加世田市教育委員会が主体となって実施された。ただし、河口が総括として指揮を執った調査であった。

さらに発掘調査は、加世田市教育委員会を主体として、7～12次まで実施された。加世田川激甚災害特別緊急事業や急傾斜崩壊対策事業等が起因であった(表1, 2)。

基本層序について

上加世田遺跡の基本層序については、4～6次調査箇所を対象に、南さつま市教委が南さつま市全体のそれとの照合・検討を行い整理して記載している(表2文献15)。ここではそれを参照しつつ、4～6次調査の概要報告(特に今回対象の最終報告である6次調査の記録)をもとに整理し、いくつか追記を行い説明したい。

1層 灰褐色土層(表土)。

やや砂質。厚さ70cm前後で水平に堆積している(6次報告)。過去の発掘調査廃土(明黄褐色～茶褐色土)が厚く堆積している場所もある。

2層 黒褐色～褐色土層。

調査区の東側及び西側端部では厚さ40cm程であるが、中央部では1m前後に達する(6次報告・「楕円形窪地」の埋土となっている部分は厚い)。場所によっては攪乱部あり。

中世から弥生時代の遺物包含層。

3層 茶褐色土。

アカホヤ火山灰をベースとした腐植土層に相当すると考えられる(遺跡全域では削平・攪乱を受けているところが目立つ)。調査区の東側及び西側端部では厚さ20cm程であるが、中央部では1mを越える(6次報告・「楕円形窪地」の埋土となっている部分は厚い)。縄文時代後・晩期の遺物包含層であるが、そのピークは上部と下部に分かれ

る傾向がある。

4層 黄茶褐色土層(6次報告では紅褐色層)。

下部に幸屋火砕流と考えられるパミスを含む。いわゆるアカホヤ火山灰層と考えられる。無遺物層である。

5層 砂礫混入の褐色土層。

無遺物層。

6層 砂礫層。

無遺物層。

1層	灰褐色土層	
2層	黒褐色～褐色土層	中世から弥生の遺物包含層
	灰褐色砂質層	開聞岳起源の灰コラ層(部分的に存在)
3層	茶褐色土層	縄文後・晩期の遺物包含層
4層	黄茶褐色土層	アカホヤ火山灰層
5層	砂礫混入の褐色土層	
6層	砂礫層	

第3図 上加世田遺跡の基本層序

この他、2層と3層との間に、灰褐色砂質層(当時の日誌等にはコラ層とか火山灰層とかの名称で登場する)が部分的に存在する。これは開聞岳起源のいわゆる灰コラ層と考えられる。灰コラは約3,400年前の火山灰層とされており、本遺跡の主体を占める上加世田式土器の年代の指標になるものと考えられる(成尾英仁氏御教示)。

2層と3層の説明でも述べたが、4～6次調査では、「楕円形窪地」と呼ばれる大きな窪地が絡んでいることから、場所によってはかなり分厚い堆積状況が見られる。

また、5層や6層部分については、いわゆるシラス層や基盤の礫層がベースとなっていると考えられるが、地点やトレンチによって相違がみられることから、ここでは6次調査の報告を記載した。11次調査の報告によると、最下層のVI a, b層からは、砂質層に角礫が多く含まれるという記載がある(表2文献12)。

第3節 4～6次調査の概要と成果

4次調査と5,6次の発掘調査区は、隣接しており、まとまりとして捉えることができることから、調査の概要についてはそれぞれ記すが、成果としての遺構と遺物については、一括して報告する。

(1) 調査の概要

① 4次調査

《調査期間と調査体制》

4次調査は、昭和45(1970)年12月25日から昭和46(1971)年1月7日にかけて実施された。1～3次調査を踏まえ、宅地造成等により開発が避けられない場所の発掘調査が国や県の補助事業として実施された。調査主体は加世田市教育委員会である(表2文献3)。

1～3次調査は、河口を中心に数名の県考古学会会員である学校教員を含むグループによる調査が主であったが、4次調査では、調査主体者である加世田市教育委員会のサポートのもと、それらに加えて鹿児島大学や別府大学他の大学生や吹上高等学校社会研究クラブの生徒達も参加し、にぎやかな調査体制となった。

調査主体者 加世田市教育委員会
 調査責任者 加世田市教育委員会教育長 田中弘秋
 調査担当者
 調査総括 鹿児島県文化財専門委員 河口貞徳
 第一地点A班
 責任者・調査員 鹿児島県立出水高等学校教諭
 池水寛治

第一地点B班
 責任者・調査員 ラ・サール高等学校教諭
 上村俊雄

第一地点C班
 責任者・調査員 鹿児島市立南小学校教諭 出口浩

第一地点D班
 責任者・調査員 鹿児島県立志布志高等学校教諭
 諏訪昭千代

調査員 鹿児島県立甲南高等学校教諭 平田信芳
 第一地点E班

責任者・調査員 ラ・サール高等学校教諭
 上村俊雄

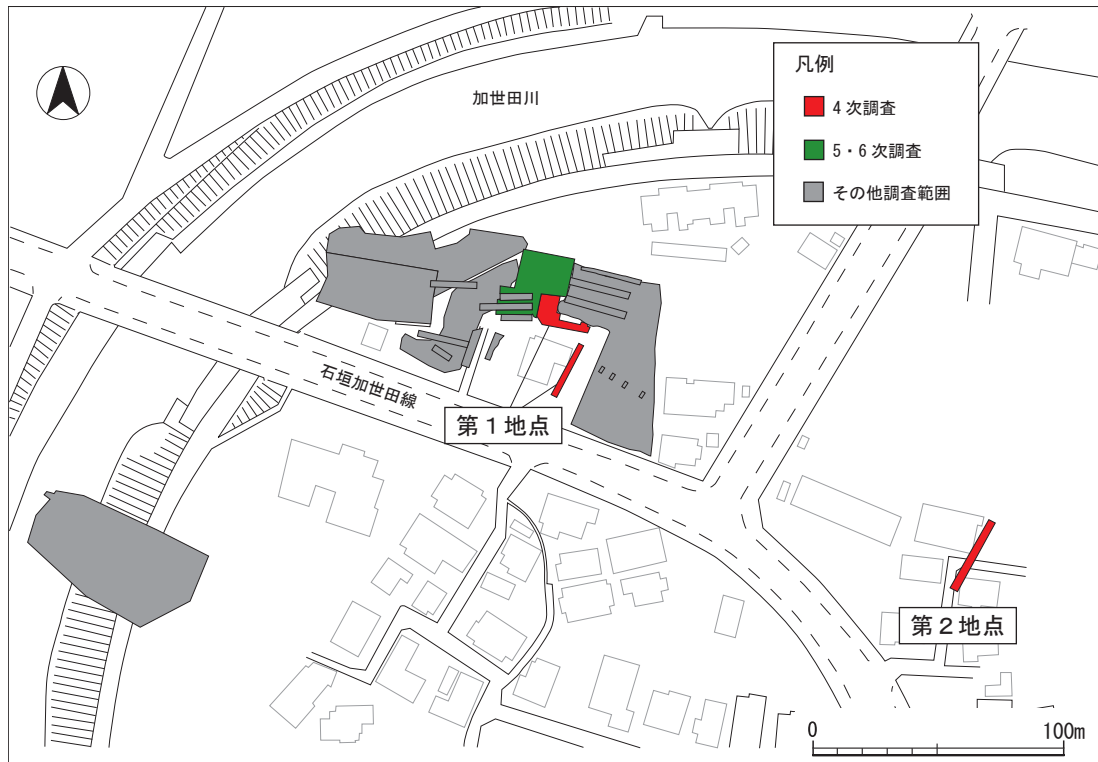
調査員 鹿児島高等学校教諭 酒匂義明

第二地点A班
 責任者・調査員 鹿児島県立出水高等学校教諭
 池水寛治

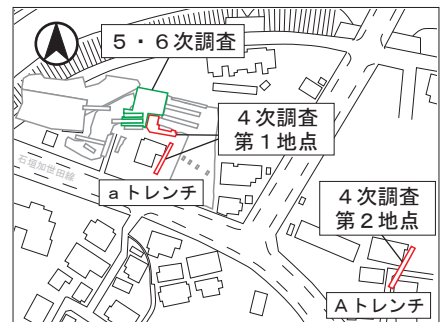
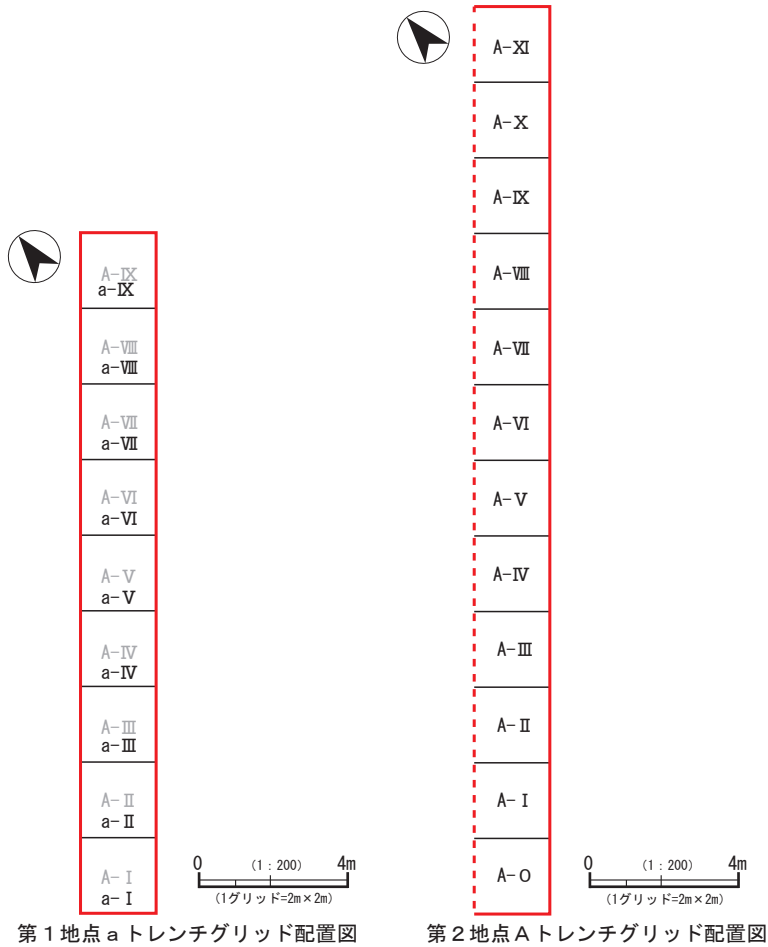
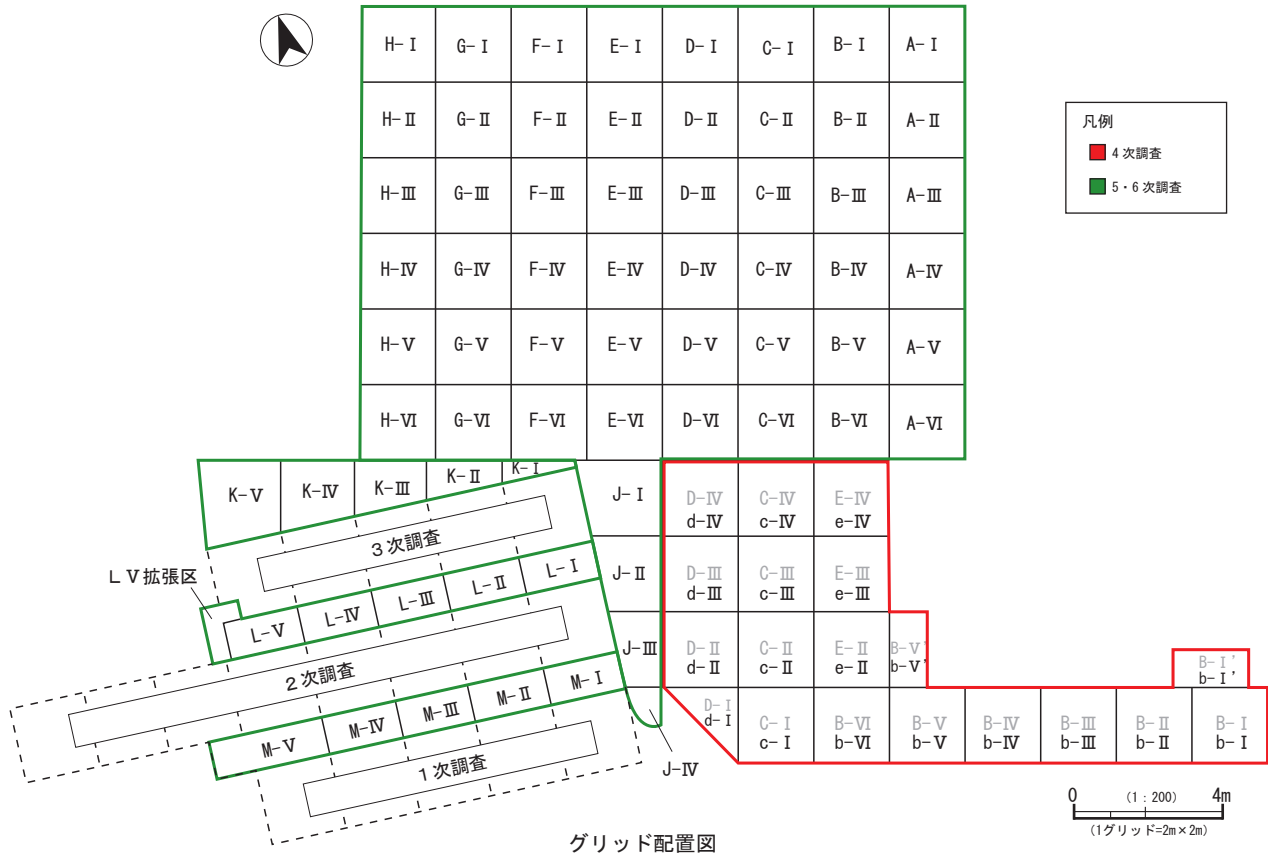
調査員 高山町立川上中学校教諭 本蔵久三

《調査の方法》

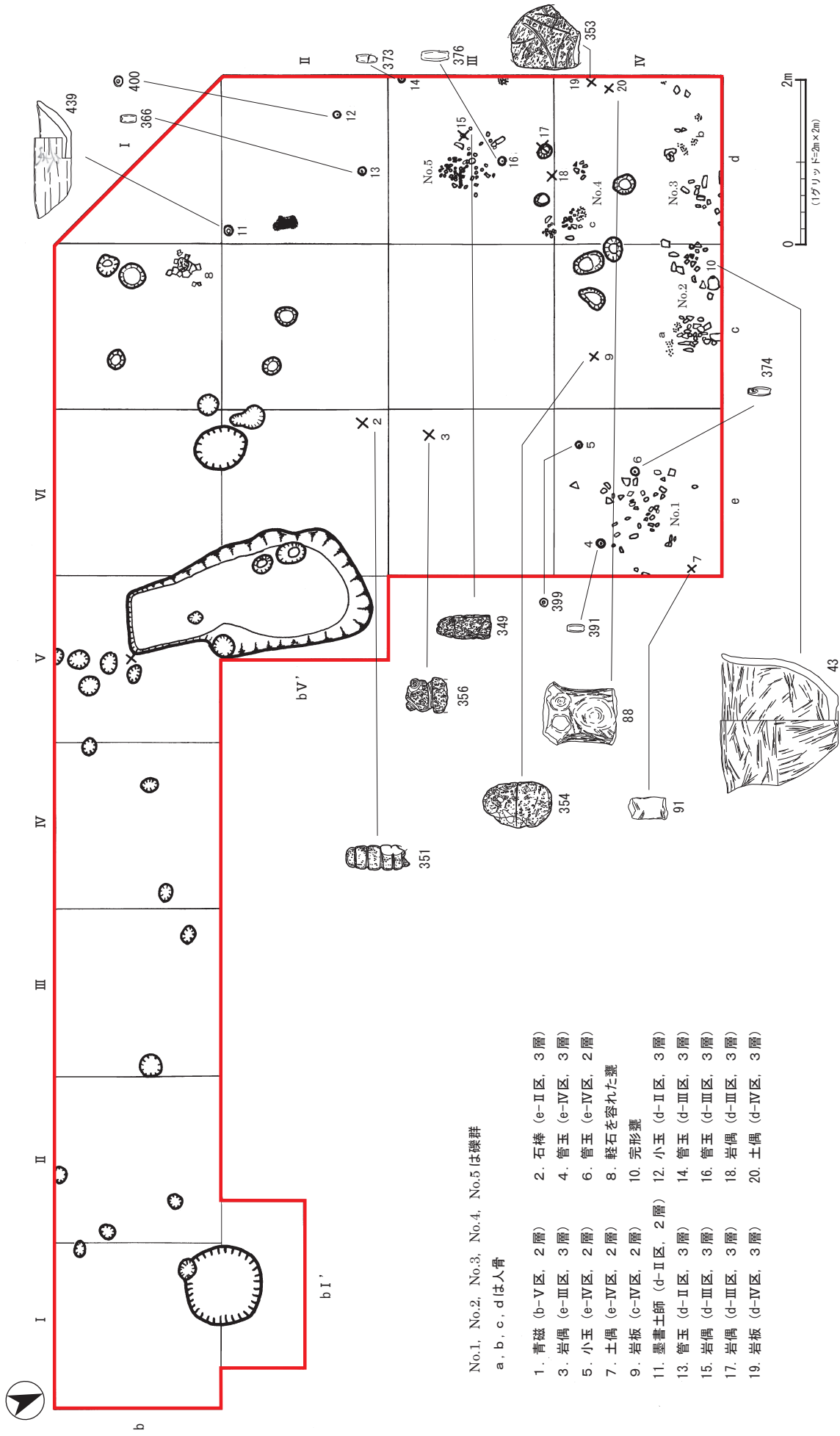
4次調査の調査地点は、前回(1～3次調査)までの発掘調査地点の東側隣接地と、道路を隔てた東側墓地隣接地の2か所を設定し、それぞれ第一地点、第二地点と呼称した。さらにそれぞれ5か所、6か所のトレンチを設定し、調査はトレンチごとに班を編成(前項で提示)して進められた。



第4図 各調査位置図(表2文献15より転載・一部改変)



第5図 グリッド配置図 (表2文献15より転載)



No.1, No.2, No.3, No.4, No.5は磁群

a, b, c, dは人骨

- 1. 青磁 (b-V区, 2層)
- 2. 石棒 (e-II区, 3層)
- 3. 岩偶 (e-III区, 3層)
- 4. 管玉 (e-IV区, 3層)
- 5. 小玉 (e-IV区, 2層)
- 6. 管玉 (e-IV区, 2層)
- 7. 土偶 (e-IV区, 2層)
- 8. 軽石を容れた甕
- 9. 岩板 (c-IV区, 2層)
- 10. 完形甕
- 11. 墨書土師 (d-II区, 2層)
- 12. 小玉 (d-II区, 3層)
- 13. 管玉 (d-II区, 3層)
- 14. 管玉 (d-III区, 3層)
- 15. 岩偶 (d-III区, 3層)
- 16. 管玉 (d-III区, 3層)
- 17. 岩偶 (d-III区, 3層)
- 18. 岩偶 (d-III区, 3層)
- 19. 岩板 (d-IV区, 3層)
- 20. 土偶 (d-IV区, 3層)

第6図 4次調査の遺構検出および遺物出土状況 (表2 文献15より転載)

※ 表2 文献3 より引用・加筆

② 5次調査の概要

《調査期間と調査体制》

5次調査は、昭和46(1971)年12月25日から昭和47(1972)年1月6日にかけて実施された。調査は4次のC・D・Eトレンチの北側隣接地域と、西側に隣接する未調査地(1～4次調査地以外の地域)について実施された。調査主体は前回の4次調査と同様に加世田市教育委員会であった。これについて、調査報告で「調査の実施について、立案、運営など諸般の仕事を円滑に推進して頂いた」と述べ、強い感謝の意を記している(表2文献4)。

4次調査の体制が、それまで以上に多くの参加者を得たことは前述したが、5次調査は、河口が責任者として実施した6回の調査の中で、最も多くの参加者を得た。

県考古学会会員や考古学に精通した学校教員を中心に鹿児島大学・立正大学・明治大学・広島大学・熊本大学の学生、加世田農業高等学校や吹上高等学校の生徒達も数多く参加し、多彩な陣容による調査体制となった。

調査参加者の中には、その後、考古学研究や文化財保護に従事することとなった研究者や行政マンも多く、本県の考古学や文化財を取り巻く世界にとって、記念碑的なイベントであったと言えよう。これについては第3章第1節でも述べたい。

調査主体者 加世田市教育委員会

調査担当者

調査総括	鹿児島県文化財専門委員	河口貞徳
総括補助	鹿児島県立出水高等学校教諭	池水寛治
第一班	ラ・サール高等学校教諭	上村俊雄
	鹿児島市立南小学校教諭	出口 浩
	鹿児島県埋蔵文化財調査員	尾ノ上道雄
	鹿児島県埋蔵文化財調査員	有元彰順
	鹿児島大学学生	福岡啓造
	広島大学学生	西田 茂
	明治大学学生	池崎譲治
第二班	内之浦町立内之浦中学校教諭	戸崎勝洋
	高山町立川上中学校教諭	本蔵久三
	鹿児島県埋蔵文化財調査員	立神次郎
	加世田市職員	当房満也
	立正大学学生	牛ノ濱修
	立正大学学生	瀬戸久夫
	鹿児島大学学生	本田道輝
	鹿児島大学学生	楠原郁子
	熊本大学学生	片岡英治
	予備校学生	中島哲郎
第三班	鹿児島高等学校教諭	酒匂義明
	明治大学学生	中村耕治
	立正大学学生	木下孝司

鹿児島大学学生

鹿児島大学学生

徳留孝次郎

吉永正史

《調査の方法》

前述のように、5次調査は前回の調査を踏まえた結果の設定であったが、具体的には、C・D・Eトレンチの北側部分で確認された「溝状の遺構」の性格を明確にしようという目的であった。その状況について調査報告を引用すると、「遺跡地の中央部が低く、南から北へ傾斜する溝状の遺構が検出されていた。この溝状遺構が北側の断崖までつき抜けているのか疑問であった。又この遺構の成因についても自然の浸食溝であるのか、人工によるものかについても、問題があつて未解決であった」、「この地形が遺跡の中心的な遺構となる可能性が予見されたからである」と述べられている(表2文献4)。

調査は、4次調査区であるC・D・Eトレンチの北側隣接地域(東西16m、南北12mの長方形)のグリッド設定区(1グリッド:2×2m)とその南西部に隣接し、1～4次調査区の間隙部に4本(J・K・L・M)のトレンチを設定して実施された。

③ 6次調査の概要

《調査期間と調査体制》

6次調査は、昭和48(1973)年3月2日～同年3月14日にかけて実施された。調査は5次発掘調査が第3層上部までで中断していたことから、その状態を継続する形で行われた。したがって、調査の範囲は5次と同じということになる。調査主体は加世田市教育委員会である。

調査主体者 加世田市教育委員会

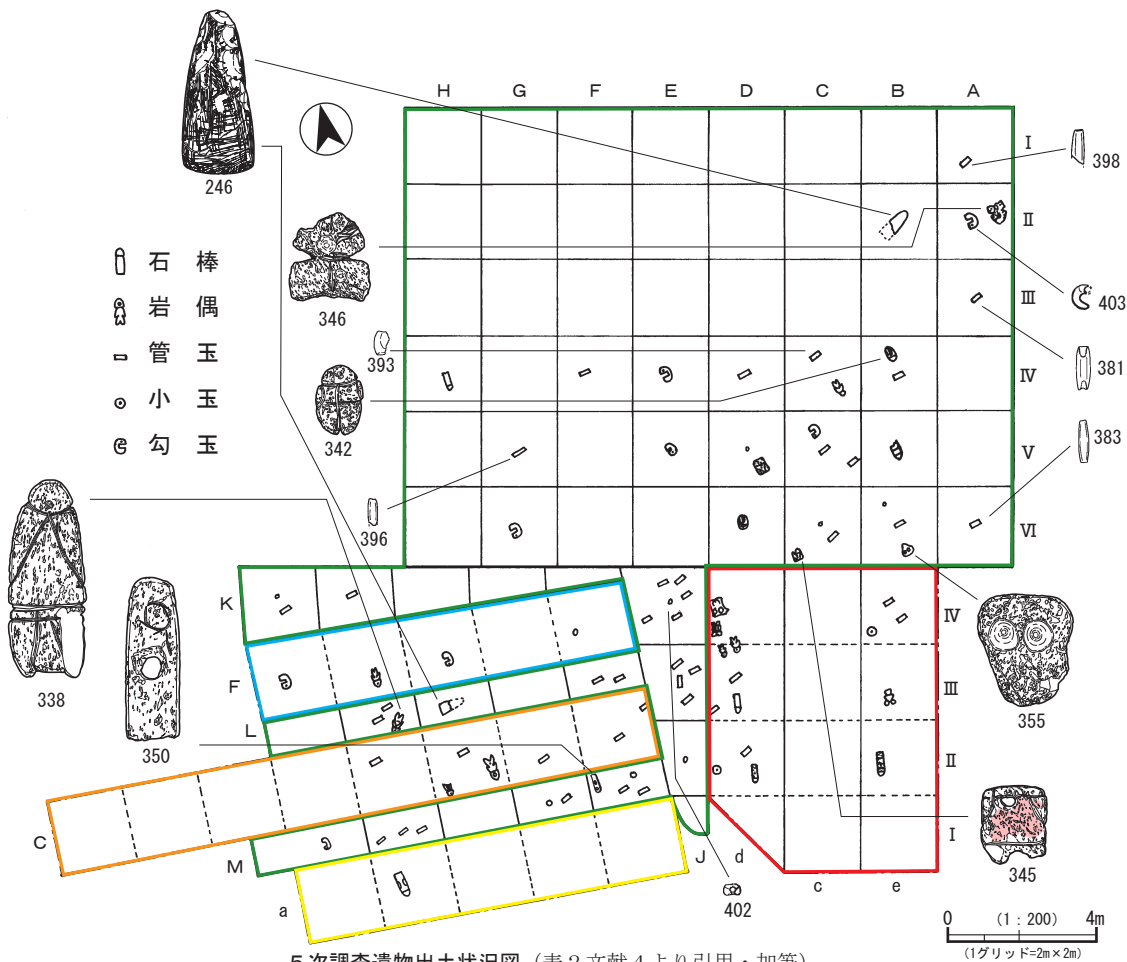
調査担当者

調査総括	鹿児島県文化財専門委員	河口貞徳
第1班担当	鹿児島大学学生	本田道輝
第2班担当	鹿児島大学学生	吉永正史
第3班担当	明治大学学生	中村耕治
測量班担当	鹿児島大学学生	楠原郁子
測量班担当	鹿児島大学学生	旭 慶男

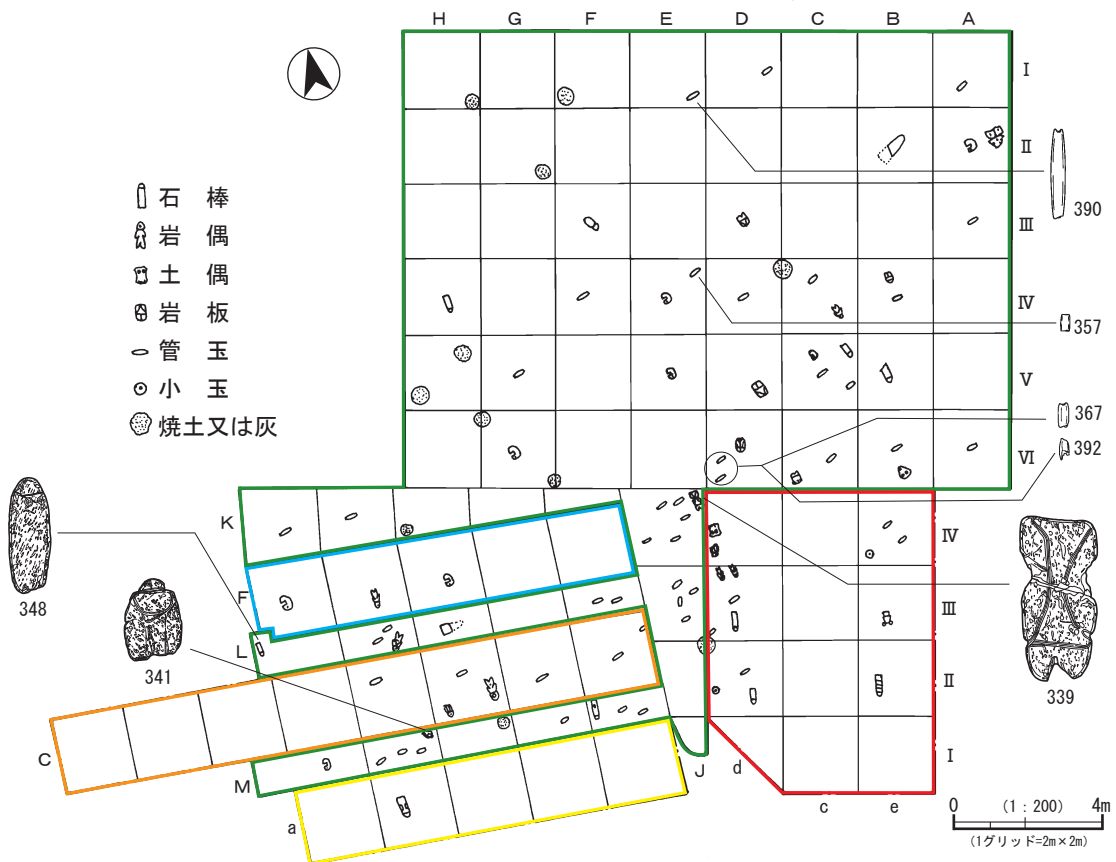
このほか、河野治雄(指宿高等学校教諭)・上村俊雄(ラ・サール高等学校教諭)・有元彰順(吹上高卒業生)・徳留孝次郎・月野真紀(鹿児島大学生)・青木富子(鹿児島大学職員)・遺跡の発見者である当房満也・吹上高等学校社会研究クラブ員・神田康幸(鹿児島大学卒業生)の名前を挙げ、感謝の意を表している(表2文献5)。

《調査の方法》

調査は前述のように、5次調査を引き継ぐ形で実施された。最終的には対象区域を完掘し、「楕円形窪地」のほぼ全形を検出することができた。



5次調査遺物出土状況図 (表2文献4より引用・加筆)



6次調査遺物出土状況図 (表2文献5より引用・加筆)

第7図 5・6次調査遺物出土状況 (表2文献15より転載)

(2) 調査の成果

4～6次の調査域は、ほぼ一つのまとまりとしてエリアを形成することは前述のとおりである。調査成果としての遺構・遺物の記録は、4～6次調査を包括して行うこととする。

遺構について記す前に、4～6次調査成果の中心的な存在である、「楕円形窪地」について触れておきたい。

これは、その一部が4次調査において検出され、当初は「溝状の遺構」と記載され、その実態解明が目的となった5,6次調査でその全貌を確認することができた“落ち込み”のことである。

調査の結果、この“落ち込み”は、「FVI区を最深か所とする楕円形窪地であって、長軸は20mを越え、その方向は北東－南西であり、最深－350cm、窪地縁辺部では－220cmとなり、最深の中央部分の深さ（比高）は－130cmである」と報告されている（表2文献5）。

この報文では、「楕円形窪地」そのものが遺構、つまり人工的な構造物というのではなく、「楕円形窪地が全体として一つの遺構を形成しているものと思われる」と述べられている。ここではそのスタンスを踏襲し、次の「遺構」の項中で、“遺構の集合体”としての「楕円形窪地」を取り上げることとする。

① 遺構（第8～28図）

遺構としては、2層から3層にかけて複数のピットが検出されている（第6図等）。ただし、個別には確実に縄文時代後期末の所産と考えられる2基（いずれも4次調査で検出）について図化した。

1号土坑（第6, 8図）

1号とした土坑は、4次調査で設定されたBトレンチのI区とI'区（途中で拡張）で検出された。

径約100cmの略円形の平面プランを有し、検出面からの深さは最深部で約15cmであった。特徴として次の2点をあげることができる。

1点目は、遺構検出ラインの東端において、9個の角礫が掘り込みラインに添うように集中して出土したことである。日誌等によると、石皿を分割したものである可能性が高いが、残念ながら該当する遺物に出会わず、詳細は不明であるが、写真観察でも石皿の特徴がうかがえることから、意図的に石器片を土坑上面端の一部に配置したものと考えられる。

もう1点の特徴は、埋土中から多くの炭化種実が出土したことである。分析結果（本書のP57, 58）によると、すべてイチイガシであった。また種実の年代測定では、 $2,989 \pm 20\text{yrBP}$ という結果が得られた。

これらのことから、1号土坑はいわゆる貯蔵穴的な機能を持った施設で、分割した石皿を何らかの意図をもって配置した行為も行われていた場所であったと考えるこ

とができる。

1～4, 8・9は土坑1出土の石器である。1は灰色を呈する緻密な安山岩を素材とする五角形鏃で、半円形状の抉りをもち、左右の基端部は斜行する。2は腰岳産とみられる黒色ガラス質の良質な黒曜石製の石鏃である。先端部を欠損するが、両側縁上位に屈曲があり五角形鏃に分類される。基端部はやや丸みを帯び、半円状の抉りが入る。3はガラス質乳灰色で黒色の縞が入る黒曜石製の薄手の剥片を素材とする。下半部を大きく欠損する。先端部を中心に二次調整が見られるが、表裏とも素材剥片の剥離面を残すことから、石鏃の未製品の可能性がある。4は腰岳産類似の黒色ガラス質で縞が入る良質な黒曜石製で、基部側に折れが生じているが、表裏とも丁寧な押圧剥離が施されており、石鏃先端部の破片とみられる。

8は灰茶褐色に白色の縞が入る頁岩製のスクレイパーである。厚みのある剥片を素材とし、左側縁下半から下縁にかけ背面側から粗い二次調整を施し刃部とする。刃部はやや角度があり、使用によるとみられる剥離や摩耗が生じている。9は多久産の可能性のある灰褐色を呈する緻密な安山岩の不定形剥片を素材とするスクレイパーである。図下辺を表裏から細かい剥離を施して刃部とする。刃部には摩耗が観察される。

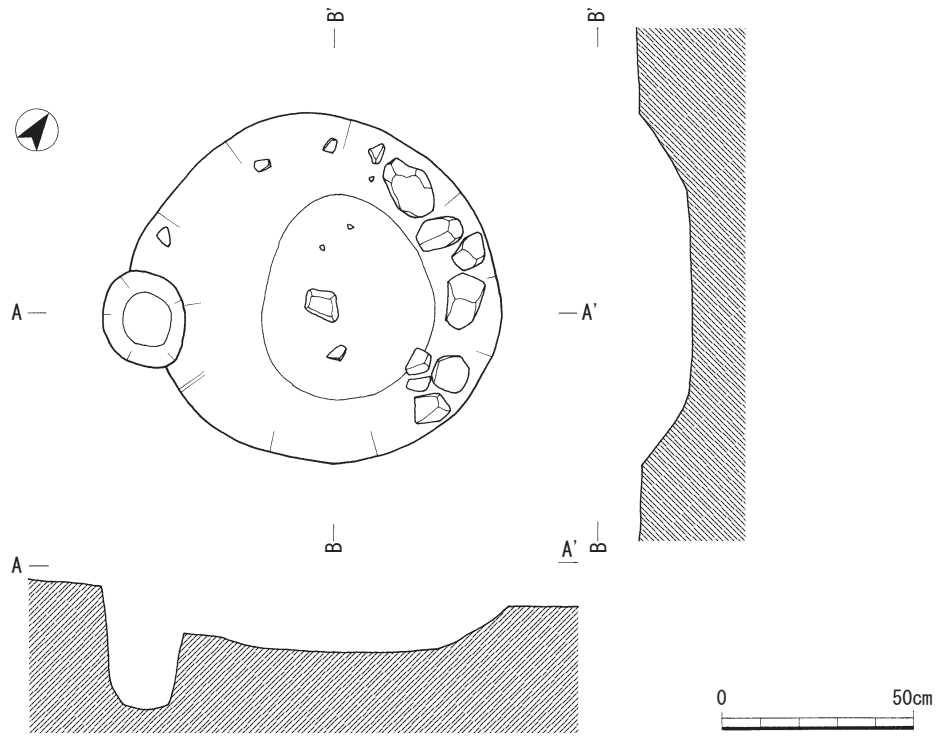
2号土坑（第6図）

2号とした土坑は、1号土坑と同じく4次調査で設定されたBトレンチのV区から検出されたもので、遺構の全容を確認するために北側に拡張した結果、BとB'区を中心に、調査中盤に設定されたEトレンチまで広がる大型土坑であることが判明した。

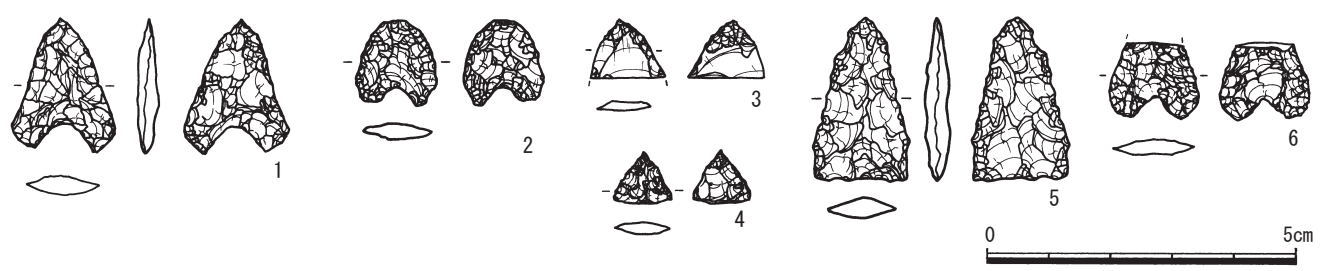
長軸が約180cm、最大短軸が約135cmを呈する略長方形の平面プランをもつ土坑で、深さは良好な検出面付近で約20cmであった。当初I区側で検出された結果をもとに、より慎重な検出を試みられたI'側では、やや高い位置で検出することができたこともあり、第6図のようなやや変則的な実測図となっている。おおむね足形状の長方形土坑ということができよう。

5～7は土坑2出土の石器である。5は黒色を呈する緻密な安山岩の薄手の剥片を素材とする二等辺三角形鏃である。左側縁先端近くに小さな欠損があるが、その対角位置及び両側縁基部近くに小さな屈曲があり、やや長身の多角形鏃とみることもできる。

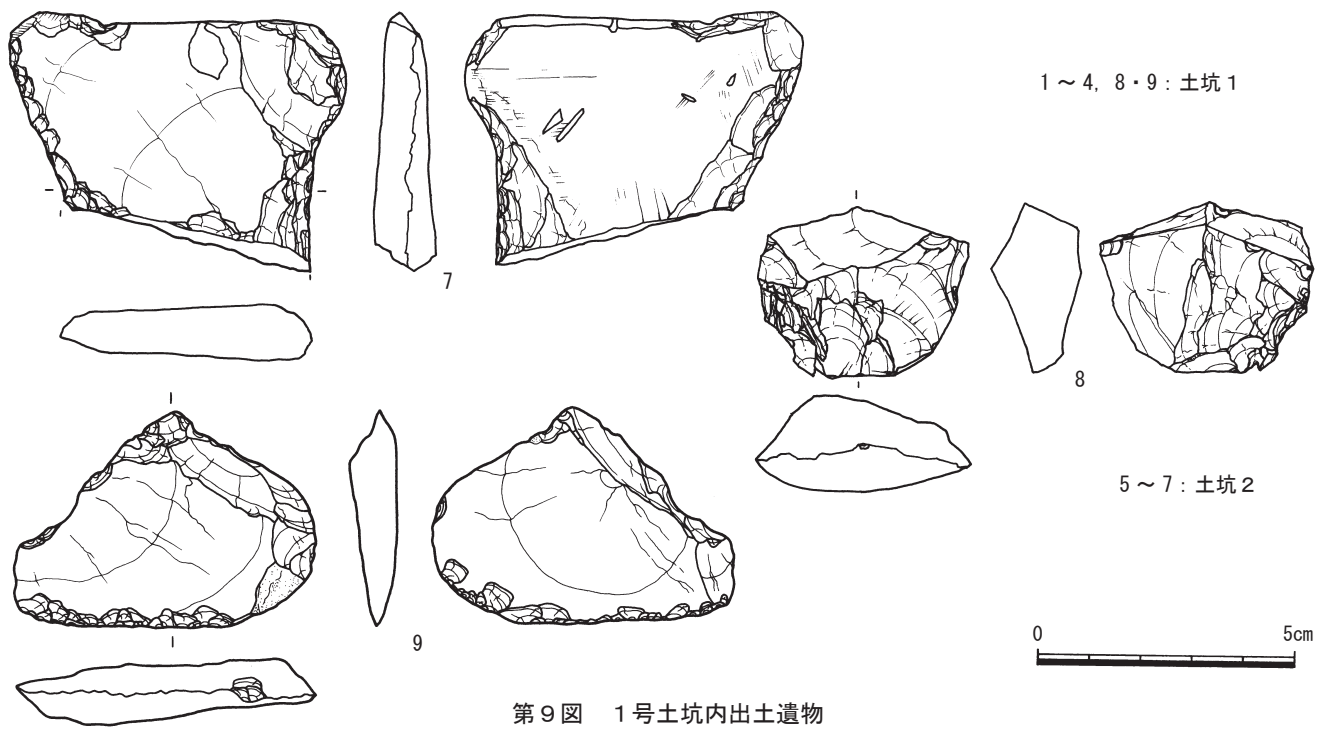
6は白色を呈するチャート製の石鏃である。上半部を欠損するが、比較的丁寧な押圧剥離で薄みに仕上げられている。7は灰褐色を呈するホルンフェルス製の二次加工のある剥片である。下半部を大きく欠損するが、残存部両側縁は剥離調整により抉り状に調整され、図裏面側には摩耗や擦痕が観察される。打製石斧の基部破片である可能性が高い。



第8图 1号土坑实测图



1~4, 8·9: 土坑1



5~7: 土坑2

第9图 1号土坑内出土遗物

「楕円形窪地」エリアの遺構

ここでは、4～6次調査域の中で、大量の遺物が出土し、かつ“遺構の集合体”でもある「楕円形窪地」及びその周辺域（「楕円形窪地」エリアと呼ぶ）から検出された遺構について整理したい。

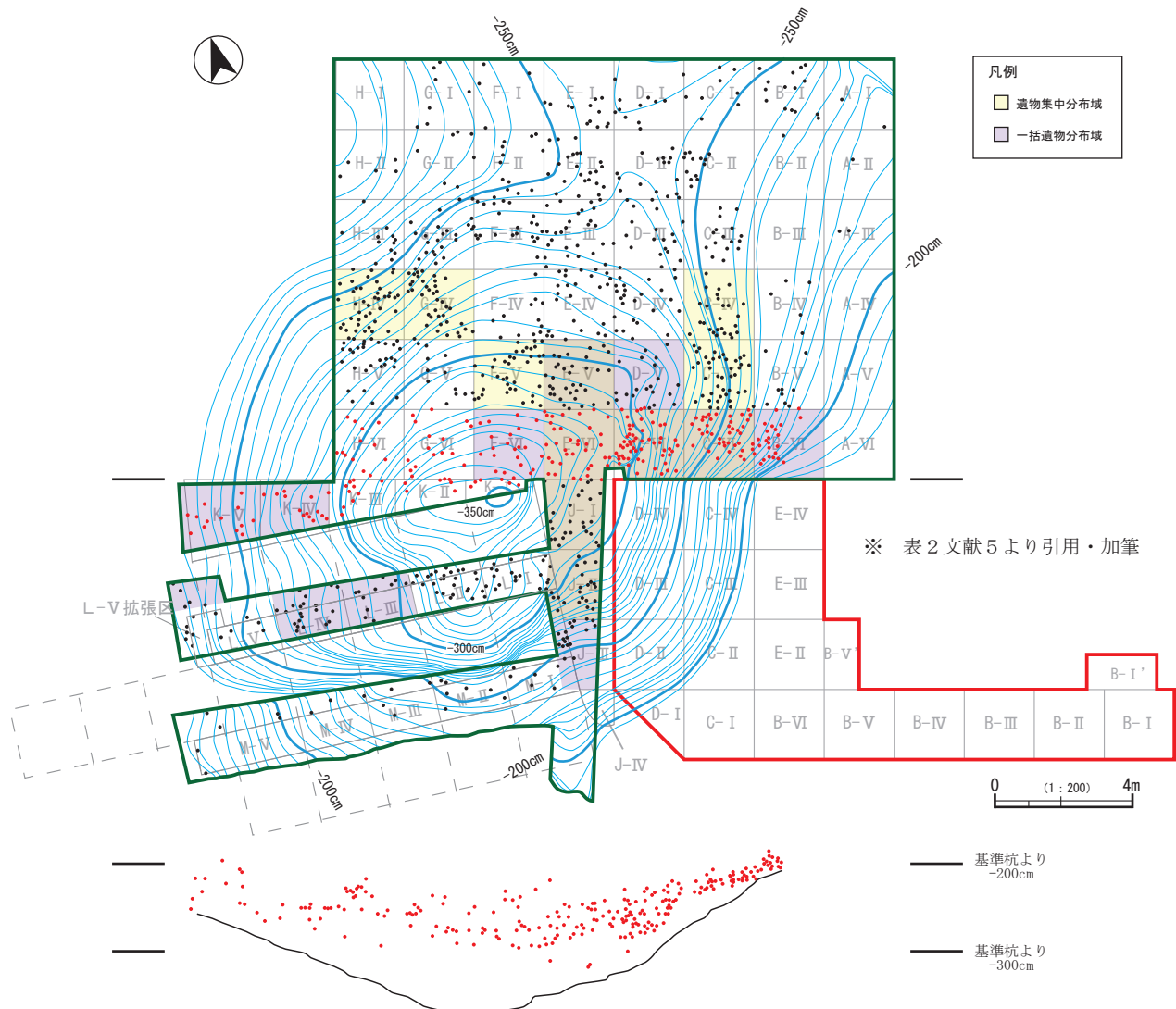
4～6次調査の調査域と「楕円形窪地」エリアの遺物出土状況を概略整理したのが第10図である。第11図では、上加世田遺跡出土品の特徴でもある軽石加工品（岩偶や石棒等）や玉製品（勾玉や管玉、有溝砥石等）の出土状況を示した。いずれも河口等の調査報告をもとに、南さつま市教育委員会によって改めて作成されたものである（表2文献15）。第11図に関しては後述（第3章第2節）するが、まず、第10図を参照に「楕円形窪地」の形状について少し触れておく。

「楕円形窪地」は4次調査で「溝状の遺構」的な部分として認識され、5、6次調査によって全貌を確認する

ことができたことは前述した。当然、6次調査後の方が深度も増し、楕円形状も広がっている。6次調査終了時を記録した第10図をみると、「楕円形窪地」の北東側の壁がやや低く、くびれ状のコンターラインを示し、開放されたような状態となっていたことがわかる。

この開放部分について5次調査終了時の図面（今回不掲載）を見ると、おおむね東西方向に走る帯状硬化面（当時の実測図には「盛土(かたい)」と注記されている）が（図版14右下写真参照）、さらにその南側には、ほぼ垂直な段（約30cmの高さ）が記録されていた。

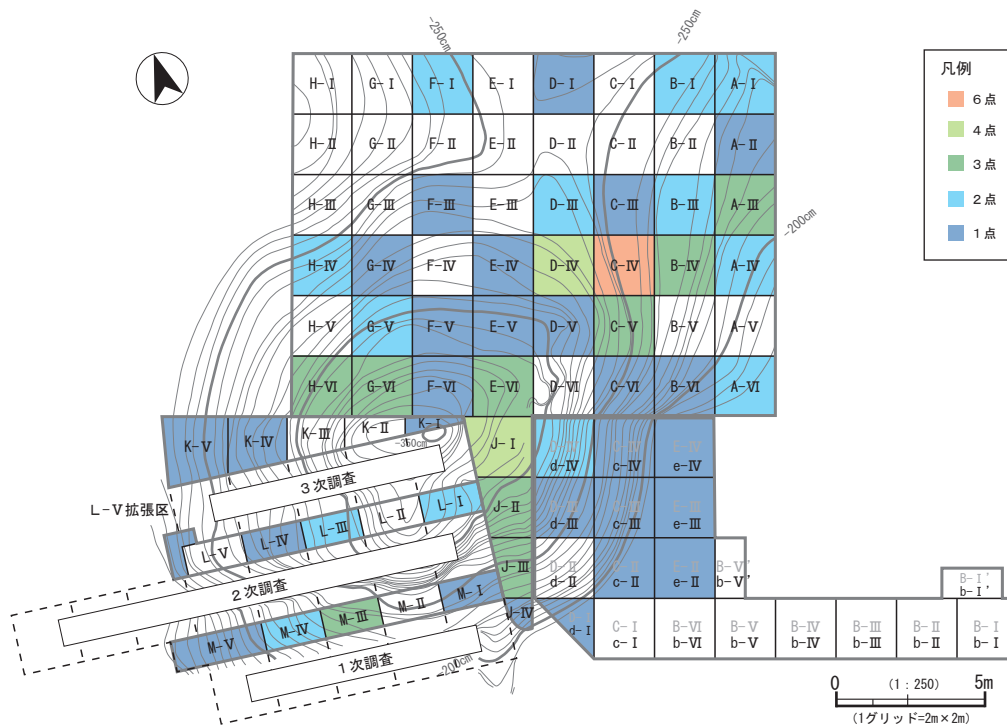
5次調査における第一班の班長であった池水寛治は、日誌中でこの帯状硬化面について触れ、「2層面に認められた粘質の固い帯状の層」（1972.1.2付）、「道路？状、堅い土層」、「堅い土層面の厚さは10cm位である」（1972.1.3付）、「コラ層と上部にあった帯状の黄褐色粘質の固い層」（1972.1.4付）等と記している。また、帯状硬化面と垂



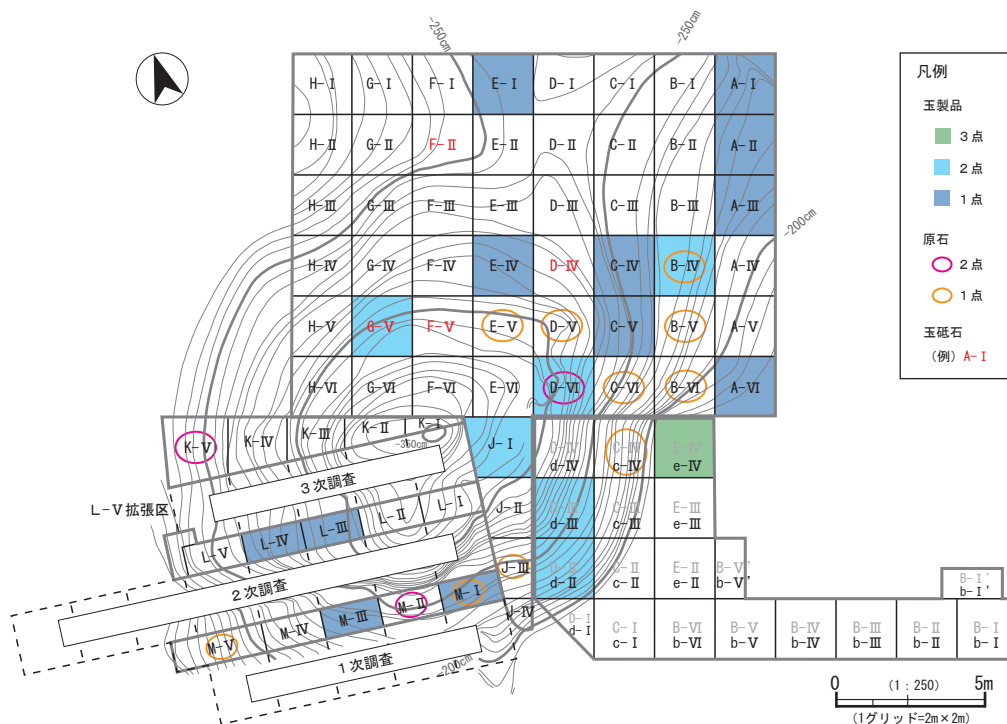
第3層下部の特徴ある遺物出土断面図（Kトレンチ及び6列、縦：横＝5：2）

（註） トレンチ区画は報告時のまま引用

第10図 第3層下部地形図および遺物分布（表2文献15より転載）



軽石製品・軽石加工具出土状況



玉製品・原石・玉砥石出土状況

第11図 楕円形窪地およびその周辺の遺物出土状況 (表2文献15より転載)

直な段との関係について、調査責任者の河口の日記の中に、「道路と称した部分の硬い面があったために発掘が制約を受け、不自然な段が出来てしまったので、明日はしゅう正(ママ)を要する」(1972.1.2付)と記している。

以上のことから、この帯状硬化面は、「楕円形窪地」の北東部に位置する、やや壁の低いくびれ部分を、遺跡が立地する段丘崖上を東西に移動する手段として利用していた通路(道)の痕跡と考えられよう。

その時期については、2層中検出ということで、弥生時代から中世頃が想定され、多様な活動が展開された縄文時代後・晩期との時間差が考えられるが、通路機能としての初源が、縄文時代後・晩期であったことを否定するものでもないこともまた事実である。

さて、この「楕円形窪地」そのものが遺構(人工的に掘削されたもの)ではないということについては、第12図の土層断面図がその証左になると考える。この断面図は4次調査において作成されたもので、調査区域の北壁を記録したものである。これによると、西から東へd・c・eと続くトレンチのうち、東端にあるeトレンチの半ば程から西側へ、つまりc・dトレンチ側へ土層が傾斜していることが分かる。遺物を多く包含する3層も西側へと傾斜している。さらに、その下層の4層や5層も西側へ傾斜していることが明瞭に記録されている。つまり、「楕円形窪地」は元来自然地形であることを示す記録となっている。

4次調査区の北側境が、偶然にも「楕円形窪地」の傾

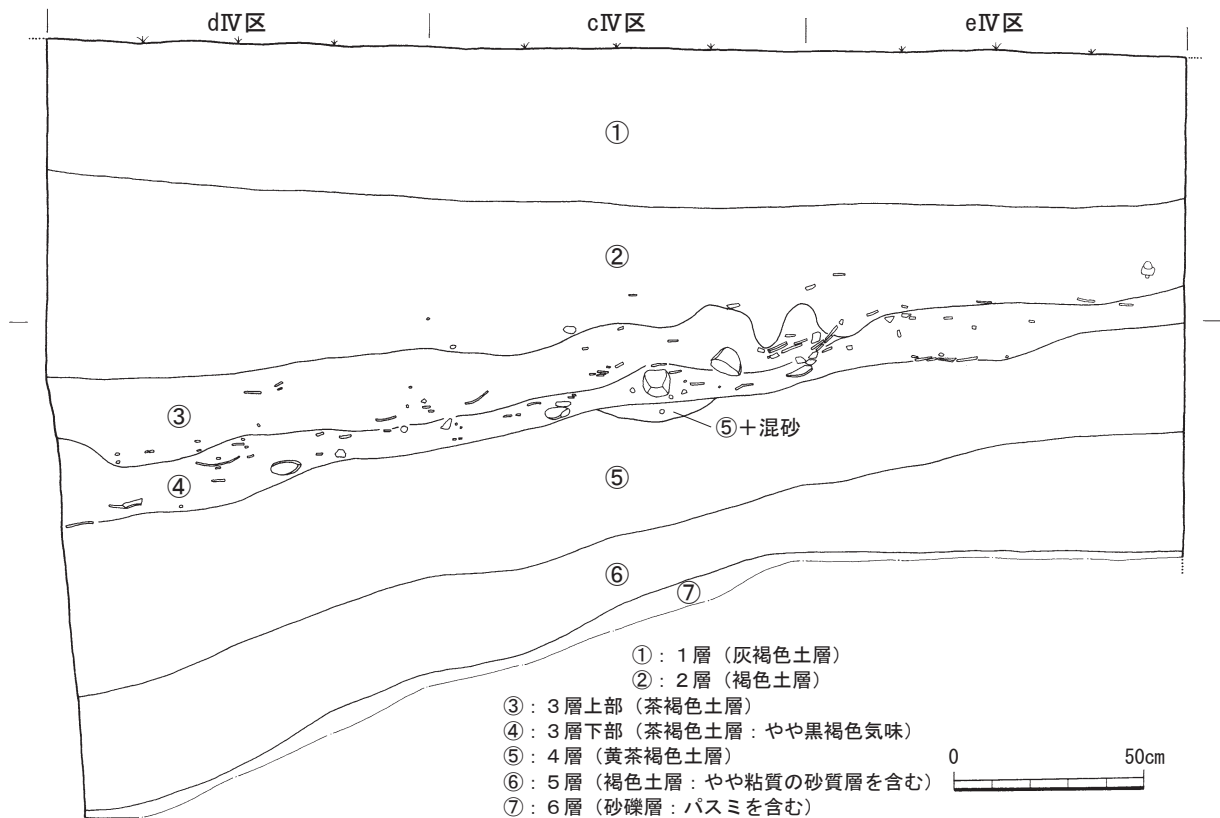
斜を示す位置にも当たっていたこと、さらに遺物包含層より下位層まで確認されていたことから、重要な記録が残されることとなった。

ただ、このことだけで「楕円形窪地」そのものに手を加えていないとは言い切れない。自然の窪地を利用する上で、場合によっては多少の整形を加えていた可能性も否定できない。当時別府大学の学生で、4次調査に参加した弥栄久志は、「窪地の傾斜は、階段状になっていた」と語っている。ここでは、自然の「楕円形窪地」がまず存在していたということを確認しておきたい。

さて、このエリアからは、礫群・焼土域・灰土域などの遺構に加え、完形もしくは完形に近い土器・土偶・岩偶や岩版等の軽石加工品、勾玉や管玉・小玉等の玉類が出土するなど、遺物の出土状況そのものが遺構的な性格を持つのではと考えさせられる箇所も数多く検出された。

実際、第13～28図のように、遺物や礫等が密集して出土しており、どこまでが意図的な状態であるのか、あるいは無意識で単純な廃棄行為の蓄積なのか、把握するにはなかなかの困難さがある。つまり、複数の遺構や遺物が、どのように有機的な繋がりを持ち、どのような関連性があるのか無いのかについて、決定的な要因が掴めないという事実がある。

そこで本報告では、まず明らかに一つの意図的なまとまりとして考えられる礫群を抽出し、それぞれに付随・関連する可能性のある要素について追記・付記していくこととしたい。



第12図 4次調査区北壁土層断面図

なお、ここで用いる礫群という用語は、旧石器時代の遺構名として登場するのが一般的である。拳大ほどの礫の集合体として呼ばれているが、縄文時代のものになると集石遺構と呼ばれることの多い遺構である。

言い換えると、縄文時代の遺跡内から検出される礫の集合体の多くは、集石遺構と呼ばれる場合が多いということになるか。ただし、その多くは石蒸し料理に関係するものという解釈が強く、集石遺構＝石蒸し料理場のイメージが強いのもまた事実である。

今回対象とする礫の集合体は、石蒸し料理場の跡という状況ではない小礫の構成であったり、逆に石皿片状の大片の構成であったり、土器片が多く絡んだりしているパターンが多い。

よってここでは、調査報告でも使用されている礫群という用語をそのまま用いることとしたい。もちろん旧石器時代を対象とするものではなく、縄文時代後期後葉の所産と考えられる遺構のことを指している。ちなみに、本県において集石遺構という考古学用語が登場するのが昭和50年代に入った頃からのなので、上加世田遺跡の1～6次調査及びその報告がまとめられた時点で、集石遺構という用語自体が使用されていない。

ここで取り上げる礫群は10か所14基である。

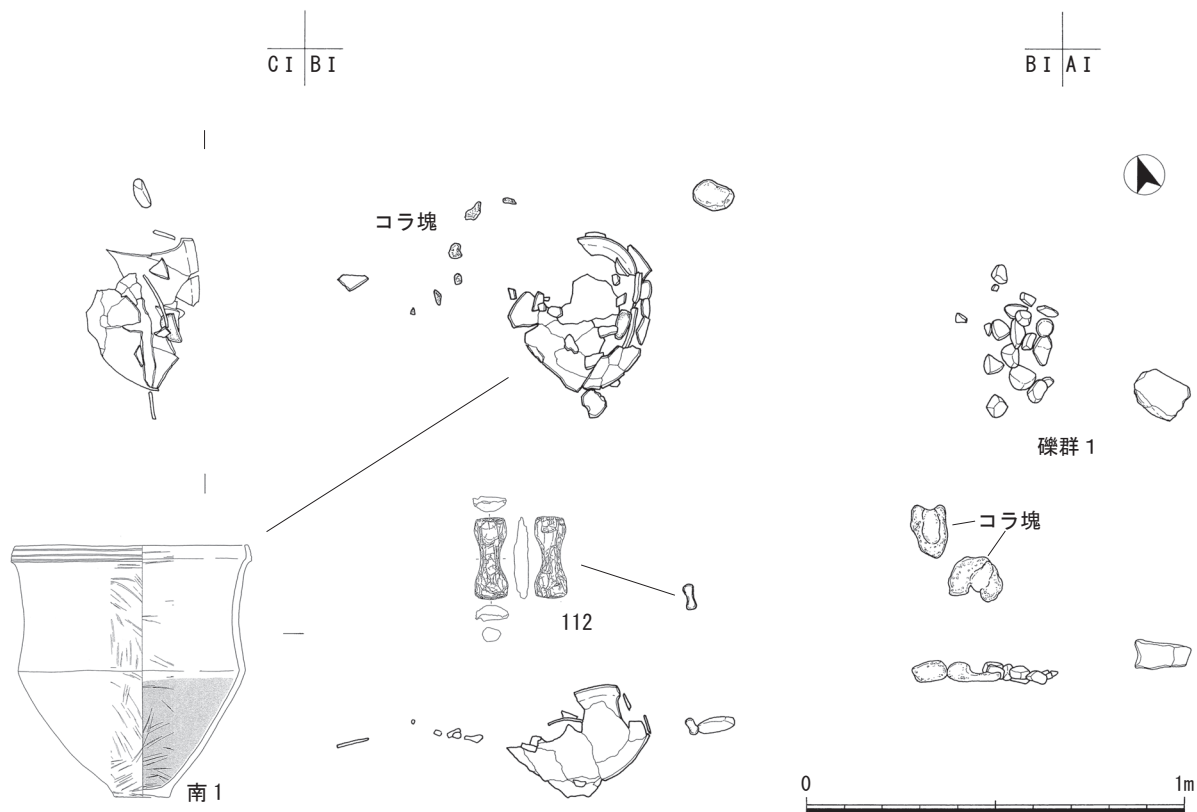
礫群1（第13図）

礫群1とした遺構は、6次調査で検出されたもので、

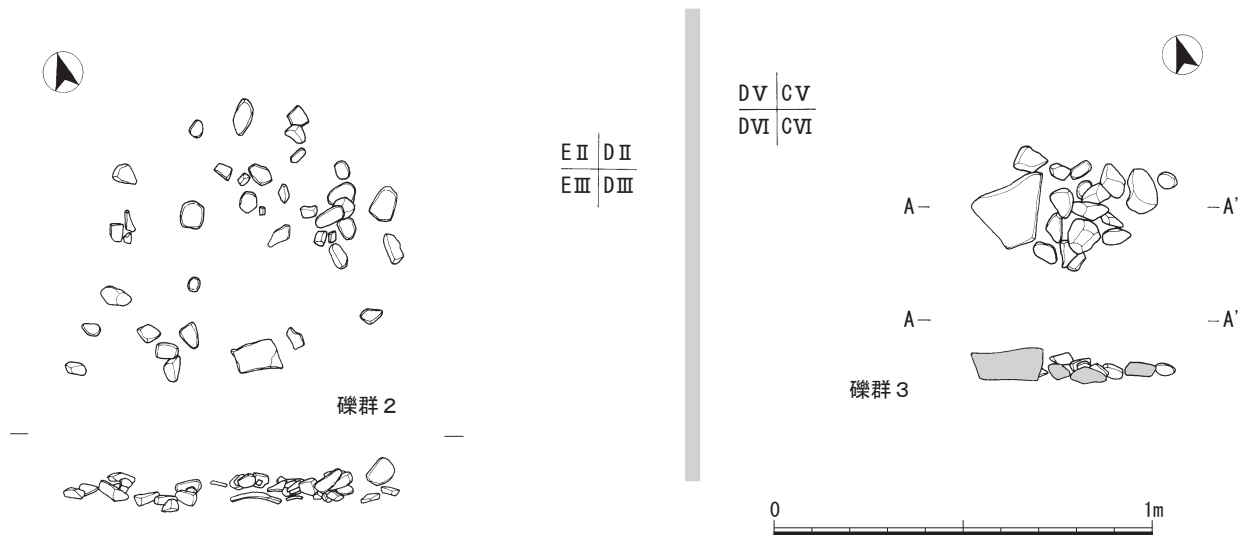
調査区の最も北側部分（A,BⅡ区）に位置している。礫群は、3層下部中から検出され、小礫約15個で構成されていた。西に約90cm離れて深鉢の大型品が出土しており、6次報告（表2文献5）でも、両者を含む出土状況図が掲載されている。「楕円形窪地」からはやや離れているが、ここではエリア内として取り扱った。「楕円形窪地」の北側で検出された「帯状硬化面」の外側に位置する。

6次報告によると、礫群の中央部には「三角形の小礫が立てた形で埋地」されていたとある。また、東に20cm離れて、「上面を摩耗した角礫（人工的に割られたもの）が配置」してあったとある。

また、ほぼ完形の深鉢は、推定口径36.8cm、器高39.8cmを測る大型品で、6次新報告（表2文献15）の掲載遺物No.1（南1）に該当するものである。6次報告によると、この深鉢は「埋置されていた当初から破損していた」とされ、その理由として、「頸部周辺は他の土器片で補強」されていたと述べられている。また、土器の周辺にはコラ層が分布し、「一部は土器の頸外側に固着しているものが認められる」とある。このことは、開聞岳起源の灰コラが噴出降下した際に、少なくとも深鉢の頸部分は露出していた可能性を示唆する要素であり注目される。さらに、深鉢の内部から「焼けた礫、石ヒ（ママ）が出土し、底部内側には木炭（コゲツキ）が多量に付着」、「土器内の土に混じて獣骨片が少量検出」とある。



第13図 礫群1と周辺遺物の出土状況



第 14 図 礫群 2・礫群 3 の検出状況

この深鉢の出土状況は、今目的には埋設土器ということになるか。問題は、礫群 1 と深鉢（埋設土器）との関係である。6 次報告では、「礫群と深鉢は相互に無関係ではなく（中略）一つの遺構として考えるべき」としている。それぞれが、何らかの意図をもって構築されたことは間違いなからうが、お互いの関係性については不明である。ただ、調査区全体を俯瞰した際の近接性は目立っており、セットとしての在り方も考慮する必要があると考えられる。ちなみに遺構実測図は河口作製である。

礫群 2（第 14 図）

礫群 2 とした遺構は、6 次調査で検出されたもので、「楕円形窪地」の東端、「帯状硬化面」西側の第 3 層下部中から検出された（E II, III 区）。長軸 5～10cm 程度の礫、約 35 点で構成されている。礫群内に 5 点の土器片も混在している。これらは径約 70cm 程度の略円形状に検出された。6 次報告（表 2 文献 5）では、「ややまばらな礫群」と記されているのみである。調査日誌によると、「3 個位のすり石（ママ）があるようだ」（1973. 3. 10 付吉永正史記）とある。遺物については確認できていない。

礫群 3（第 14, 15 図）

礫群 3 とした遺構は、6 次調査で検出されたもので、「楕円形窪地」の東南部に位置している。C VI 区の第 3 層下部中から検出された。一辺が 20cm 程ある大形の礫の他、長軸 5～10cm 程度の礫、約 20 点で構成されている。大形礫も含め、焼石と考えられる礫があり、調査日誌によると、周辺には「礫群の他にも礫が点々とみられ、火で焼けたものが多い」（1973. 3. 7 付本田道輝記）とある。

第 15 図にあるように、この礫群の周辺からは多くの遺物が出土した。大形礫も何らかの意図があり持ち込まれたものであろう。土器類には深鉢や浅鉢の大片もみら

れ、出土状況図を実測した本田の日誌には、礫群 3 を含む B, C - V, VI 区に、土器群というエリア（3 × 2m の広がりあり）を設定して記載されている。

礫群 4（第 16, 17 図）

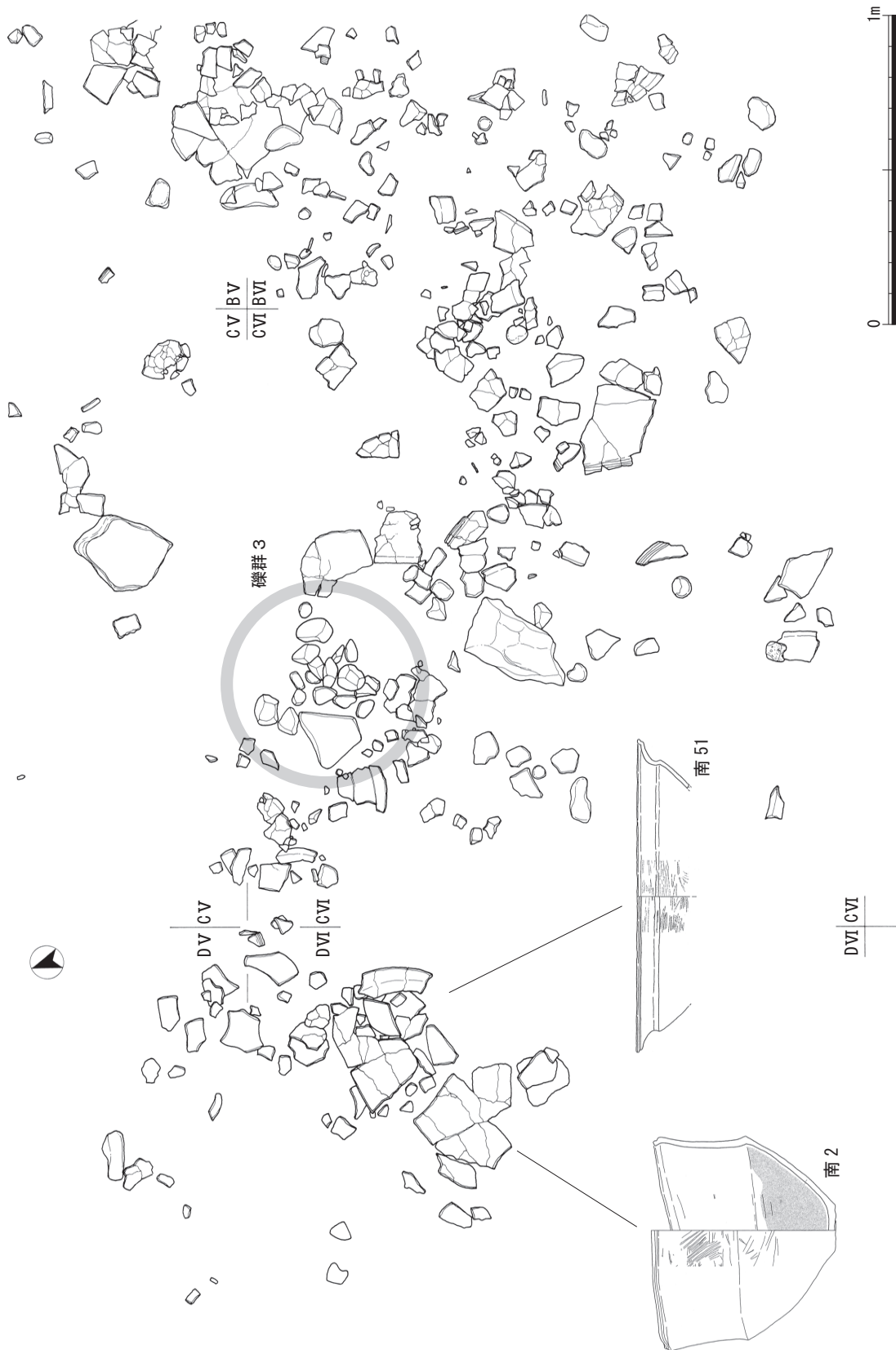
礫群 4 とした遺構は、4 次調査で検出されたもので、「楕円形窪地」の東南側（e IV 区）に位置している。

この付近は、4 次調査域と 5, 6 次調査域の境界線にあり、コンター線の連携に若干歪みが生じている感がある（第 10 図）。一見「楕円形窪地」外に位置しているようであるが、実際には「楕円形窪地」内、東南端に位置するものとして捉えられよう。

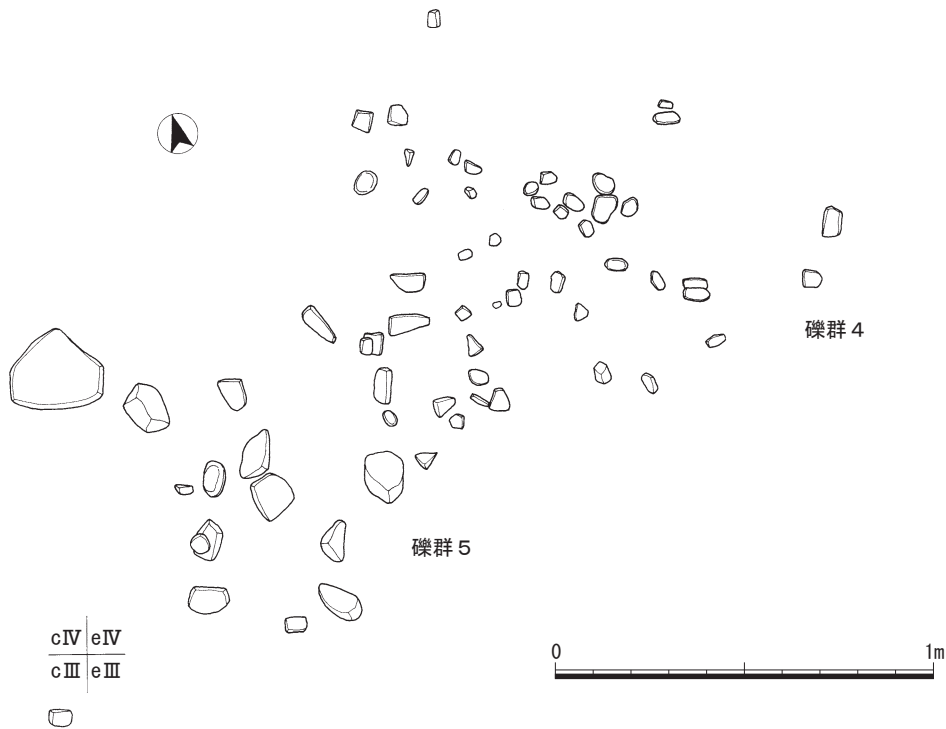
礫群 4 は e IV 区のほぼ中央に位置し、5～10cm 程度の小礫を約 40 個、径約 70cm の円形域に集めたものである。同様に土器小片も 15 点程含まれているが、周辺の土器片よりも小さく、小礫と同様な大きさのものが多いことから、両者には関連性がある可能性が高い。

特徴的な点は、小礫や土器小片と共に骨片・骨粉が出土していることである。4 次報告（表 2 文献 3）によると、円礫群中及び近接した地点では、「硬玉製の玉が合わせて 3 点出土」「炭化した木の実（シイの実、ドングリ）や鳥骨片が散在」しており、「祭祀に関係のある遺構ではないかと思われる」（文責：上村俊雄）と記載されている。

玉類については、河口の調査日誌に小礫群の「南側に硬玉管玉（半欠）が出土」（1970. 12. 31 付）、木下孝司の調査日誌には「管玉（ヒスイ）は、上加世田式土器の口縁部の上に（少し土が有る）乗った状態」（1971. 1. 1 付）で出土したとある。上村俊雄による実測図にも同様な状態で記録されている（1971. 1. 1 付）。この管玉は、4 次新報告（表 2 文献 15）で掲載されている（掲載 No. 391）。



第 15 図 礫群 3 と周辺遺物の出土状況



第16図 礫群4・礫群5の検出状況

同報告では、e IV区のこの他の玉類として、管玉（掲載No. 374）と小玉（掲載No. 399）がそれぞれ1点掲載されている。前述の「玉が合わせて3点」とはこれらの資料の可能性が高い。掲載No. 374の管玉も2層出土ながら、礫群4のエリア内であり、掲載No. 399の小玉は礫群5のエリア内に位置しており、礫群そのものとの関係性が注目される。ちなみに3点の石材はヒスイではなく、「白雲母岩？」と記されている。

「炭化した木の実」については、イチイガシの可能性が高い。また、骨片について、鳥骨片とされているが詳細は不明である。

木炭片や焼土・灰土等の記録はない。また、小礫が火を受けていたかどうかについても取り立てて記録には出てこない。

礫群5（第16, 17図）

礫群5とした遺構は、礫群4の西側に近接し、4次調査で検出されたものである。「楕円形窪地」の東南部（e IV区）に位置している。

長軸10～20cm程度の礫が約20個、径1mほどの円形域にまとまって出土した。4次報告（表2文献3）では特に触れられていないが、河口の調査日誌には、「中礫出土。Cトレの大石の延長上」とあり、C区側との関連性、礫群の広がりについても触れている（1971. 1. 2付）。また「IV区礫群は人工的遺構と思われる」（1971. 1. 3付）という記述も見られる。

礫群4と同様に骨片や炭化種実もあり、「石間から骨片あり。関節1片採集」（1971. 1. 2付河口記）、「間に骨

片多し。炭化物（木の实）少量」（1971. 1. 2付中間研志記）、「4（ママ）区は礫群（比較的大きな）と骨・炭化物が多い」（1971. 1. 2付上村記）等の日誌記録がある。

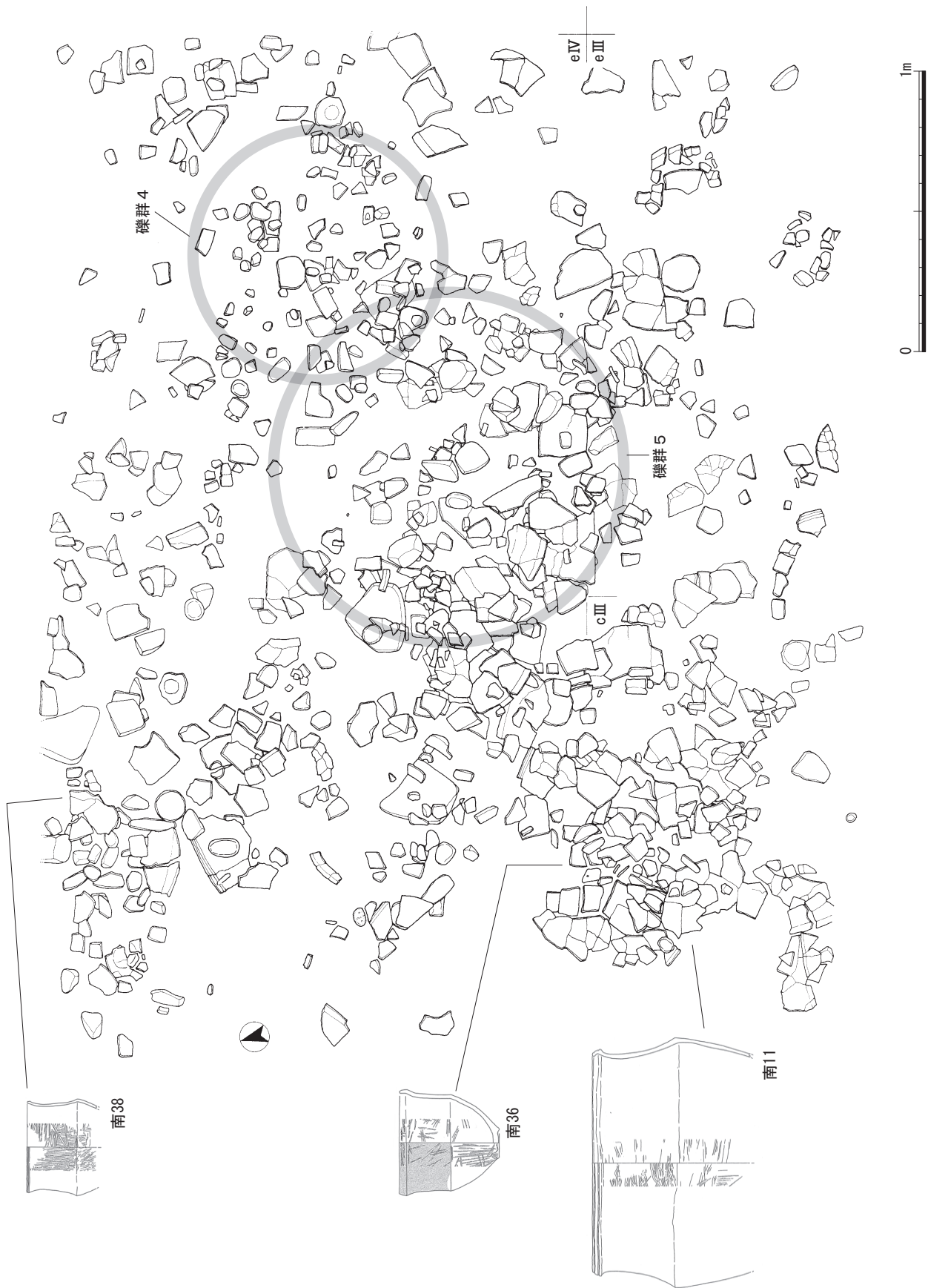
近隣接して埋設土器的な出土状況は見られなかったが、第17図を見れば明らかのように、多くの土器片が出土しているのも特徴的である。これらの土器は、「中礫を昨日取り除いた後を、今日深く掘り下げたところ、また土器群が密集して」（1971. 1. 3付木下記）、「土器群密集出土。10個の群にわかれる。ススが表裏につくものあり。剥片（チャート・安山岩）多し」（1971. 1. 3付河口記）とあり、中礫群下位に土器群が検出されたことが分かる。木下は「破片が小さく、黒いススが付いているのが目についた（表裏にかかわりなく、下になっているほうが、ススが付いていた）」（1971. 1. 3付）と述べ、破片の小ささとススの付着、ススの付着面の在り方に注目している。

礫群4の項でも述べたが、礫群5のエリア内で、小玉（表2文献15：掲載No. 399）が出土しており、関係性が注目される場所である。

礫群6（第18, 19図）

礫群6とした遺構は、「楕円形窪地」の東南部（c IV区）で検出された。礫群4や5より窪地の内側に位置している。4次調査での検出遺構である。

少し長いですが、4次報告（表2文献3）による説明文を引用する。礫群6は、「小円礫が40cm四方に30～40個まとまってあり、その直下に人骨が発見された。骨はほとんど消えかかっており明確な観察はできなかったが、



第17図 礫群4・礫群5と周辺遺物の出土状況

大腿骨か脛骨と思われるものがわずかに形跡をとどめていた。なお人骨の下には、あたかもしかれたような形でさらさらした川砂様の土が、北壁断面にて約10cmのあつさでみとめられた(文責:出口浩)とある。補足すると、小円礫は長軸5～10cm程度の大きさを中心とし、集積状況はかなり密となっている。なお、礫数は実測図で約25個。日誌でも25～30個(1971.1.4付河口記)とあり、4次報告では多めの数字を記載している。

検出状況について、調査日誌からいくらか探ってみたい。河口は「人骨上の礫群」と礫群と人骨の位置関係について述べ、「礫群下に人骨埋葬」とも記し、礫群6が埋葬施設であると認識している(1971.1.4付)。出口は「夕方4時ごろ、北側(4区)に小礫群があらわれ、実測後とり除いたところ人骨と思われるものが出て(足より骨ばんの辺)実測終了した」、「小レキ群人骨(獣骨も散在)」(1971.1.4付)と記している。また、弥栄久志は径「40cm前後の遺構であった。石はいずれも7～8cm位の川原石であった。その下に人骨が出た」(1971.1.4付)と記し、小礫の状態と人骨の位置関係が伝わる内容となっている。

さらには、人骨出土部分の下位の状況について出口は、「人骨をとりぞき、その下にはザラザラした砂質の土が少量分布していた。人骨の下に散布していた」(1971.1.5付)と記している。

以上のように礫群6は、「小礫群」と「人骨」と「砂質土」というキーワードで構成された遺構ということが出来る。骨が人骨であれば、河口の言う「埋葬施設」としての位置づけが可能となろう。

なお、この小礫群が検出されるまで、上位及び周辺からは土器が多く出土しており、小礫群と土器との関係性も注意しておきたい。4次新報告(表2文献15)に掲載された土器もあるが、埋設土器的な状態のものではない。ただし、出土状況図にはかなり接合可能な個体ではないかと考えられるものもあり、小礫群と埋設土器のセット関係を否定する状態でもない。可能性も考えておきたい。

礫群7(第18,19図)

礫群7とした遺構は、「楕円形窪地」の東南部(c IV区)、礫群6の西側に近接した位置で検出された。4や5より窪地の内側に位置している。4次調査での検出遺構である。実測図によると、長軸5～10cm程度の礫約20個がやや縦長(約90cm)にまとまって検出されている。

4次報告(表2文献3)では、「礫群は東西2か所にあり」として礫群6と共に登場する。「西」側の礫群が礫群7で、「西側はややばらばらでまとまりがなく偏平、長楕円形、円形の小石で約20～30個ありその下に人骨はみとめられない」(文責:出口)とあり、礫群6と比較した形で説明されている。人骨を伴うと認識された礫群6のインパクトが大きかったせいも、調査日誌中に近

接する礫群7の記載は見られないが、出土状況実測図は礫群6と同図に記され、比較できる状態であったことが分かる。また同図には、礫群7の南西側に取上No.167と記されたかなりまとまりのいい土器の出土状況が図化されている。その上位の状態を示した図にも北東側に隣接して取上No.137と138、南西側に取上No.139と140が図化され、近隣接した土器が多く出土していることがわかる。このうち、No.138は小型の深鉢で、4次新報告(表2文献15)に掲載されている(掲載No.43)。他の取上No.付土器については、残念ながらどのような土器か照合できていないが、完形に近い深鉢ではないかと推測され、埋設土器としての存在も想定する必要がある。

もう1点注目されるのが、礫群7の北側で岩偶と考えられる軽石加工品が隣接して出土(5次調査:C6区)していることである。たまたま4次と5次の調査区界にあたったため、同時に観察できていないが、お互いの関係性も検討材料であろう。

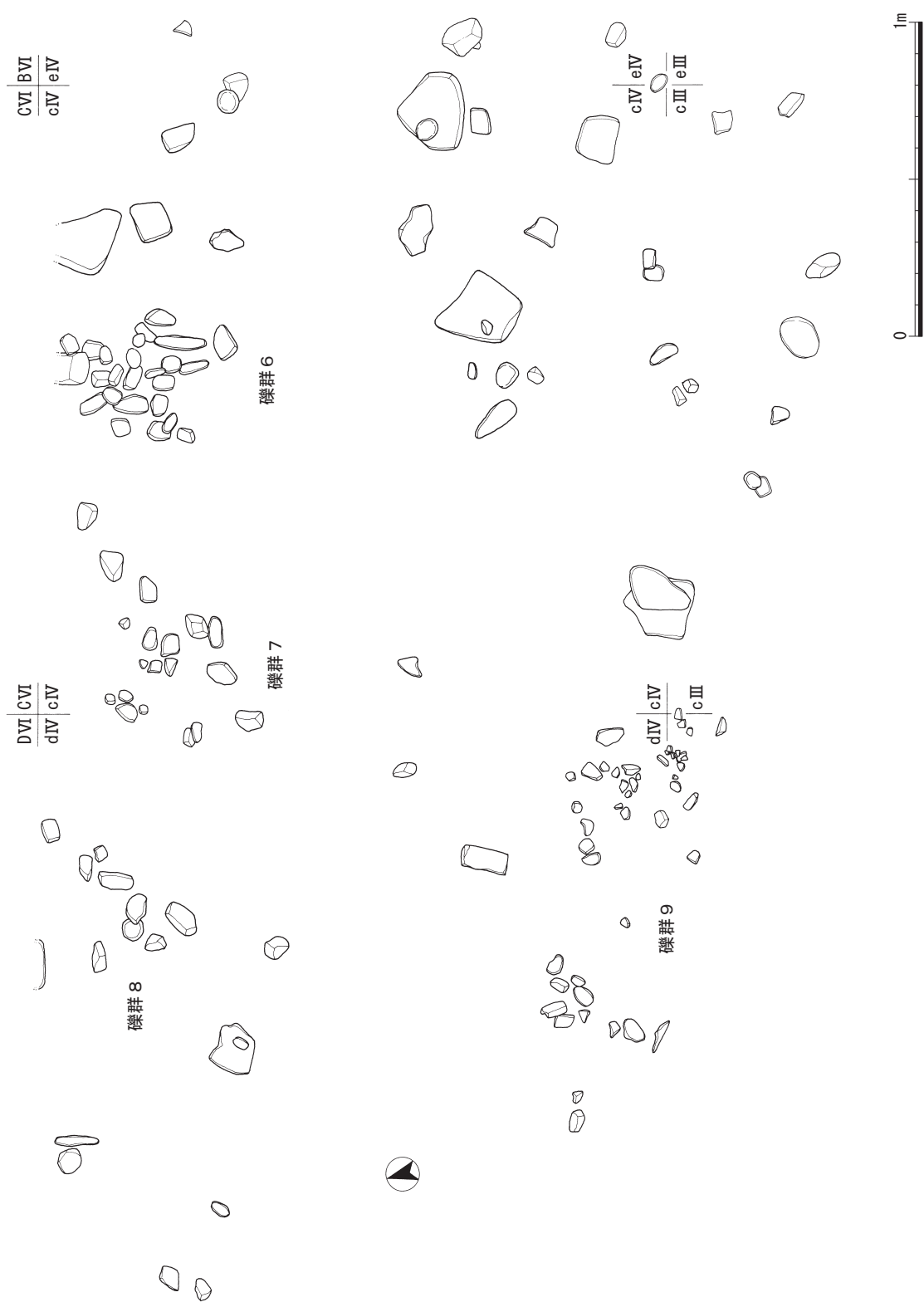
礫群8(第18,19図)

礫群8とした遺構は、「楕円形窪地」の東南部(d IV区)、礫群7の西側に近接した位置で検出された。6や7より窪地の内側に位置している。4次調査での検出遺構である。実測図によると、長軸5～10cm程度の礫15個程度が比較的まとまったという感じで検出されている。

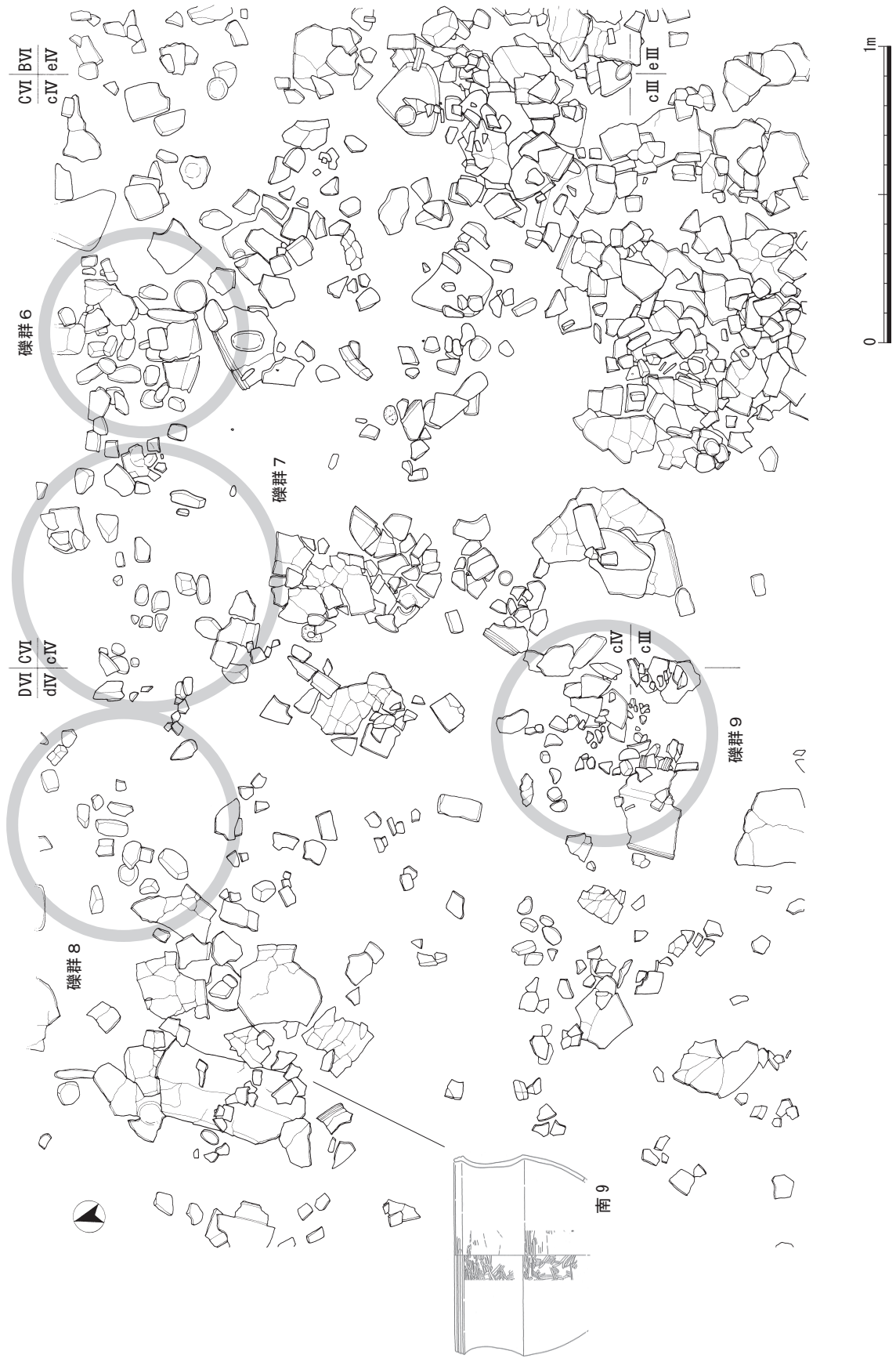
調査日誌によると、調査区北側の「壁に接した小円礫群の下には人骨と認められるものが存在」(1971.1.5付諏訪昭千代記)、「北壁面に人骨が出現し、その下層に土器の内側が弓なりになっており、甕棺の集骨葬制を考慮させられた(1971.1.5付平田信芳記)とあり、礫群7と同様に人骨が出土し、埋葬施設的な考慮の必要性を記している。

関連する土器については、平田も触れているが、諏訪も4次報告(表2文献3)において、円礫群に続く「西側には深鉢と浅鉢が折れ重なってセットを示すと見られた」とある。さらに、これらの土器群を取り上げる際、「人骨と歯牙2本を検出」と記し、「祭祀よりも送葬と深い関わり合いをもつ」と考察している。もう1点特徴的なこととして、土器群の「周囲には相当量の木炭があり土器にも密着」していた様子が記されている。

礫群7及びその周辺の検出状況を作成した出口もまた調査日誌で詳しく触れている。少し長いが引用する。「北東面に小礫群があらわれ、その下に人骨の少量の分布がみとめられた。その西南の大型深鉢土器分布群の下にも人骨の出土がみられ歯も検出された。(中略)この周辺には多量の人骨の粉らしきものがその土器の下よりあらわれている。直径20cmの木炭のかたまりを中心に木炭のうすい層がひろがっており」(1971.1.5付)とあり、複雑な様相が伝わってくる記録となっている。調査責任者である河口の調査日誌にも「土器群下部より人骨、歯



第 18 図 磯群 6 ~ 9 の検出状況



第 19 図 礫群 6 ～ 9 と周辺遺物の出土状況

出土。土器をかぶせた状態。歯の部分に木炭、灰出土(1971.1.5付)と記している。これらは、後述する礫群9や10との関連も含め、極めて多様で濃厚な要素を持つエリアとして注目される。

なお、礫群8の西側に位置する土器群は取上No.163と記録されている。これは4次新報告(表2文献15)の掲載No.9の深鉢で、底部を欠くものの埋設土器としての可能性も考えられる資料である。

礫群9(第18,19図)

礫群9とした遺構は、「楕円形窪地」の東南部(dⅣ区南隅、一部dⅢ区に入る)、礫群8の南側で検出された。礫群6や7とほぼ同レベルで窪地の内側に位置している。4次調査での検出遺構である。

実測図によると、長軸3~10cm程度の礫25個程度が約40cm四方にまとまって検出されている。

4次報告(表2文献3)でdトレンチの記述を担当した担当した諏訪は、「D(ママ)Ⅲ-3の小円礫群に類似した礫群があり、その下からは明らかに人骨と見られる骨片を確認した」と述べ、調査日誌には人骨の出土位置について、「小礫群より-15cm以内の部分(下の方)に之は存在していた」(1971.1.5付)と記し、礫群6や8と同様な性格のものとして記録している。

礫群9の北西側約30cm離れたところに同様な礫が数点集中する部分がある。これらの南側に隣接して出土した取上No.162の土器群が注目されるが、深鉢らしき図が見えるものの、残念ながら照合資料に出会えなかった。

また、実測図には、取上No.162の土器群に包括されるような形で「岩偶」と表現された遺物が記録されている(わずかながらdⅢ区側で出土)。残念ながらこの「岩偶」そのものに取上番号はついていないが、4次新報告(表2文献15)に掲載されている、出土した区や層が不明とされる掲載No.347の軽石加工品が、該当する可能性のあることを考慮しておきたい。出土状況図と遺物実測図が形状・サイズ共に酷似しているからである。

礫群7もそうであったが、「小(円)礫群」と「人骨」「土器群」というキーワードに「特殊遺物(ここでは岩偶)」も加えて検討する必要を意識すべき事例である。

その点について加えるならば、同じdⅣ区内の西壁際で土偶と岩版と岩偶がそれぞれ出土していることも特筆すべき内容である。特に土偶について、出土日の諏訪の調査日誌によると、「4時頃に軽石製岩盤(ママ)を続いて之よりも約20cmの処に女性像の土偶を検出せり」(1971.1.5付)と記し、「本県最初の本格的土偶検出。我が眼を疑うなり」と所見を述べ、驚きと興奮の様子を伝えている。これらとは別に2日前に出土した岩偶も含め、礫群8や9との関係が注目される場所である。

ちなみにこれら3点は4次新報告(表2文献15)で掲載されており、掲載No.は土偶が88、岩偶が344、岩版が

353となっている。ちなみに岩版については線刻のある板状の軽石製品として紹介されている。欠損部があり全形は不明であるが、線刻の様子から岩偶の範疇と捉える可能性もあると考えられる。

礫群10(第20,21図)

礫群10とした遺構は、「楕円形窪地」の南部で礫群4~9の西側、dⅢ区のほぼ中央部に位置するもので、4次調査で検出された。

検出状況実測図をみると、長軸3~10cm程度の小礫が総数60~70個程度、径約80cmの略円形域に集積されており、本遺跡の中では集密度が最も高い礫群と考えられる。

4次報告で(表2文献3)総括した河口は、「礫群の西縁には軽石製石棒(径2.6cm、長さ5.9cm)がわずかに東へ傾いて建てられていた。また北縁には硬玉製管玉で、一部欠けたものが出土している」と述べ、礫群内や周辺から骨片が出土しないことから、「この礫群は埋葬の礫群とは異なる意義をもつものである」と礫群の性格にバリエーションが存在することについて触れている。

調査区担当の諏訪による4次報告の記載には、「円礫の間には深鉢の破片が混在し円礫群の西側端には男根を形どったとみられる軽石製品が東に少し傾斜しながら立った状態で検出され、円礫群に近い下部からは翡翠の管玉(No.140)を認めた」とあり、礫群内には深鉢の破片が混在することや石棒と管玉も出土していることを述べている。管玉のNo.140は取上No.で、4次新報告(表2文献15)での掲載No.は376である。また、軽石製の石棒は掲載No.349である。

また、調査者の一人である平田の調査日誌には、礫群の「周辺に獣骨細片および炭の細片が土の中に混っているのが認められた」(1971.1.3付)とあり、人骨ではなく獣骨片の存在を記している。このことから、前述のように「埋葬の礫群とは異なる」施設としての位置づけがなされている。ただし、礫群10から北西側に約50cm程度離れた箇所には人骨片の集中部も記載されており、どこからどこまでが有機的につながる遺構なのかについては、断定できないといわざるを得ない。ここでは、総体的に俯瞰した見方、捉え方をもとにして、「楕円形窪地」全体が埋葬や祭祀に伴う空間・エリアとして理解しておくこととしたい。

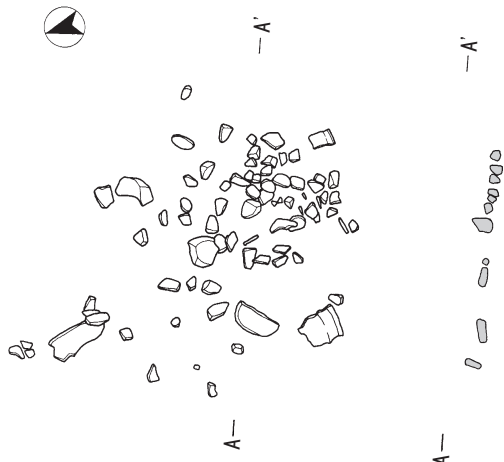
調査日誌によると「小円礫群の下に5~20cm下部に土器がわりにまとまって出土」(1971.1.4付河口記)、「小円礫の下部に鉢形土器(深鉢・浅鉢共)の破片があり」(1971.1.4付諏訪記)と記され、諏訪による出土状況実測図にもまとまった複数の土器群が記載されている。残念ながらその多くについて照合できていないが、礫群10の西側で隣接して出土した取上No.158は、比較的大型の



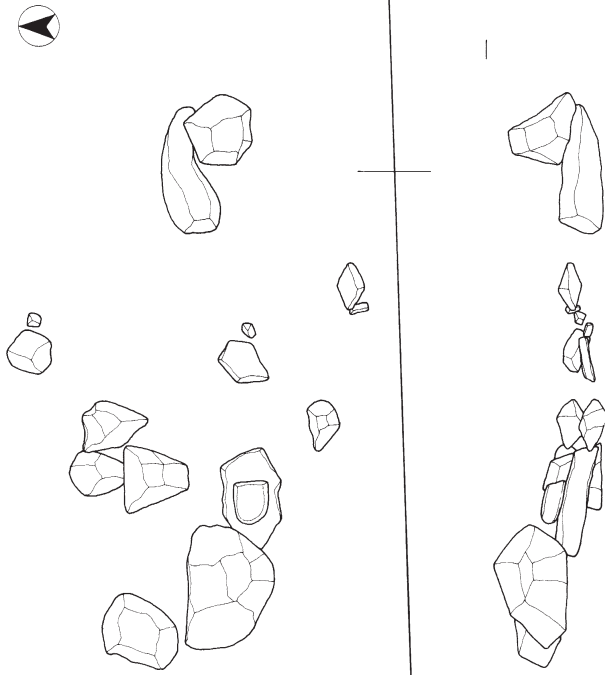
第20図 磁群 10 と周辺遺物の出土状況

dIV | cIV
dIII | cIII

礫群10

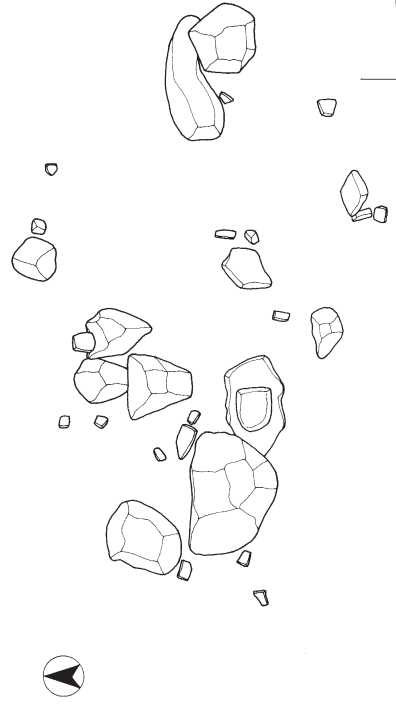


L II | L I



L II | L I

礫群11 上図：礫群11 検出状況
左図：礫群11と周辺遺物出土状況



第21図 礫群10・礫群11の検出状況

上加世田式深鉢として4次新報告で図化されている(掲載No. 19)。その残存度から、埋設土器としてセットされた可能性もある。なお、取上No. 158の土器群の一隅に「骨」と記載されている。前述の骨片のことで推測され、土器(掲載No. 19)や礫群10との関連が注目される。

礫群11(第21図)

礫群11とした遺構は、「楕円形窪地」の南西部に位置し、2次調査区と3次調査区の間に設定された6次調査のLトレンチのⅡ区で検出された。

長軸が約10～30cmの礫を15個程度、150×100cmの楕円形エリアの中に集積したもので、本遺跡検出の礫群の中では最も大形の礫を用いた事例となる。エリア内からは、長軸3～10cm程度の土器片も約20点出土した。

本礫群について、調査日誌では「火にかかった石がかなりある」(1973.3.3付河口記)、「レキの中には焼石がいくらか入っていたようである」(1973.3.5付中村耕治記)とあり、検出状況実測図(1973.3.4付上村・青木富子記)にも焼石と記された礫が3点(大形のもの)が確認できる。実測図には大形焼石の上に磨石が出土した状況も記載されている。中村の同日誌には「レキ群のものにはすったと思われるものがあつたようである」とあり、石皿片が含まれていた可能性もある。また、イレギュラーな出土状況であるがではあるが「レキ群の下に、前平式と思われる土器片が出土」とあり、縄文時代早期土器文化の存在を記録している。これについては、6次報告(表2文献5)の中でEⅣ区から出土した前平式土器の口縁部の写真が紹介されている。

礫群12(第22図)

礫群12とした遺構は、「楕円形窪地」の西部に位置し、6次調査のLトレンチのⅢ区とⅣ区にわたって検出された。同じLトレンチの西側に近接して後述する礫群13が検出されているが、両者には集積の中心位置や構成礫の大きさに違いがあることから、別の礫群として取り扱った。

礫群12は15個程度の礫からなるが、長軸10～20cm程の礫と、5cm前後の小礫が半々ずつという変則的な構成が特徴的である。礫数は少ないが、径1mほどの円形のエリアを形成しているように観察されることから礫群として取り扱った。また、このエリア内には、長軸3～8cm程の土器片も出土している。なお、エリア内ではなく、礫群より若干下位の検出ではあるが、隣接して東側には深鉢と浅鉢の土器が比較的まとまって出土していることも注意しておきたい。

この礫群関連の詳細な記録は確認できないが、6次調査終盤の調査日誌の中に「Lトレ上村実測了。取りあげ了。6個分位浅鉢・深鉢6個あり。セット2ヶ所あり」(1973.3.11付河口記)とあり、Lトレンチ下位でまとまった土器の出土が記録されている。

礫群13(第22図)

礫群13とした遺構は、「楕円形窪地」の西部に位置し、6次調査のLトレンチのⅣ区で検出された。前述した礫群12の東側約1mのところの位置する。長軸5～15cm程の礫約35個(うち1個に焼石との記録あり)が、径約1mの円形エリアの中で検出されている。検出実測図には、1個の礫に焼石との記載がある(1973.3.4付上村・青木記)。近接する礫群12と同様に、長軸3～8cm程の土器片もエリア内で出土しているが、注意しておきたいのは、礫群を取り上げた後に、深鉢片がまとまって出土していることである。出土位置は礫群西側半分の直下に当たる。礫群12,13ともに関係が考えられる土器の照合・確認が出来ず残念であるが、出土状況の意味を考慮する必要があるということは言うまでもない。

礫群14(第23図)

礫群14とした遺構は、「楕円形窪地」最西端のエッジ部分に位置し、6次調査のLトレンチのⅤ区及びⅤ拡張区で検出された。6次報告(表2文献5)の中でも「LⅤ区拡張区礫群」として図化され、報告の本文中では、「石棒を伴う礫群」として紹介されている。少し長い引用したい。「第3層上部に出土したものである。南北45cm、東西35cmの範囲に不規則に集積されている」、「西から東へ緩やかな傾斜を示して、38個の小礫が配列され、その西北端の最高地点に長さ約10cmの軽石製石棒が配置されている」とし、軽石製石棒が伴っている点で、礫群10との類似性が指摘された。

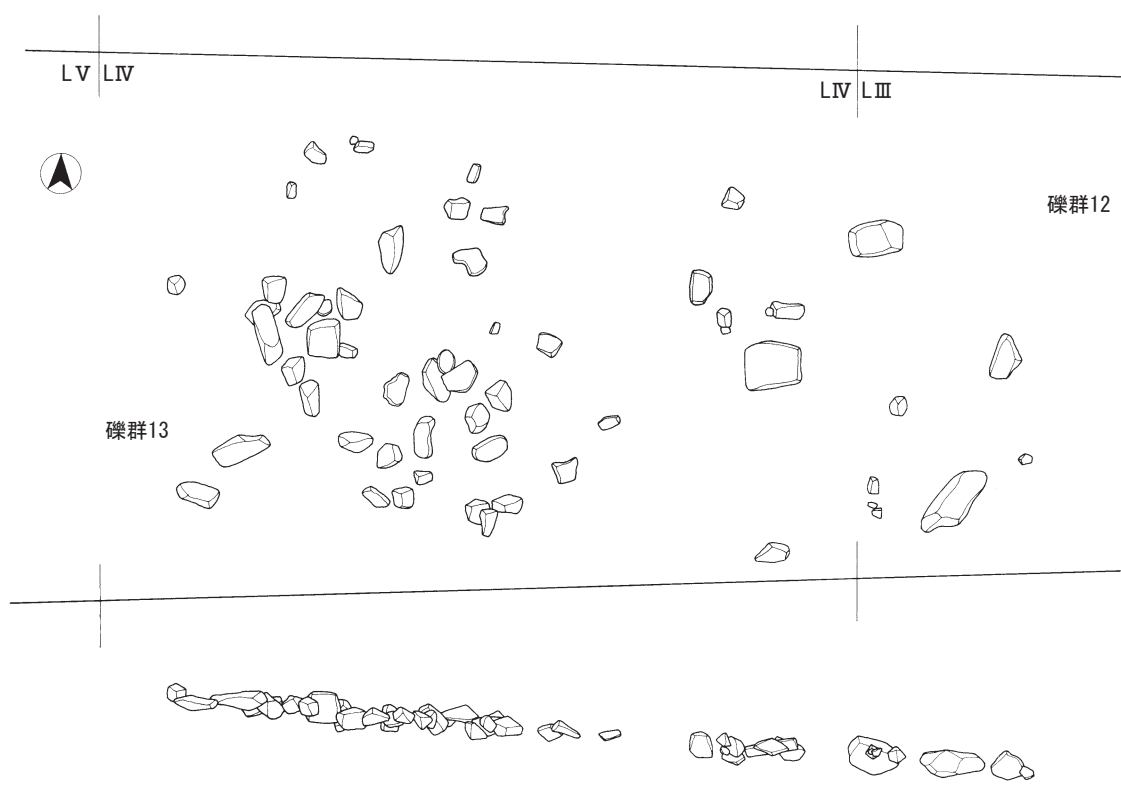
その類似性について「略東西方向に12m余の間隔をもって配置されている」、「今回の石棒は横位であったが、遺構が形成された当時は第4次発掘による礫群中の石棒のように立石として配置されたものであろう」、「石棒の位置も符石を合したように配石の西側にあることも偶然ではあるまい」、「配石を構成している礫が、いずれも赤茶色に焼けている」と述べている。調査日誌でも「3層上部に礫群を発見。軽石石棒をふくみ、第2回目の発見となった」(1973.3.4付河口記)と記されている。

ここでも注目されるのが、土器の出土状況との関係である。ほぼ北側と南側にそれぞれ深鉢と浅鉢の土器集中が見られたことである。礫群よりもやや下位で出土したものであるが、中村の調査日誌には出土地点の略図があり(1973.3.6～9付中村記)Lトレンチの他の礫群と共にされる。

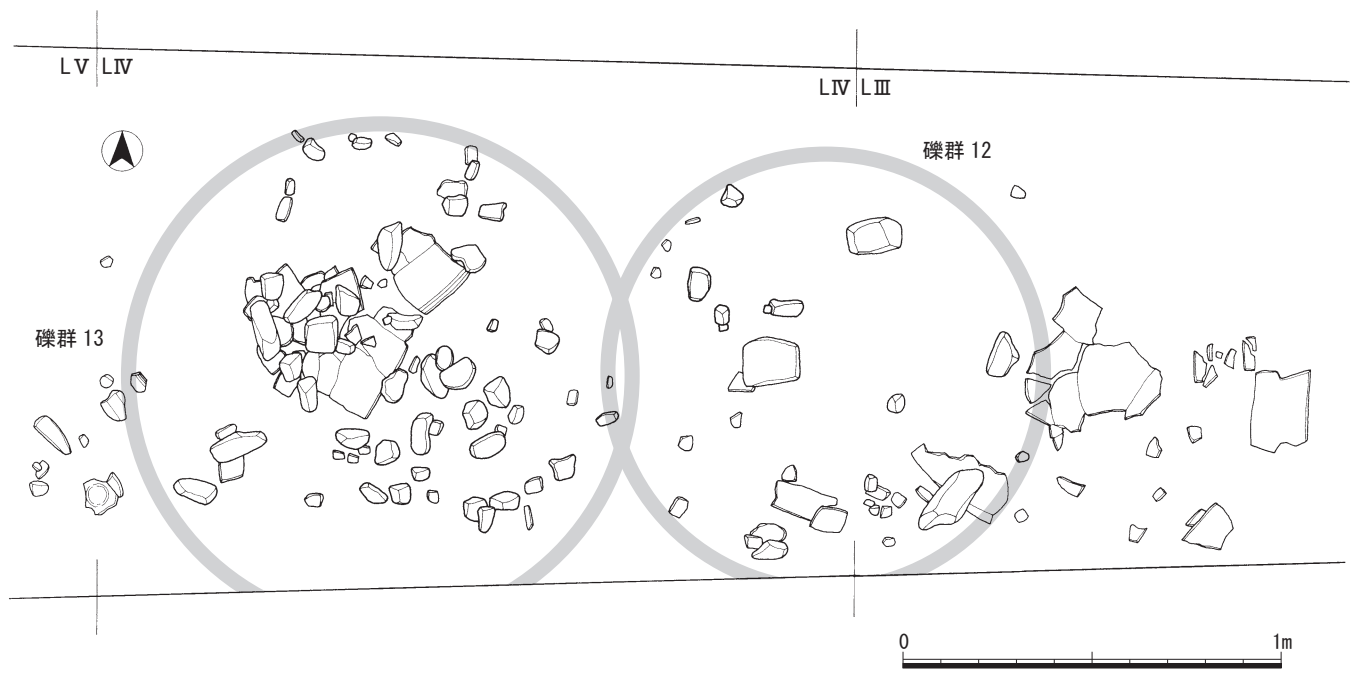
次に焼土域や灰土域についての記録を紹介する。6次報告(表2文献5)の中で「グリッド掘り地区に9か所の焼土部分が発見された」とある。これらのうち、同報告でも図化されている2か所について取りあげる。

焼土1(第24図)

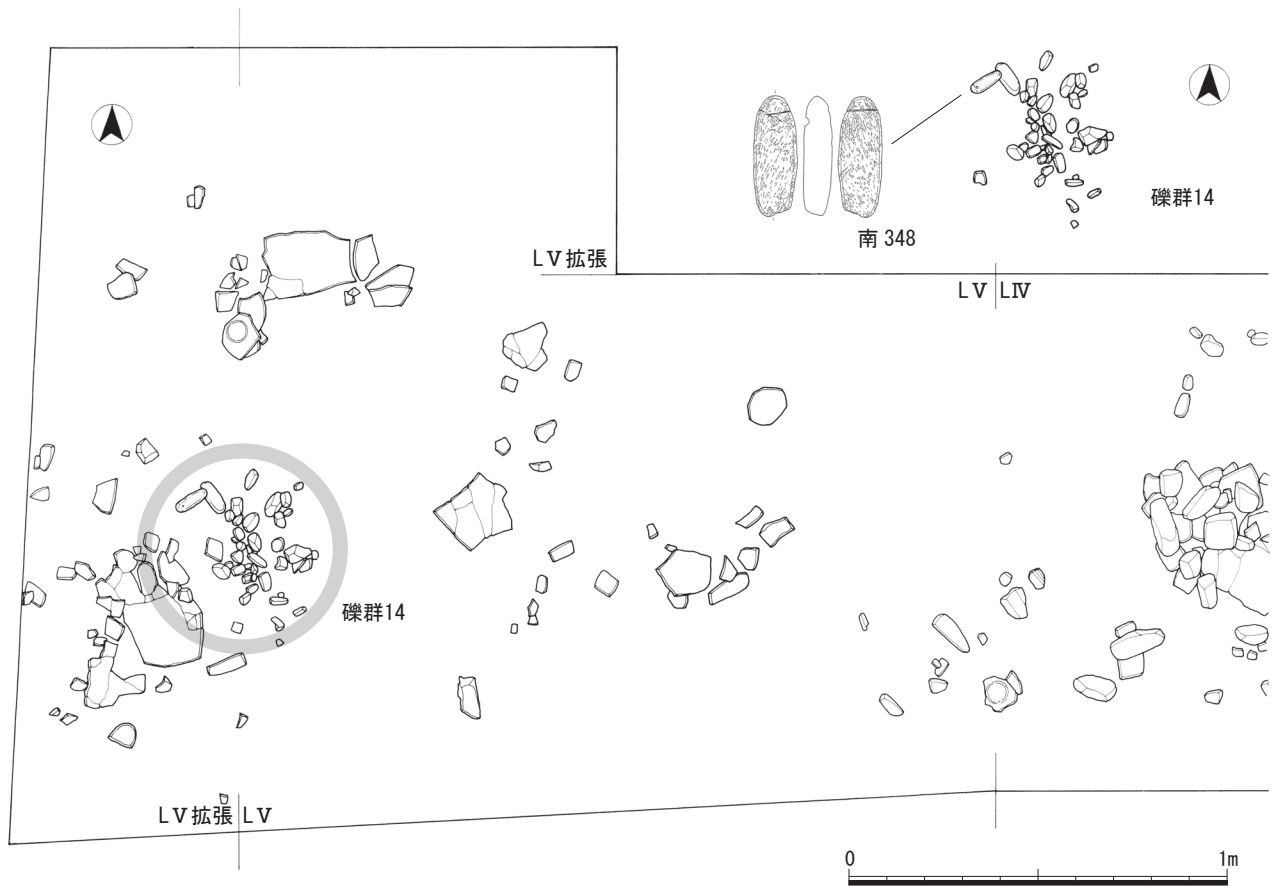
焼土1とした遺構は、「楕円形窪地」の西部、D～E



礫群12・礫群13の検出状況



第22図 礫群12・礫群13と周辺遺物の出土状況



第23図 礫群14と周辺遺物出土状況

IV区に位置し、6次調査で検出された。少し長い楕円形。長径83cm、短径65cmをはかり、(中略)灰褐色の基層の上に厚さ5cmの黒色粘質土が皿状に中くぼみに敷かれ、その上に紅色の焼土が厚さ8cm程にレンズ状にかぶった状態である。中央付近には黒色粘質土の上に土器破片2個が敷かれた状態で発見された。紅色の焼け土の内部から獣骨片、魚の脊椎骨、小礫の出土を見た」とあり、単なる地床炉的なものではなく、粘土敷の構造となっていると観察されている。

焼土域の周辺からはまとまった土器も出土している。約30cm西側で中鉢の完形品がほぼ立位の状態で出土している(表2文献15:掲載No.42)。いわゆる埋設土器的であるが、焼土域との関係については不明である。また、約30~50cm北西側には大型土器片が集中して出土している。残念ながら、照合することが出来ず、詳細は不明である。

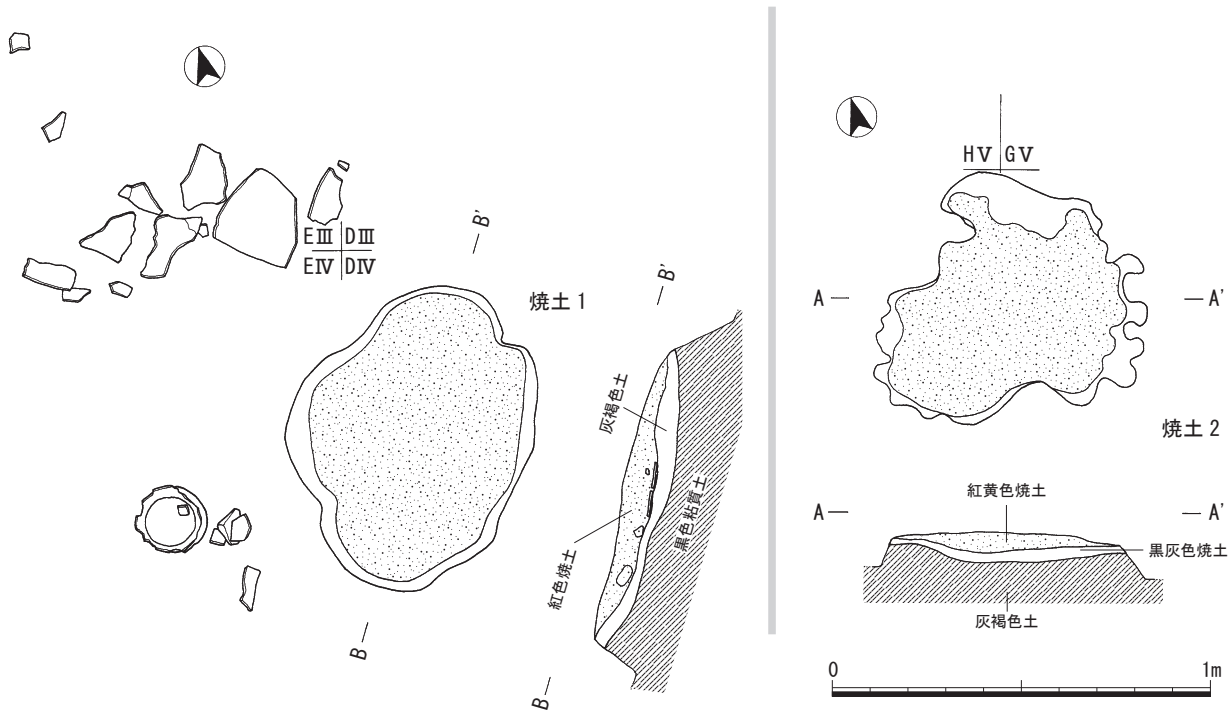
焼土2(第24図)

焼土2とした遺構は、「楕円形窪地」の北部、G~HVI区に位置し、6次調査で検出された。本遺構も6次報告(表2文献5)から引用する。報告では「東西70cm、南北68cmの凹凸のはげしい不規則な形で、内部には小

孔が多数みられる。切断面を見ると、灰褐色の基盤をなす土層の上に、厚さ3cm程の黒灰色の土(焼けている)が中窪みに敷かれ、その上に厚さ5cmの紅黄色の焼土がレンズ状にかぶった状態となっている。その焼土中および表面からは骨片と、焼けた土器片(浅鉢口縁部破片)の出土がみられた」と述べ、焼土1との類似性を指摘している。

調査日誌によると、焼土の「中心部に黄褐色の焼け土あり。焼けた土の中に骨片あり。木炭も少量みられた」として、「会食の後だろう」と推定している(1973.3.10付河口記)。また、検出状況の実測図を作成した吉永正史は「焼け土が不正円形に出土し、上加世田式口縁部が出土している。なお焼土のまわりには灰かそれともコラと思われるものが出ている」(1973.3.10付)、「焼土の中には骨片が出土しており、斜めにpitがはいり込んでいたものがあつた」(1973.3.11付)とコメントしている。

焼土1,2の在り方を踏まえ、6次報告では「意図的に粘土を敷きつめ」、「しばしば火を用いて調理した」、「常設の炉と見ることがより正しい」として、「焼土はむしろ炉址と呼ぶことが適当と思われる」と述べている。そのほか複数検出された焼土域については、「意図的に構築したあとがみられず、自然のままの地上でたき火をく



第24図 焼土1・焼土2の検出状況

りかえした状態」として臨時的な使用の痕跡として、焼土域には2つの種類が存在することを指摘した。

焼土1, 2以外の焼土域としては、6次調査においてあと7か所検出されている。そもそも焼土域として記録された遺構は、大きく3つのエリアで検出されている。焼土1が検出されたD～E-IV区エリア、焼土2を合わせて5か所の焼土域が検出されたG, H-V, VI区エリア、そして3か所検出されたG, H-I, II区エリアである。焼土の在り方、残り具合に違いはあるが、同じようなエリアに集中しているということは、そこが何らかの目的で火を用いる必要のあるエリアであったことを示しているということになる。さらにこれら3か所は、「楕円形窪地」内外の北側に位置していることも注目される。

灰土域

「火」と関係する遺構として、灰土域がある。焼土域とは別に灰土域として検出されたのは、4～6次調査で6か所検出されている。

4次調査ではd IV区とc II区で検出されている。前者は礫群8の西側で検出され、多くの土器と共に人骨片や歯、木炭等が出土したことは前述のとおりである。さらに、その西側、J I区との境界線上において、土偶や軽石製岩偶、管玉等が比較域ままとまりのあるエリアで出土していることも注目されよう。

後者について報文では、「土器群の間に、一部灰のか

たまり状のものや、灰がうすい層をなしており、木炭の(ママ) 獣骨の小片が散在していた。これらは石鏃、打製石斧、すり石等と共にここで何らかの食に関係のあることが行われていたと考えられる」(文責:出口)と述べ、日常性の高い痕跡であることを示唆した記載となっている。残りの4か所は6次調査で検出された。C IV区の灰土域は底部を欠くものの、ややまとまって出土した口径山38.5cmの中鉢：上加世田式土器(南22)の北側で検出された。両者の関係については不明である。

F V, VI区で検出された土器集中区の中でも灰土域が検出されている。土器集中区の中には残存状況の良い深鉢が2点含まれていた。これについては後述するが、灰土域との関係が注目される場所である。

J I, II区では、3か所がほぼ一つのまとまりとなって検出された。ここでも土器集中部分との重複が認められる。本報告で掲載したNo.17の中鉢(完形土器)も含まれている(第27図)。

Mトレンチで検出された落ち込み内からも灰土域が検出されている(M III区)。この落ち込みについて報文では、「トレンチの北側に向かって弧状の形を呈した落ち込みである。壁に沿って長さ2.6m、幅1.6mの半円形をなし、ゆるやかに壁ぎわへ傾斜し、最深部で15cmの深さである。内部には大きな石、灰の塊(60×30cm、厚さ10cm)、土器片多数が出土し」とある(表2文献5)。一見すると堅穴住居状であるが、隣接(連続)する南側の2次調

査区で検出されていない。結果的に「楕円形窪地」の南側に位置する落ち込みラインとほぼ重複することから、遺構ではないと考えられる。

ちなみに、1次調査で検出され、堅穴住居跡として報告されている遺構についても、隣接（連続）する北側のMトレンチで検出されていないことから、同様に楕円形窪地の落ち込みラインである可能性もあると考えられよう。この落ち込みおよびその周辺からも灰土域が検出されている（表2文献16）。

焼土域と灰土域という「火」に関連する遺構について述べた。強力な傾向ではないが、強いてあげるならば「楕円形窪地」の落ち込みライン付近で検出される場合が比較的多いということが言えるかもしれない。中には、FV区の灰土域（土器集中区と重複）のように「楕円形窪地」の最深部に近いエリアで検出されたものもあり、機能についての詳細は不明である。

もちろん焼土域や灰土域がそれぞれ同じ機能を持つ場所であったということも前提ではない。ここでは「火」を用いて何かしらの行為が行われた場所であるということ整理しておきたい。

土器集中域について

上加世田遺跡の大きな特徴の一つとして、「大量の土器がまとまって出土した」という点がある。本報告内でも礫群と周辺遺物の出土状況図（第15図、第17図等）や全体の遺物出土状況図（第25～28図）をみると、そのことが明らかである。特に「楕円形窪地」内およびその周辺部でまとまって出土した状況が各種の図面からうかがえる。

要はこのまとまって出土する土器が、どのような経緯をもってその場にたどり着き、収まることとなったのかという点である。

土器がまとまって出土した場合、「単純な廃棄の場合」と「意図的にセットした場合」の2つ状況を想定することができる。言い換えれば意図的かそうでないかということになるだろうか。もっとも、厳密に言えば「廃棄」そのものも意図的行為の範疇と言えるかもしれない。意識して廃棄された場所そのものは、意図的行為の結果として「遺構」と認識することができようが、ここでいう「単純な廃棄」とは、使用されなくなって放置され、後々に包含層内遺物として捉えられる場合とし、意図的廃棄とは区別しておきたい。

そういう意味では、上加世田遺跡の広域にわたる土器集中の在り方は、全体を「廃棄場：遺構」としてとらえる見方も考えられよう。

また、「まとまって出土する土器」という言い方には、単純に様々な土器の破片がまとまって出土する場合と、一つの個体が完形もしくはそれに近い状態で出土する場

合に分けることができる。

後者の場合、もともと完形もしくはそれに近い形で存在していた土器が、その場で崩壊し、多くの土器片の集合体と化したという場合もある。

本項冒頭で述べた、「大量の遺物がまとまって出土した」という上加世田遺跡の遺物出土状況を再度概観し整理すると、

- ア。「楕円形窪地」を中心に、大量の土器が出土。
 - イ。完形土器もしくはそれに近い土器が、ほぼそのままの状態出土。
 - ウ。完形土器もしくはそれに近い土器が、その場で崩壊したような状態で出土。
 - エ。多種・多様な土器片が集中して出土。
- ということになる。

これらのうち、土器集中域の性格を語る上で特に欠かれないのが「イ」と「ウ」の状態である。

第13図の南1や第27図の南18などが「イ」の事例である。また、遺物出土状況の各図には、「ウ」と考えられる事例がいくつも存在する。たとえば第25図の南9・南11・南19・南35・南36・南38などがそうである。

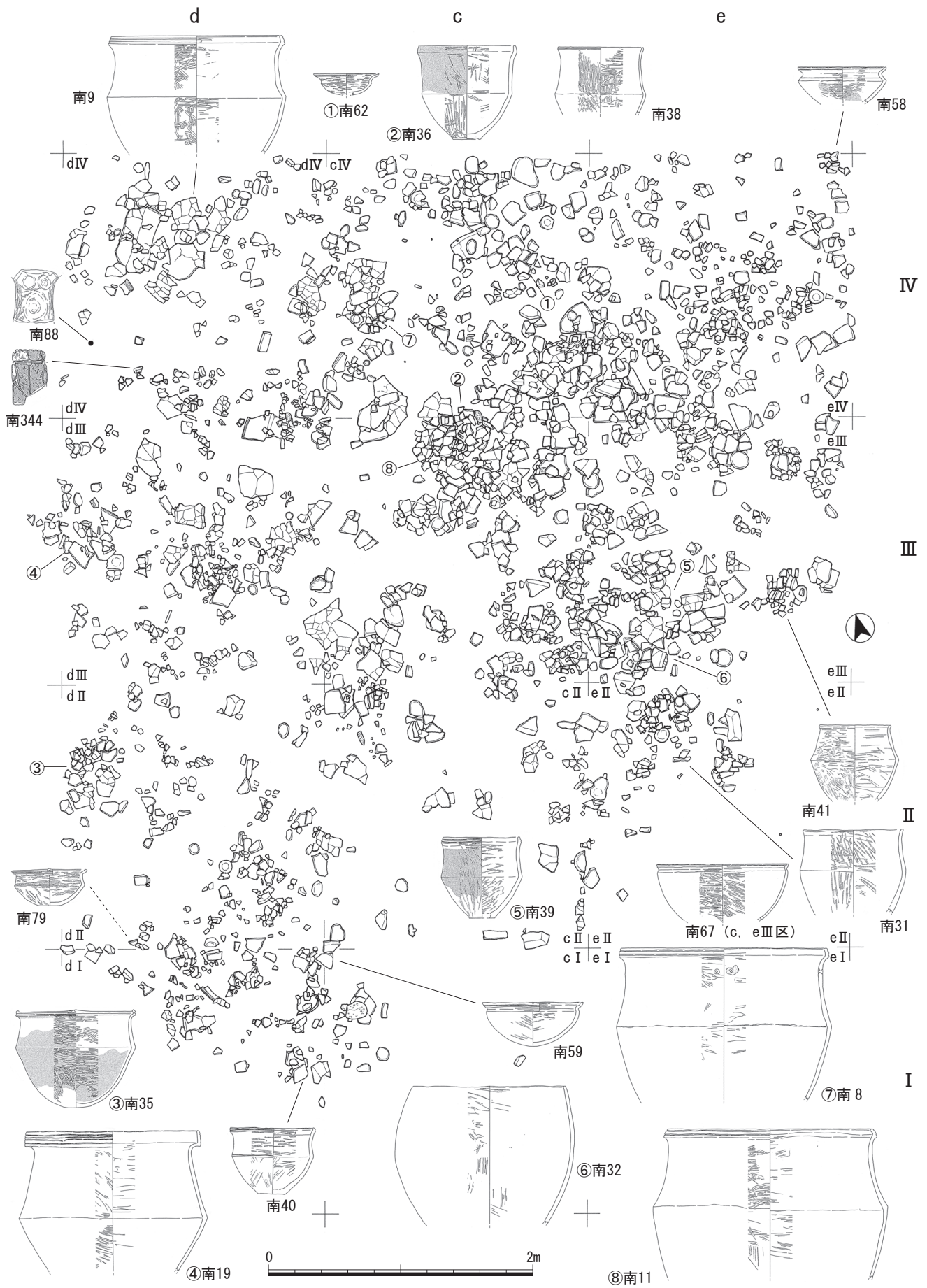
これらが何らかの意図をもってセットされたものなのか、単に廃棄されたものなのか。明瞭な判断は難しいが、そもそも縄文時代には「埋設土器」と呼ばれる完形土器、もしくはそれに近い形の土器が意図的にセットされたと考えられる遺構が検出される場合がある。

これらは「土器棺墓」と呼ばれ、縄文時代の葬制を担う一形式として、成人の遺体や遺骨を納める棺、乳幼児の埋葬用の棺といった役割を担っていたと想定される場合もある。遺骨収納の場合は再葬という儀礼的行為を伴ったとも考えられている。

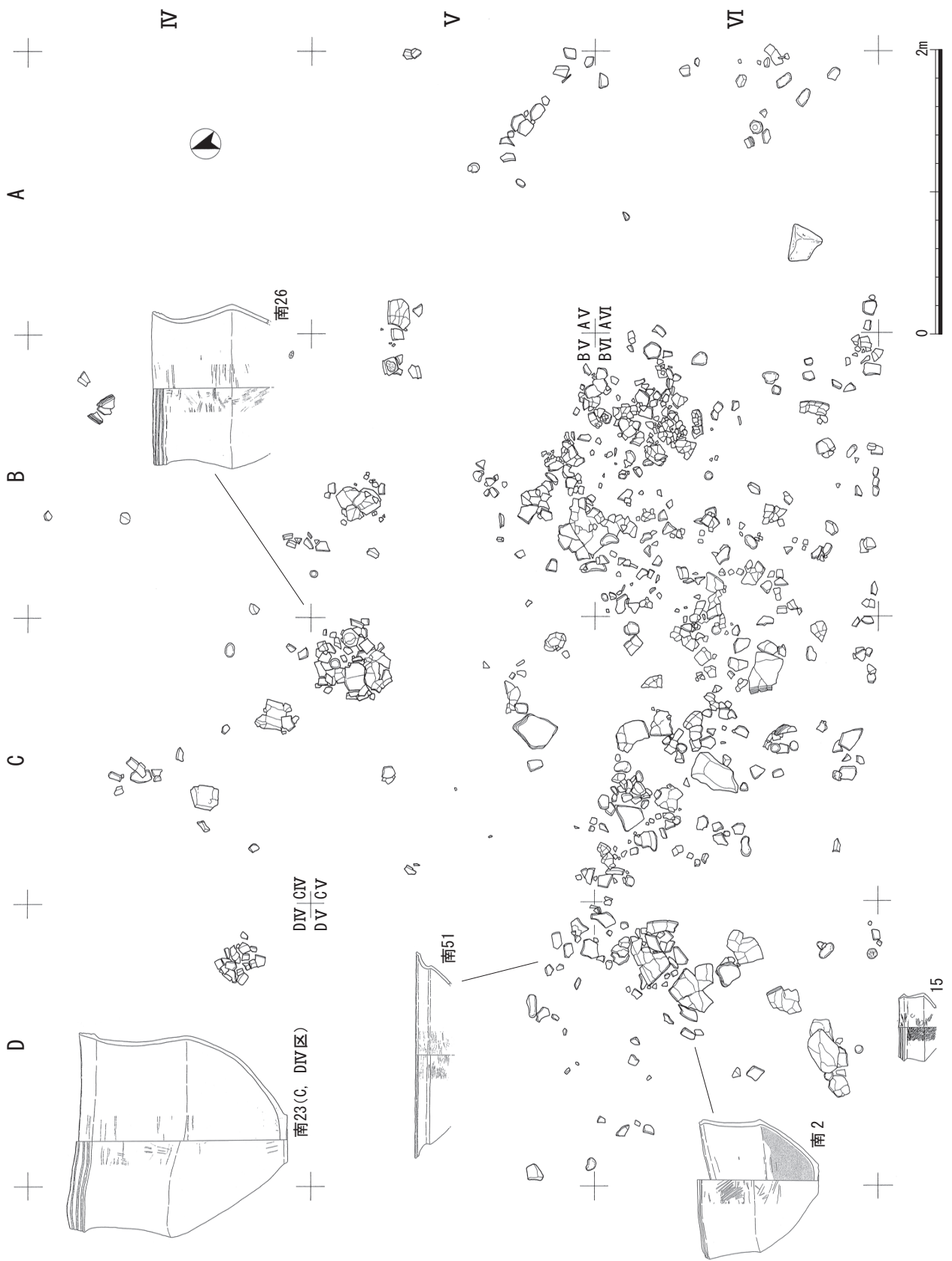
南九州において「埋設土器」は、縄文時代後期後葉～晩期中葉にかけて多くみられる遺構である。古くは西平式・太郎迫式期の「埋設土器」が10基検出された始良市加治木町の干迫遺跡の例や上加世田式・入佐式土器・黒川式土器期の「埋設土器」が37基検出された出水市大坪遺跡等、県内各地の遺跡で確認されている遺構である。

では、上加世田遺跡の場合はどうか。本報告（4～6次調査）以外の調査では、8次調査で上加世田式土器の「埋設土器」（埋鉢として報告）が検出されている（表2文献9）。ちなみにこの「埋設土器」の出土位置は、本報告で対象としている5、6次調査の最北端部になるHI、II区のすぐ西側で検出されている。

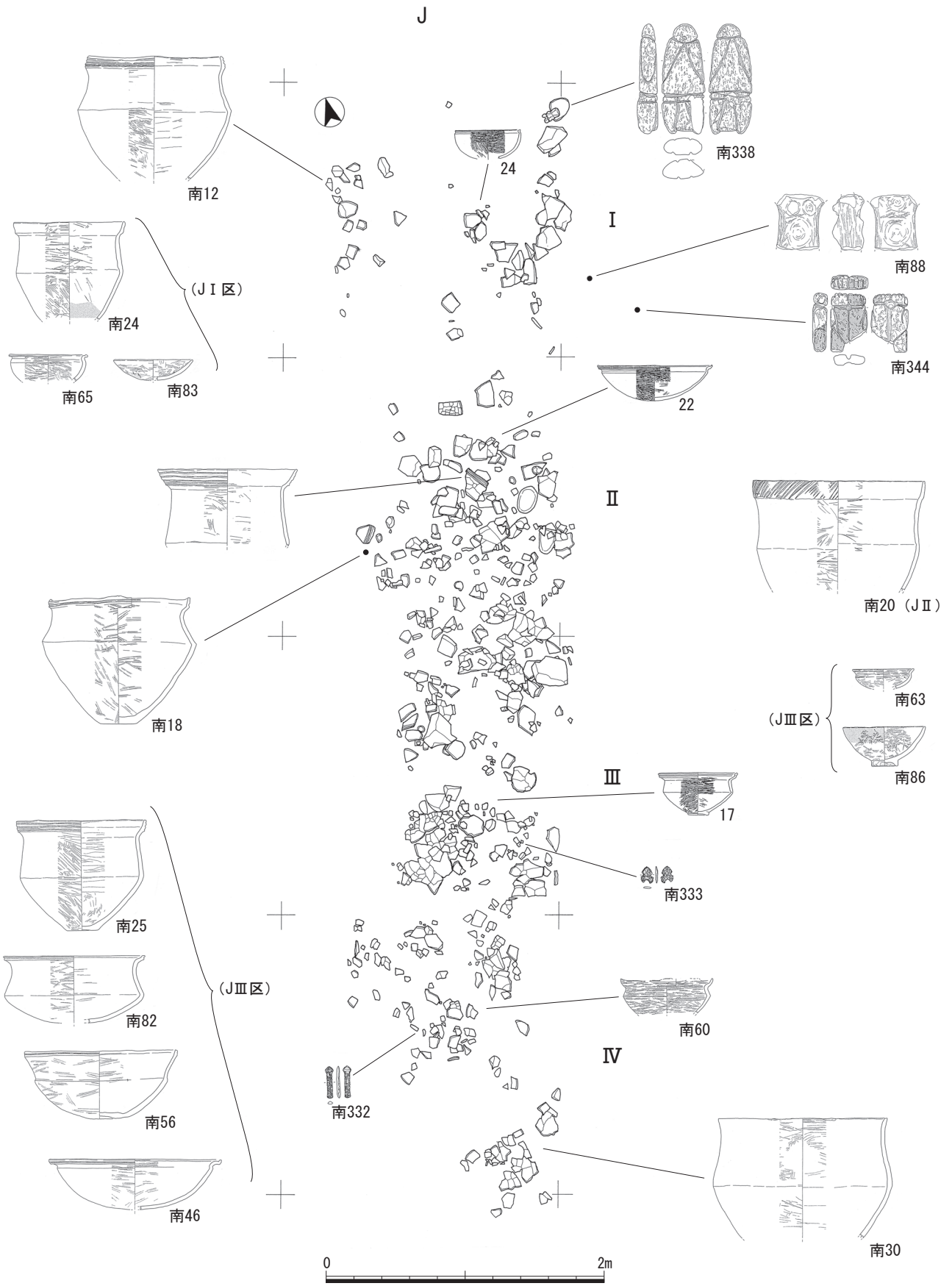
この「イ」とした状態のものについて、例えば第13図の南1などをみると、周辺遺物の出土状態からも「埋設」してあった可能性が高いと考えられる。「埋設土器」として、土器棺墓的な機能を持ち合わせていた遺構であったとする想定も可能であろう。



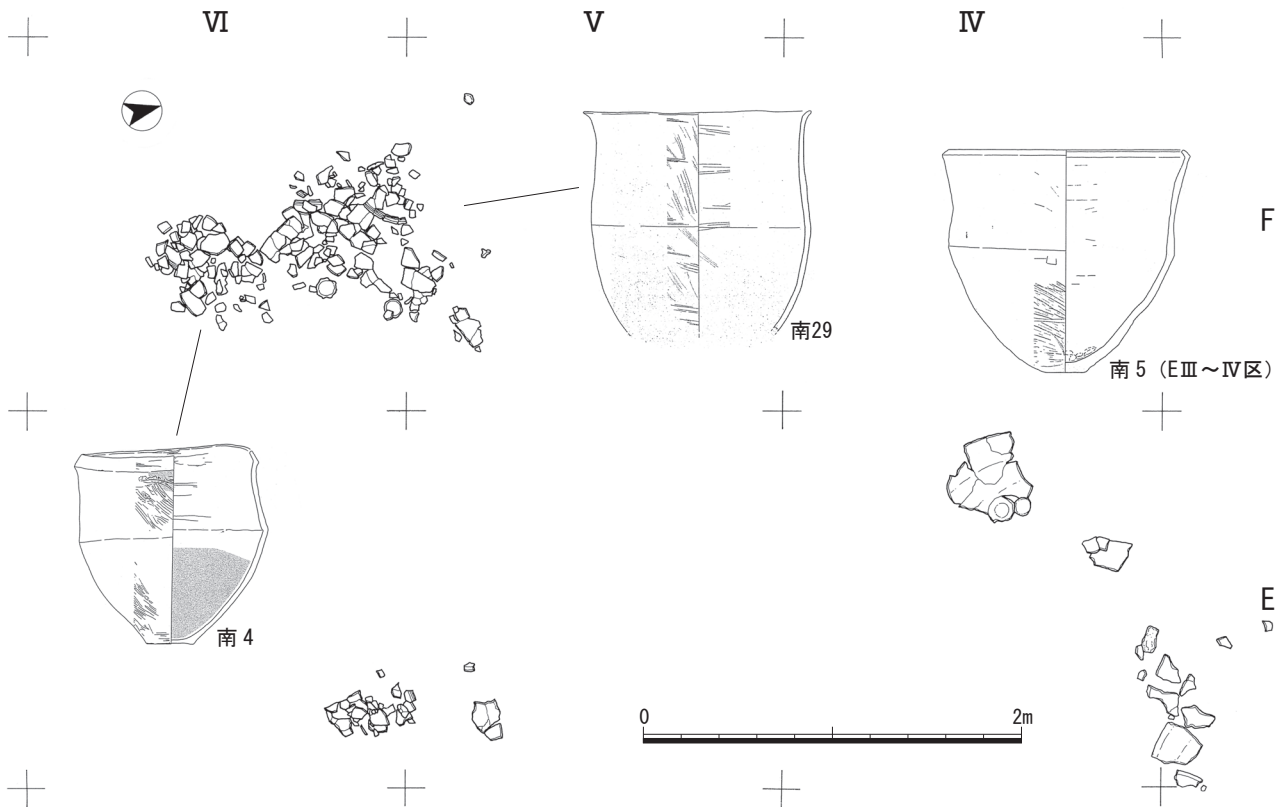
第25图 遺物出土状況図1(c~e - I~IV区)



第26图 遺物出土状況図2 (A~D - IV~VI区)



第 27 图 遺物出土状況图 3 (J - I ~ IV区)



第28図 遺物出土状況図4 (E・F-IV~VI区)

では「ウ」とした状態の事例をどう捉えるか。「土器破片の集合体であり、かつほぼ同一個体である」という状態のまとまりである。

もともと「イ」の状態であったものが、時間の経過とともに次第に崩壊し、破片の集合体へと変化したのか、それとも何らかの意図をもって、破壊行為を行った結果としての痕跡なのか。

ここで注目されるのが出土状況である。「ウ」のパターンの中には、底部片を中心として、放射状に同一個体の土器片が広がる例がある。この場合は本来ある程度の形を有していたものが、時間の経過と共に崩壊していった様子を示している可能性がある。ただしこの状態は、「埋設」してある場合には起こりえない。

また、2次調査のCトレンチIV区では、深鉢の上に浅鉢が重なるように出土した例がある(表2文献16:第13図)。これは2つの土器が押しつぶされたような形で出土した例である。完全に「埋設」した状態であれば起こらない状況であるが、浅鉢を蓋としていた可能性が考えられる事例である。

「埋設土器」の「埋設」状況(度合)については、実際のところ不明な部分も多い。「埋設した可能性が高いにも関わらず、掘り込みラインが不明瞭である」とか、「口縁部付近のみ破片化していることから、一部は地表に出ている可能性がある」といった課題である。

今回の整理報告において、その点についての明瞭な区別化は出来なかったが、いずれにしても「イ」と「ウ」は、どちらも「完形土器もしくはそれに近い土器」の状態であることから、非日常的な意識が働いている可能性が高いと考えられよう。2次調査Cトレンチの例では、蓋的な用途が考えられる浅鉢を取り除くと、「下から石鏃と骨片(獣骨?)が出土」(表2文献2)とあり注目される。

遺構と遺物の相関関係

以上「楕円形窪地」内で検出された遺構的要素として、礫群・焼土域・灰土域・土器集中区を取り上げた。これらと「楕円形窪地」内の出土遺物との関係については、遺構と遺物が連続性をもって広がっていることから、なかなか明確な断定はできないのが現状である。

とは言え、「埋設土器」の存在、それらと近接する礫群の存在、多くの骨片(人骨及び獣骨か?)の在り方、さらには土偶や軽石製岩偶・岩版、多くの玉類の出土(第11図参照)等、通常の遺物廃棄場とは考えられない要素を考慮すると、少なくとも墓域や祭祀場としての「楕円形窪地」の状況が想定されよう。

もちろん礫群や焼土域、灰土域などは、日常の生活痕跡としての解釈も成立する。「楕円形窪地」エリアは、日常と非日常の両方の要素を兼ね備えたステージであった様相があらためて浮かび上がってくるのである。

② 遺物（第29～42図 10～136）

4～6次調査関連の遺物は、当センター保管分と南さつま市保管分の2つに分かれていることは前述のとおりである。市によると、「土器片は669ケース、石器および剥片類は4,482点にのぼる（本市所蔵分）」と報告されている（表2文献15）。

当センターでは、遺物ケースに換算して104箱（土器：98箱、石器：6箱）分保管しており、単純に比較はできないが、土器だけでも市が85%を超える比率となっており、多くは市が保管しているといえることができる。

今回の報告では、土器31点・石器（石製品を含む）105点を掲載した。なお、石器については1～3次調査の中から10点を追加掲載した。また、調査次不明のものについても、本遺跡出土が明らかで、かつ重要と考えられる石器1点、軽石加工品2点も掲載した。

《土器》（第29～31図 10～40）

土器は総数31点掲載した。これらは縄文後期中葉末から後葉末の土器で、おおむね3つの段階のものとして捉え整理した。

10、11は縄文後期中葉末の太郎迫式土器期の資料である。

10は口縁部片で、緩い逆「く」字状を呈する口唇部には、1本の沈線が施されている。縄文は観察されない。

11はやや球状に膨らむ胴部片で、胴部上位に沈線・凹点・縄文が組み合わされた、いわゆる磨消縄文が施されたものである。

12～26は縄文後期後葉の上加世田式土器期と考えられる一群である。深鉢形・中鉢形・浅鉢形・碗形・皿形等、多様な器種がみられる。

12～14は深鉢である。12は逆「く」字状に屈曲する口縁部と胴部をもつものである。幅約1.5cmの口縁部文様帯には、3本の沈線が施されている。また、屈曲する胴部の上位には1本の沈線がやや不規則な状態で施されている。口縁部下の内外は、横位の丁寧なミガキによる器面調整が明瞭である。胴部下半は、ナデ仕上げである。

13と14は、接合はしていないが、形状や器面調整・色調等から、同一個体と考えられる資料である。12と同様に、逆「く」字状の口縁部と胴部を有する。幅約2cmの口縁部文様帯には、3本の沈線が施されている。内外面共に横位をベースにした丁寧な器面調整がみられる。

底部までは存在しないが、それぞれ口径35.0cm・現存高19.5cm、口径38.0cm・略現存高27.0cmと大型の深鉢と考えられる。

15～20は、口径より高さが短く、中型の深鉢と考えられるものである。ここでは中鉢と呼ぶこととしたい。

15は中鉢とは言え、口径が16.5cmと、他の資料よりもサイズが大きい。ただし、12や13、14のように高さ

がないと考えられることから中鉢とした。逆「く」字状に屈曲する胴部から大きく内傾しながら立ち上がり、口縁端部に向けて再び外へ開くという器形を呈している。口縁端部は、粘土紐を玉縁状に張り付けることで、内外面に浅い1本の沈線を作り出したものである。内外面共に丁寧なミガキによる器面調整が施されている。

16～18は、口径が20cm前後、高さが13cm前後と、ほぼ同様なサイズの中鉢である。ただし口縁部の形態は3者3様である。

16は逆「く」字状の口縁部と胴部を持つもので、底部は欠損している。口縁部の屈曲が他の資料よりも強いのが特徴である。口唇部に向け、次第に薄くなり、断面形は鳥の首状を呈している。

口縁部文様帯は幅約1.5cmとサイズにしては幅広で、2本の沈線が施されている。破片資料のため詳細は不明であるが、4か所の緩い山形を呈する器形を有していると考えられる。外面はおおむね斜位の丁寧なミガキによる調整が施されている。

17は口縁部から底部まで残存するいわゆる完形品である。逆「く」字状の胴部は他資料と同様であるが、屈曲する胴部からやや内傾しながら立ち上がり、逆「く」字状に屈曲しながらも、外側へ開く口縁部を有する資料である。幅約1.3cmの口縁部文様帯には、1本の沈線が施されている。

内外面共に胴部上半は横位、下半は斜位のミガキによる器面調整が施されている。径6.4cmの底部は上げ底を呈し、縄文後期中葉末の西平式土器以来の伝統を維持した特徴と言える。

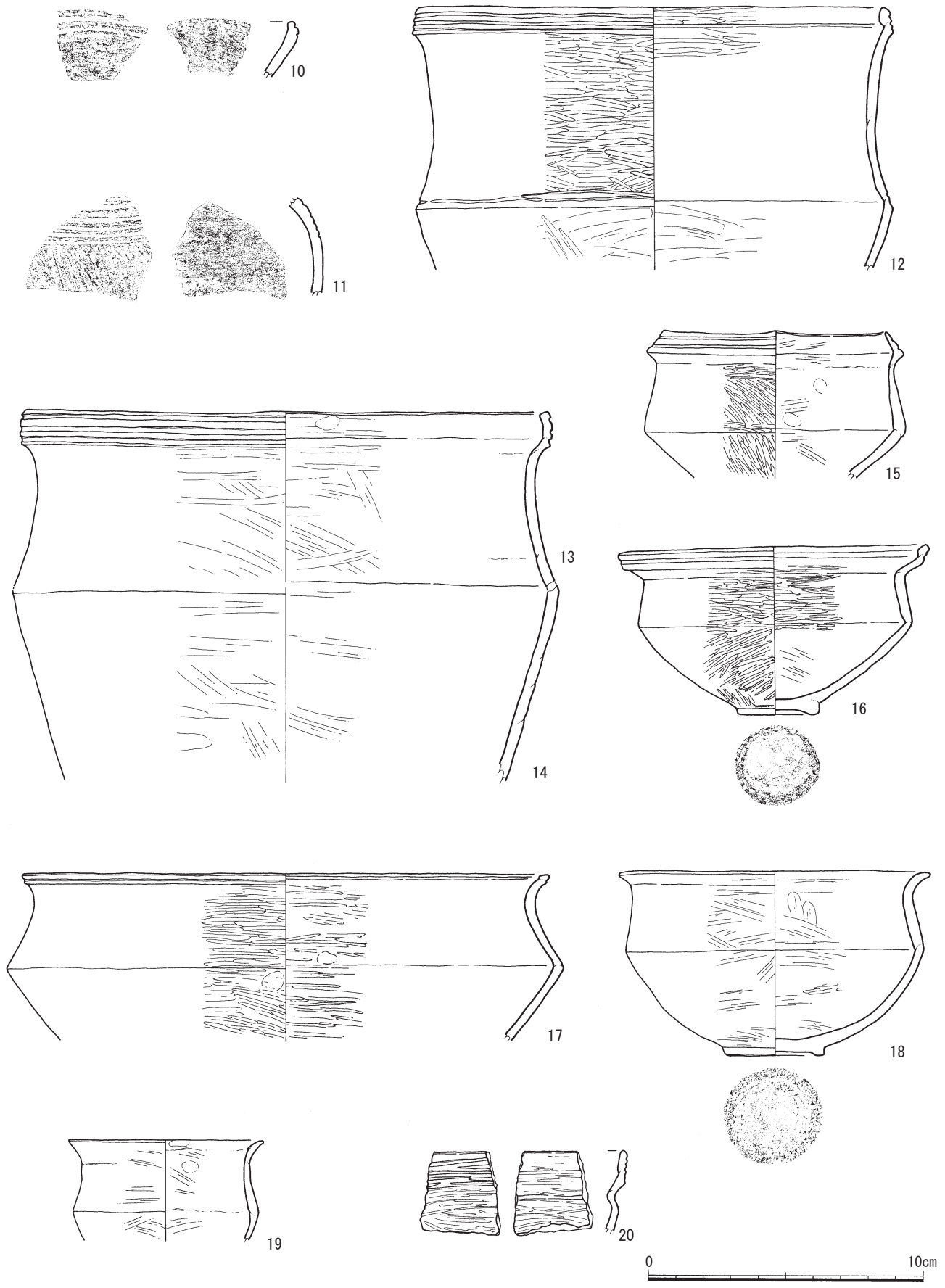
18もいわゆる完形品である。逆「く」字状の屈曲胴部から、内傾しながら立ち上がり、口縁端部に向けて大きく外反するという特徴を有する。口縁部に特別な装飾はない。底部は17と同様上げ底を呈する。内外面共に丁寧なナデ調整が施されている。

19は中鉢の器形を有するが、やや小型の土器である。口縁部が18と同様に外反するのみという特徴を有する。胴部の屈曲はやや緩い。底部は欠損している。

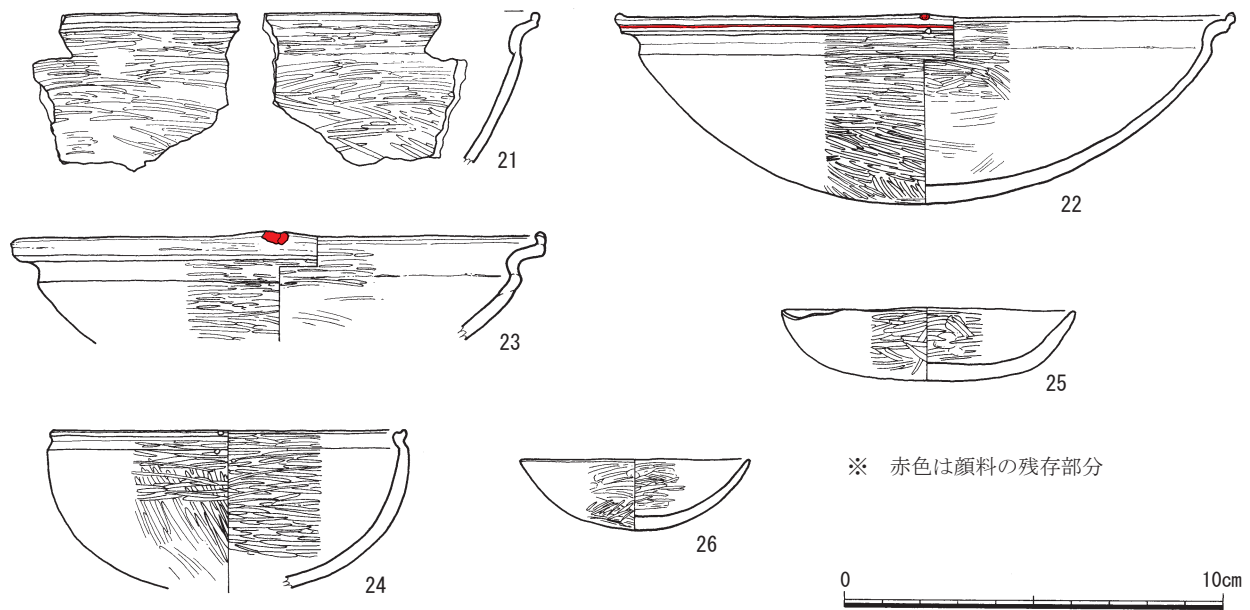
20は破片資料のために全形は不明であるが、幅2.7cmと、やや幅広の口縁部文様帯をもつが、胴部の屈曲部が比較的口縁部に近い位置にあることから、中鉢的な器形を想定した。内外の丁寧なミガキ調整を見ると、まだ外開きの器形を呈し、浅鉢状となる可能性もある。

21～23は浅鉢状の器形を呈する土器である。3点共に逆「く」字状に屈曲する肩部から、内傾から外反へとカーブを描きながら立ち上がり、粘土紐を貼付することで口縁端部の文様帯を作り出した土器で、幅狭ながらもメリハリのある形状を呈した土器である。

22と23には、口唇部が若干高くなる部分があり、底の外面には控えめながらもしっかりと意識づけされた凹



第 29 図 縄文土器 1



第30図 縄文土器2

点が施されている。

何れも22の完形品のように、底部は緩やかにカーブする丸底を呈するものと考えられる。中華鍋風のポジションを呈している。3点いずれも内外を丁寧なミガキ調整で仕上げているのも特徴的である。

24は椀形を呈する土器で、マリ形土器とも呼ばれるものである。口縁部は若干内湾気味であるが、端部のみ粘土紐を工夫して貼付し、やや立ち上がり気味というアクセントを設けている。内外面共に丁寧なミガキ調整が施されている。

25と26は皿形を呈する土器の完形品である。口縁端部はシンプルに外側へ開くのみ作りとなっている。25はやや平底を呈する部分もあるが、26は緩い丸底風となっている。いずれも内外面共に丁寧なミガキによる器面調整が施されている。

27～40は縄文後期末の入佐式土器期と考えられる一群である。深鉢形・浅鉢形・椀形等の器種がみられる。

27～30は深鉢である。幅4.0cm前後の文様帯を持つ肥厚口縁部が外へ開く器形を有するものである。この文様帯には、何れも4条の細沈線が施されている。27と30は口唇部と平行する直線文であるが、28と29は4本共に口唇部に向けて立ち上がる線形を描く。

29は4本独立したままであるが、28は口唇部の1点に集約される。小破片のため、全体像はわからないが、おそらく山形を呈する片方部分と考えられる。

29はその山形を呈するであろう文様の頂部が少し盛り上がる器形となっている。口縁部は肥厚すると述べたが、27・28・30を見ると、口縁部直下の頸部の器壁が最も薄い作りとなっている。

比較的大型破片の30を見ると、内外面共に丁寧なナデ仕上げ調整を行っている。

31～38は浅鉢である。31～35のように、口径に対し、比較的器高のあるタイプと、36～38のように、中華鍋風の器形を呈するタイプに分かれる。

31は逆「く」字の口縁部をもち、短い頸部の下位で大きく屈曲する器形の浅鉢である。

32～34は、口唇部は欠けているが外へ開く口縁部と屈曲する胴部の器形を呈するもので、屈曲部上位にいずれも蝶ネクタイ状の突起を有する土器である。35は屈曲部上位に粘土紐を上下に貼り付けた橋状把手を有する土器である。

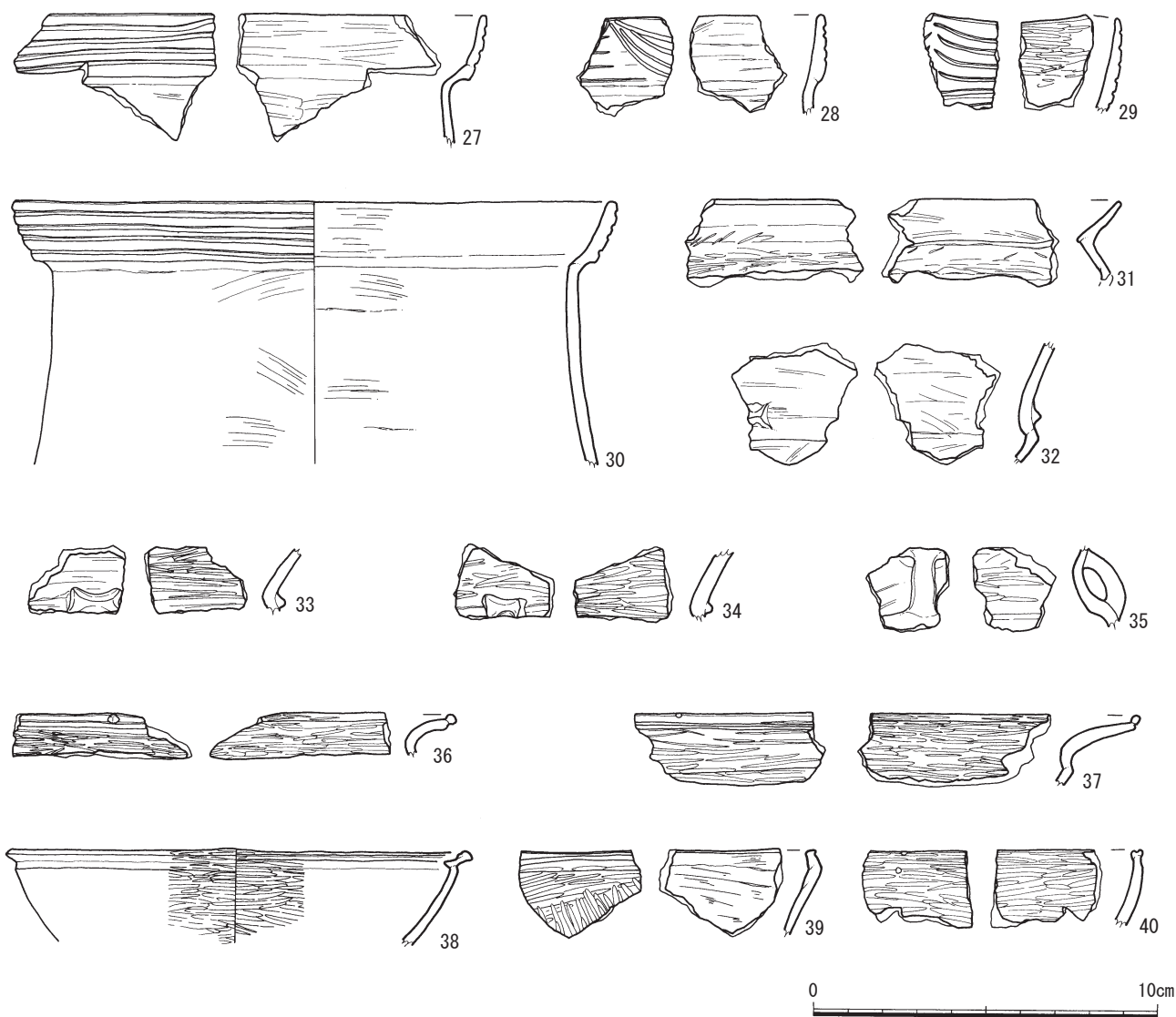
31・32は内外面共に丁寧なナデ仕上げ、33～35は丁寧なミガキによる器面調整が施されている。

36～38は口径に対し、比較的器高の低い中華鍋風の器形を有する土器である。いずれも口縁部が外へ開く器形を呈するが、36・37のように胴部屈曲部から大きく曲線を描きながら開く土器と、屈曲部との間隔が極めて短い38のような器形に分かれる。これらは内外面共に、極めて丁寧なミガキ仕上げを行っている。

39・40は、椀状を呈する器形の土器である。39は浅鉢状となる可能性もある。

40は若干内湾気味にであるが、端部のみ粘土紐を工夫して貼付し、やや立ち上がり気味というアクセントを設けている。内外面共に丁寧なミガキ調整が施されている。

4～6次調査の遺物について、多数を南さつま市教育委員会が保管していることは前述したとおりである。ちなみに、県立埋文センターが保管する1～6次調査の遺物のうち、石器以外の総重量をチェックしたところ、約



第31図 縄文土器3

1,250kgであった。遺跡全体の数量の多さが想像されよう。

「楕円形窪地」を中心とした土器の出土状況はさまざま、実測図や写真等から、足の置き場に困るような状態も見られた様子がかがえる。

また、表2の文献5には、縄文時代早期の前平式土器（EⅣ区）や前期の轟式土器（DⅡ区）も出土も報告されており、当該台地が、古くから生活の場として利用されていたことがわかる。ちなみに北へ約850mのシラス台地上には、縄文時代草創期・早期の遺跡として著名な国史跡の柞ノ原遺跡が所在する。縄文時代各時期の遺跡が多く所在する万之瀬川下流域は、縄文人にとって豊かな自然環境のもと、格好の生活フィールドであったと考えられよう。

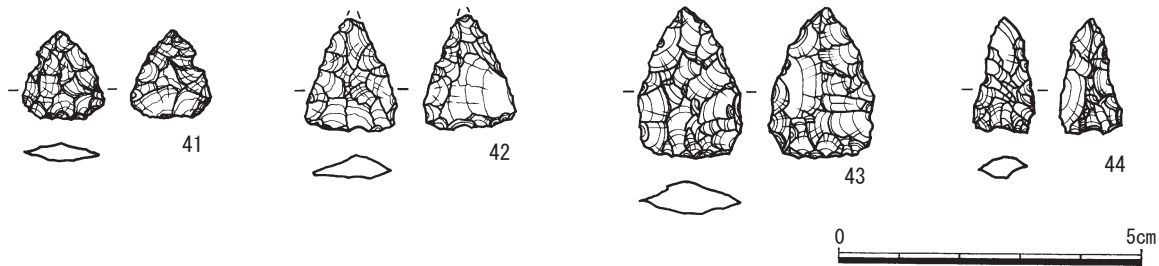
《石器》（第32～42図 41～136）

包含層出土の石器は総数96点掲載した。これらは縄文後期中葉末から後葉末の上加世田式土器期を中心としながら、次の入佐式土器期頃までの石器と考えられる。

石鏃（第32,33図 41～70）

いずれも打製石鏃で、破片資料も含め30点を掲載した。石材は、緻密な安山岩（41・45・48・51・52・56・58～61・64・66）、黒色ガラス質の腰岳産とみられる黒曜石（47・53・55・62・63・69・70）、灰白色・灰色・暗茶褐色を呈する頁岩（42・46・49・50・57・67）の他、暗灰色のチャート（43）、白色・赤褐色の玉随（44・68）、ホルンフェルス（65）が用いられている。

上半部の角部にはやや不明瞭なものもあるが、先端部近くに角部がある凹基の五角形鏃（45～51・53・55～59・61・64）が主体で、部分を欠損する63・70も残存



第 32 図 縄文時代の石器 1

部分からこれに類する可能性がある。基部の挟りは弧状に内湾するもの・半円状・「U」字状・山形などがあり、基端部はやや尖るもの・左右基辺が斜行するもの・やや丸みをもつものなどがある。

53 は両側辺が鋸歯状で、基部に山形の挟りが入る凹基の三角形鏃である。65 は素材剥片の周縁のみに調整を加えた、浅い凹基の三角形鏃である。66 は側辺の調整が粗く未製品の可能性がある。68 は表裏の全体に押圧剥離で調整されているが、基部に相当する部分が非対称で石鏃未製品、もしくは「つまみ」の可能性がある。69 は押圧剥離により丁寧な調整が施され、やや大型で厚みもある。基部を欠損するが、石槍の可能性もある。

石錐 (第 33 図 71・72)

71 は黒灰色を呈する安山岩の剥片を素材とし、側辺からの粗い剥離で調整した後、錐部を作り出す。錐部の背面稜上や先端部に摩耗が生じている。72 も安山岩製で、背面側から左側辺に剥離を加え尖頭状に整形した後、丁寧な押圧剥離で錐部を作り出す。先端には摩耗がみられる。

石匙 (第 34, 35 図 73～87)

石材は黒色及び黒灰色を呈する緻密な安山岩 (77・80・82～85)、ホルンフェルス (73・81)、灰褐色を呈する粘板岩 (74・78)、灰褐色のチャート (75・76)、比較的良質な頁岩 (86・87)、灰白色で部分的に赤みを帯びる玉髓 (79) が用いられている。

いずれも調整は周縁部のみにとどまり、表裏に素材剥片の先行する剥離面を大きく残置するやや粗製の石匙である。つまみ部は、左右からノッチ状の挟りが入り明瞭なつまみ部を作り出すもの、左右から調整で小さく突起するつまみ部と肩部を作り出すもの、紐がかかる程度の浅い挟りが入るものがある。

形態的には、左右側縁及び左右の一方の側辺に刃部を作り出す縦型 (73～83) と、下縁を刃部とする横型 (84～87) に分類できる。

刃部の調整には、両面加工と表裏いずれかの片面加工があるが、刃部には摩耗や使用に伴うと考えられる微細な剥離が生じている例が多い。

83 は右側辺が折れ面となっているが、左側辺から下縁にかけて表裏から細かい調整剥離が加えられ、下縁に

は顕著な摩耗が生じている。87 は背面が素材剥片の剥離に先行する研磨面で、磨製石斧から剥出された可能性がある。下辺に粗い調整で刃部を作り出す。刃部には摩耗が認められる。

スクレイパー (第 35 図 88・89)

88 は灰黒色を呈する安山岩の剥片で、左右側辺には折れが生じている。上辺には剥離によりノッチ状を呈する部分があり、下辺には表裏からの調整で刃部が作り出され、刃部には摩耗がみられる。89 は黒色ガラス質の腰岳産とみられる黒曜石製で、上辺は折れ面で、下縁部分に表裏から粗い調整剥離を加え刃部とする。刃部縁辺には微細な剥離や「つぶれ」がみられる。左右に対向する剥離があり、楔形石器の可能性もある。

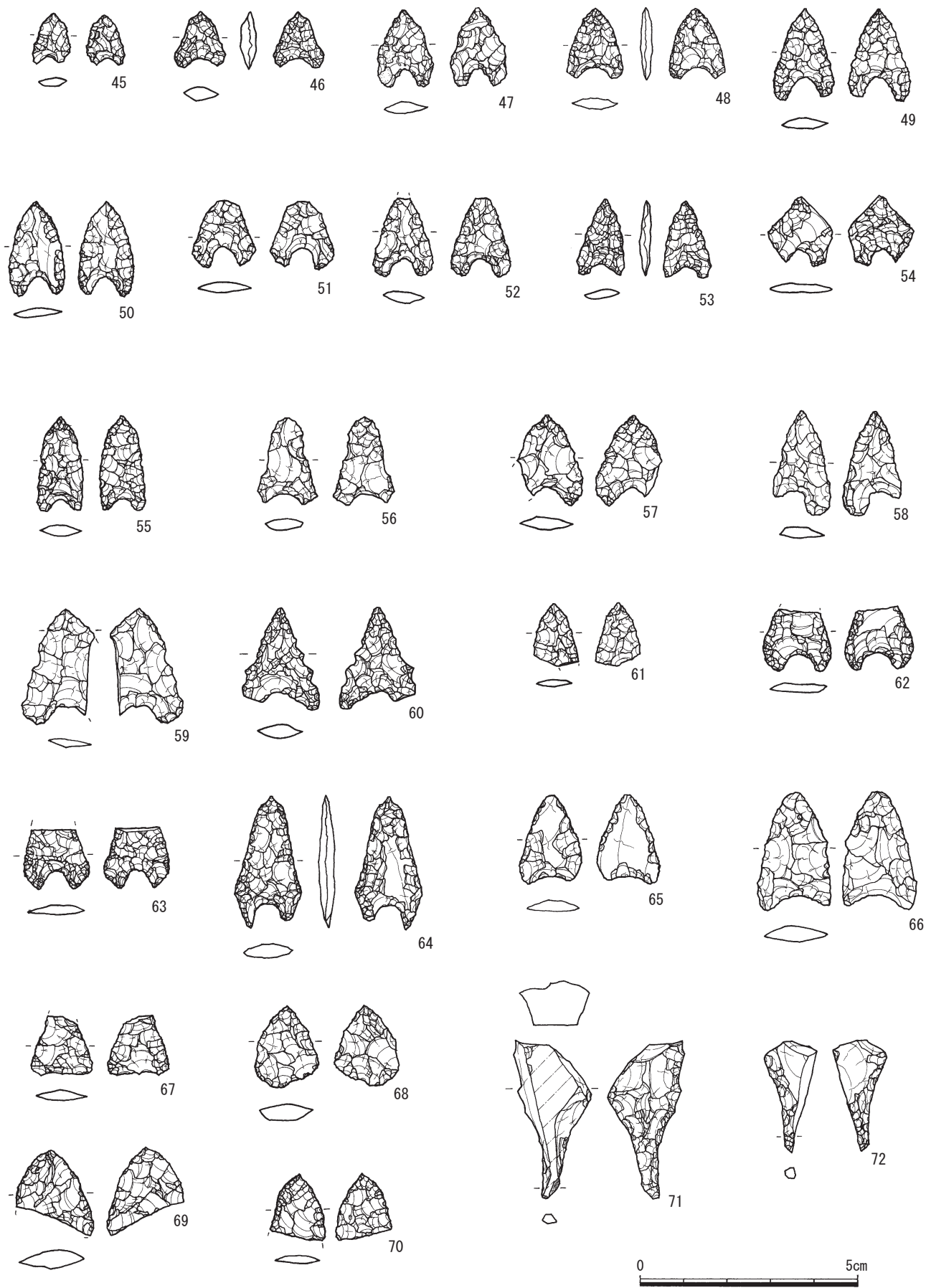
磨製石斧 (第 36 図 90～92)

90 は灰黒褐色を呈するホルンフェルス製で、素材剥片の背面が自然面であることから、打製石斧のようにみえるが、図正面側の刃部に研磨が施されている。91 は灰褐色を呈する若干熱変成が伺われる砂岩製の磨製石斧である。本来はやや大型の両凸刃の磨製石斧であったとみられるが、基部の欠損後、楔様に使用され、これに伴い基部に剥離やつぶれが生じたものとみられる。92 は灰白色を呈するホルンフェルス製の弱凸強平刃で、偏刃の磨製石斧である。平面形は撥状を呈し、剥離整形後、刃部縁辺のみに研磨が施されている。

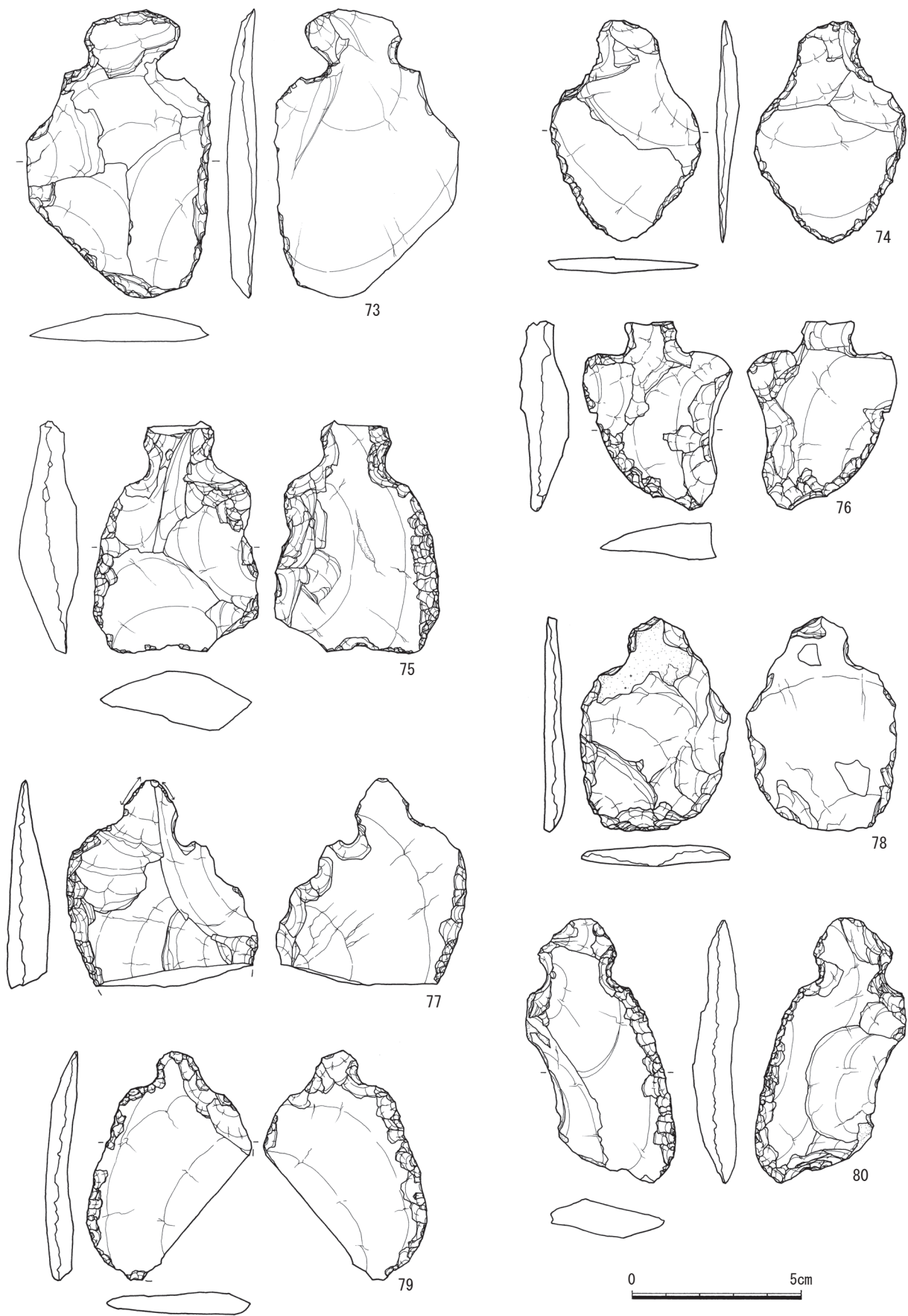
打製石斧 (第 37 図 93～100)

石材はホルンフェルス (93・96・99・100)、安山岩 (95・97・98)、頁岩 (94) である。形態分類上は短冊形 (95)、撥形 (94・97・98) などがみられる。

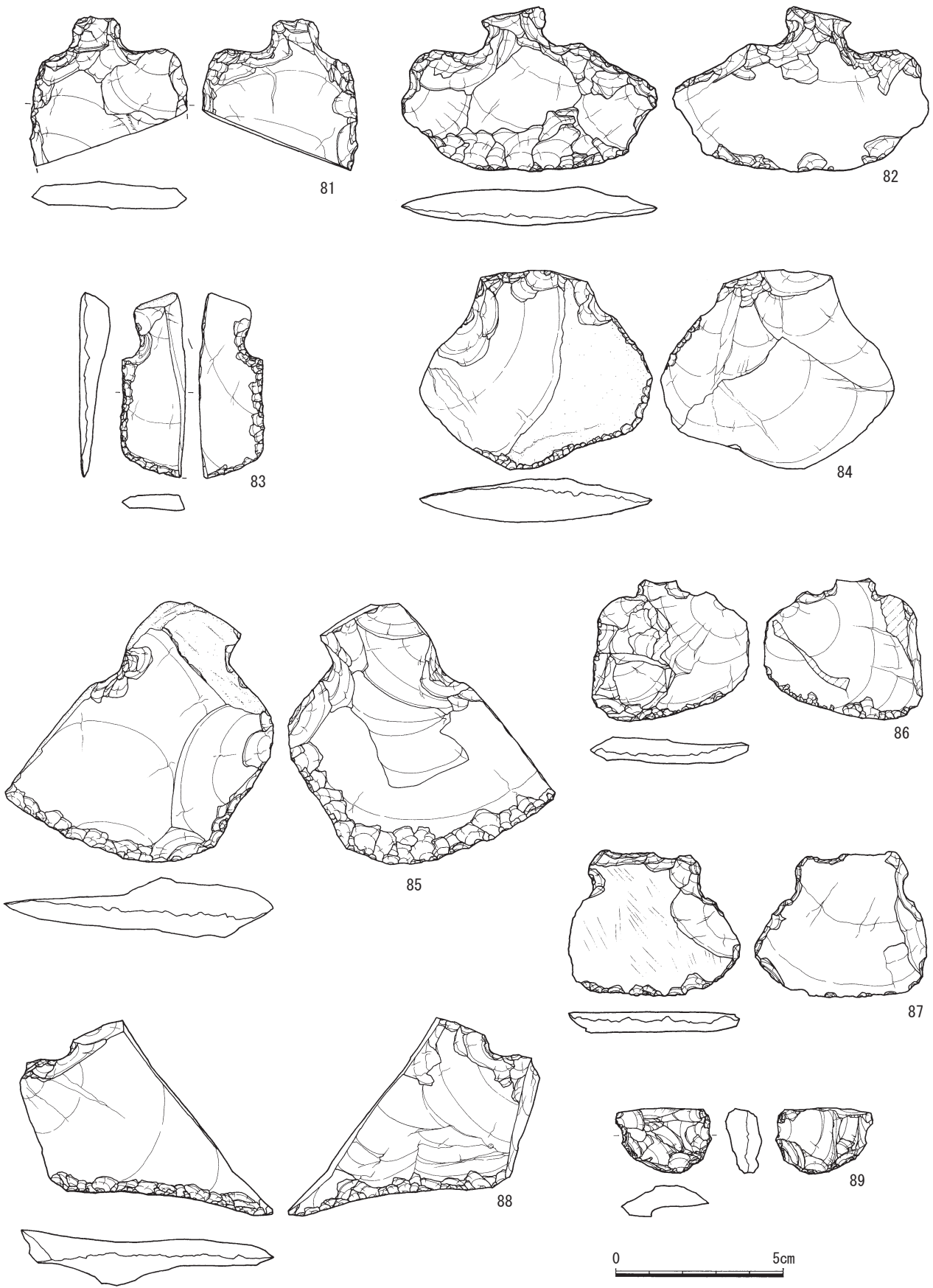
93 は左側辺部に厚みがあり、縁辺につぶれがあるのに対し、右側縁は比較的鋭利で、縁辺下半部に摩耗が生じていることから、横刃型の刃器の可能性もある。94 は図正面下半部の稜上及び周辺、図裏面の稜上、刃部一帯及び左側辺刃部寄りの側縁に研磨の跡が残ることから、磨製石斧からの転用とみられる。96 は図裏面に被熱による剥落が、図正面には煤の付着がそれぞれみられる。分銅形もしくは大型のラケット形の基部の可能性もある。95・97・98・100 は刃部周縁及び稜上に使用によると考えられる摩耗 (擦痕) を認める。99 は横長剥片を素材とし、左右側辺に粗い片面のみの調整が施される。



第 33 図 縄文時代の石器 2



第 34 図 縄文時代の石器 3



第 35 図 縄文時代の石器 4

下辺右側は節理面で未製品の可能性がある。

石錘 (第 38 図 101 ~ 104)

101 は花崗岩の扁平亜円礫を素材とし、上下・左右の 4 か所を打ち欠く重量 220g の石錘である。102 は砂岩の扁平な亜角礫で、表裏面には擦れが生じている。対向する上下 2 か所に打ち欠きがある。103 は砂岩の扁平な亜円礫で、対向する 2 か所に表裏からの打ち欠きが見られる。104 は風化が進んだ花崗岩の扁平な円礫で、表裏面及び上下縁を幅 2 ~ 3mm の浅い溝状の切り込みが一周する。有溝石錘として図示したが、特殊な石製品の可能性もある。

円盤形石器 (第 38, 39 図 105 ~ 109)

105 は背面に自然面をもつ多孔質安山岩の剥片に、剥離と側縁への敲打により略円形に整形される。右側縁には二次的な剥離による欠損が生じている。106 は背面に自然面をもつ砂岩剥片に表裏からの剥離と側縁への敲打が施される。107 はホルンフェルスの扁平礫に周縁から剥離を加え、長楕円形に整形されている。上縁・下縁には敲打が施され、左右側辺には対向する二次的な剥離が生じている。108 は乳白色を呈する花崗岩の扁平な円礫で、上半部左右側縁に敲打痕があり、左側辺の 1 か所に剥離が見られる。109 は背面に自然面をもつ灰黒色を呈する粘板岩の剥片で、表裏から剥離で周縁のみ調整を施し長楕円形に整形する。背面及び裏面の一部には擦痕及

び刻線状のキズがみられる。

有溝砥石 (第 40 図 110)

110 は砂岩の礫片で、被熱による赤化やひび割れが生じている。表面には部分的な擦れが認められ、裏面は平滑な平坦面となっている。右側面に長さ 45mm・幅 2 ~ 6mm の溝状に削れた部分がある。典型的な有溝砥石とは異なるが、関連する資料として提示した。

打製石槍 (第 40 図 111)

ホルンフェルス製で平坦剥離による両面調整で整形した後、周縁からの小剥離で丁寧に槍先状に仕上げられている。

分銅形石製品 (第 40 図 112)

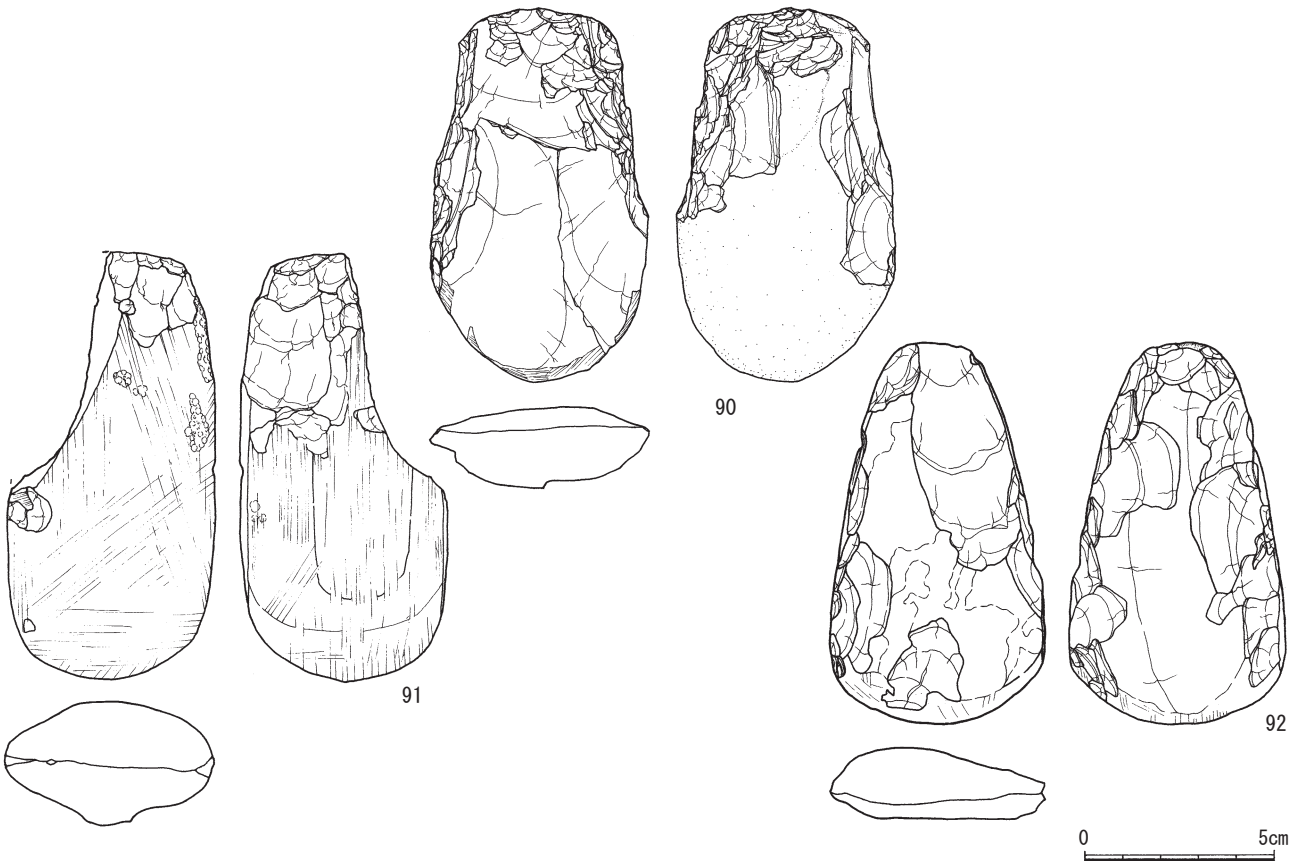
暗灰色を呈するホルンフェルスの剥片に表裏から剥離調整を加え中央に挟れをもつ分銅形に整形する。分銅形の打製石斧に形態的には類似するが、刃部の作り出しが認められないことから石製品とした。

石斧形ミニチュア石製品 (第 40 図 113)

灰黒色を呈する頁岩製の定角式の磨製石斧のミニチュア製品である。両側面、基端部まで丁寧に研磨が施されている。

その他の石製品 (第 40 図 114)

114 は灰褐色を呈する凝灰岩礫の扁平礫で、右半分を欠失する。上下縁・表裏面とも平滑で、左辺部の表裏及び左側縁に「U」字状にくぼむ浅い溝が切り込まれてい



第 36 図 縄文時代の石器 5

る。

115は安山岩の円礫を素材とする石製品で、表裏に敲打痕をもつ。上下には幅3mm、長さ2cm程の浅い溝状の凹部があり、切目石錘的な形状を呈している。ここでは丁寧な敲打痕がみられることや溝状凹部が浅くて短いことから、石製品として取り扱った。

異形石器(第40図 116~123)

116~120は腰岳産と推定される黒色ガラス質の良質な黒曜石製である。116は中央が高くなる弧状を呈し、右端部を欠損するが、左右両端とも矢印形であったと推定される。117は左端部が矢印形、右端部は丸みを持ち、全体が弧状を呈する。118は白色の不純物が入り、やや質が悪いが腰岳産黒曜石とみられる。右辺を欠損するが、

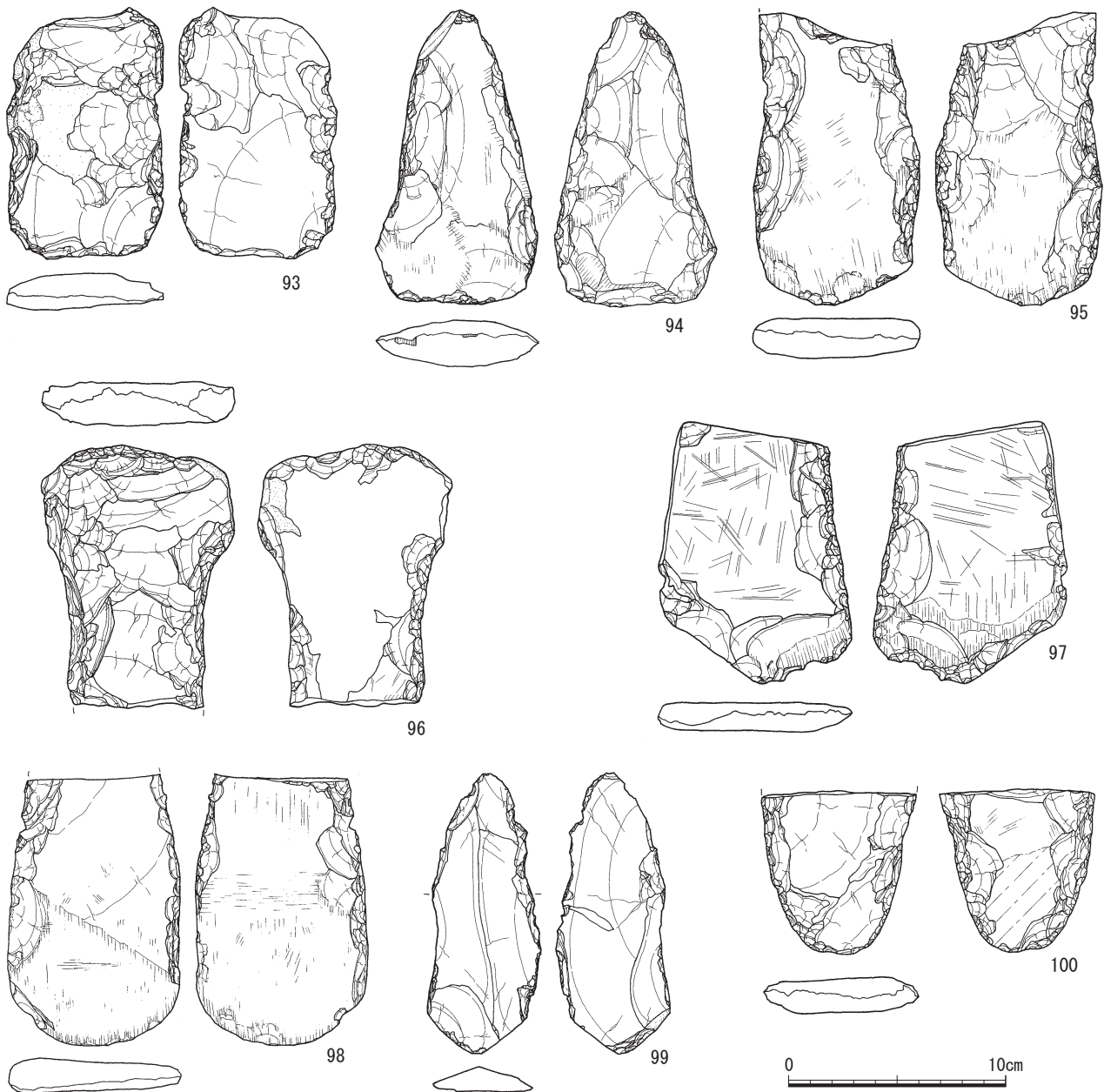
上辺に山形の突起部があり、下縁は弧状に内湾する。左端部は小さくくびれる形状に調整されている。

119・120はいずれも上端に折れが生じているが、棒状を呈する。下端近くがわずかにくびれ、下端には小さく自然面が残る。端部稜上に摩耗や擦れは認められない。

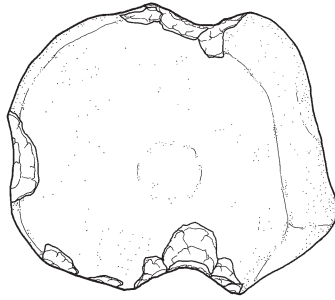
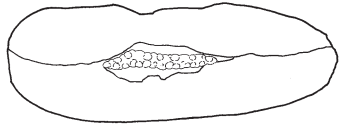
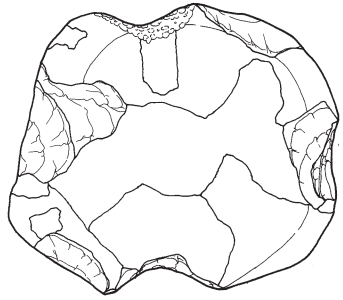
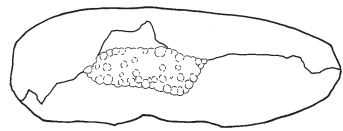
121は姫島産に類似する乳白色を呈する黒曜石である。上辺は中央を頂部とする山形で、下縁は弧状に内湾する。左右両端部は小さくくびれる。

122は針尾産に類似する灰黒色不透明の黒曜石製である。表裏とも丁寧な押圧剥離で調整される。山形の挟りが入り石鎌に似た形状であるが、左右の脚部は端部がくびれる。

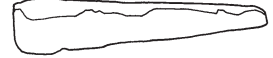
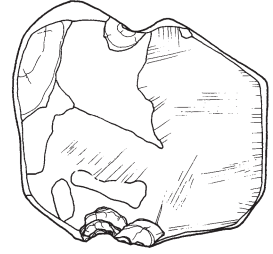
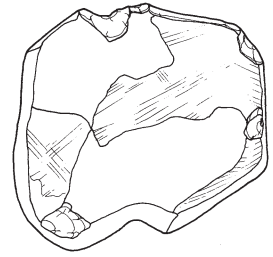
123は黒色の緻密な安山岩製で、上辺及び左側円上部



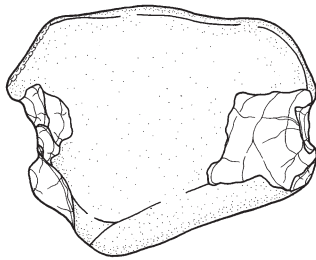
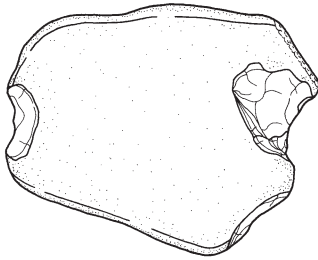
第37図 縄文時代の石器6



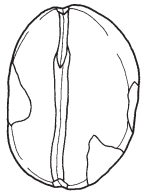
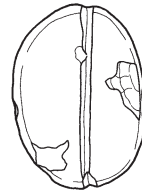
101



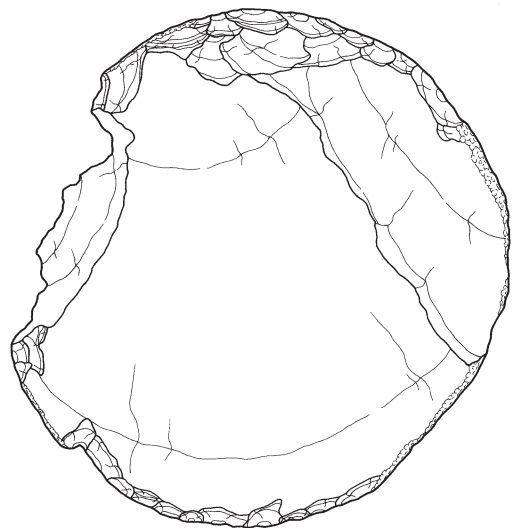
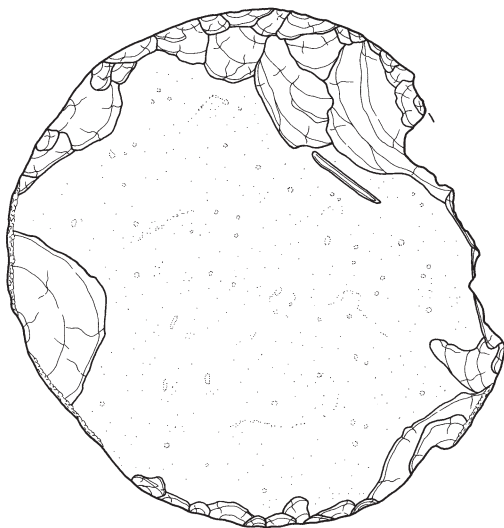
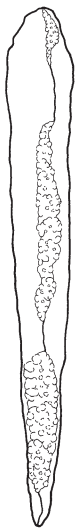
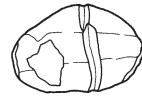
102



103



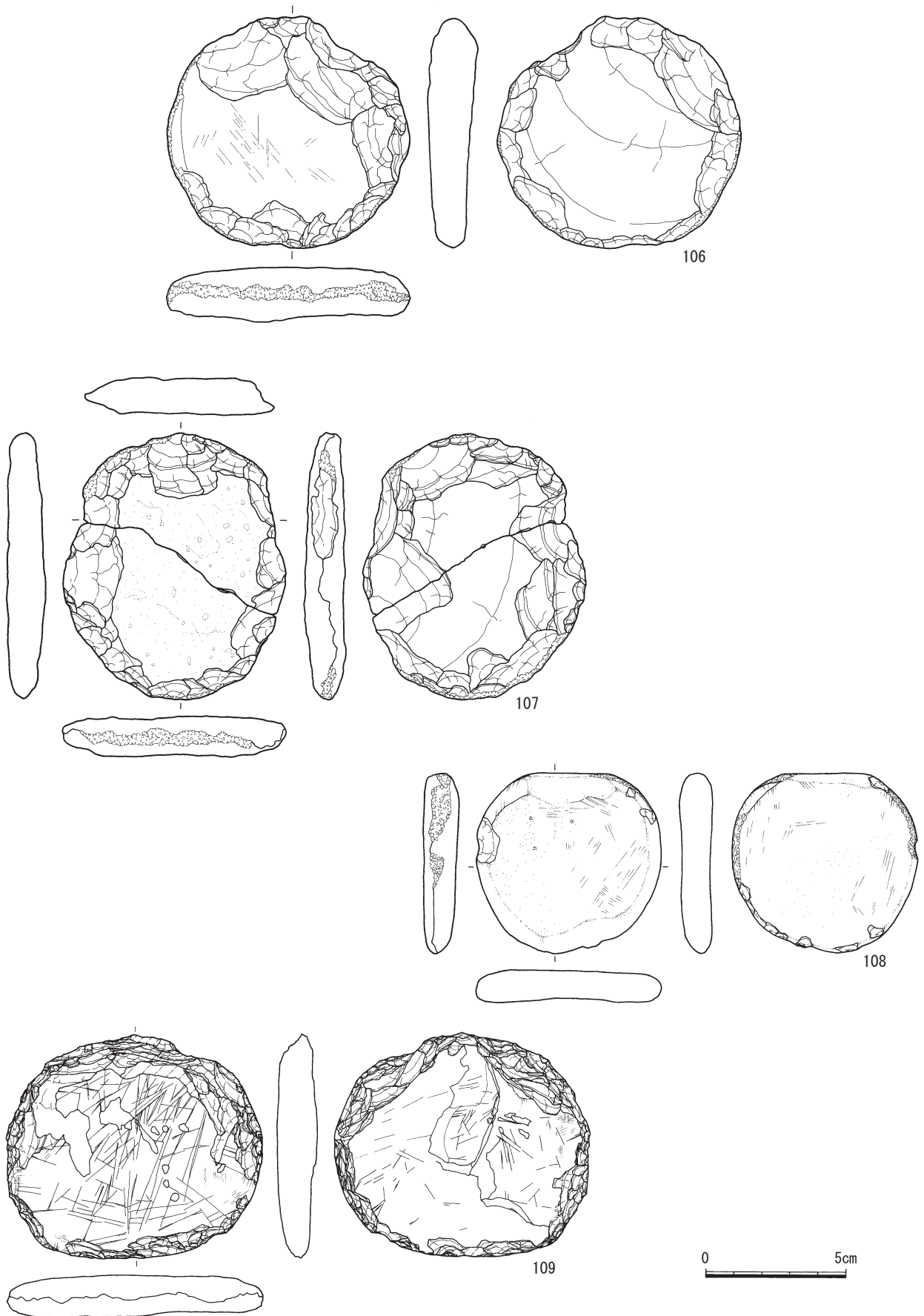
104



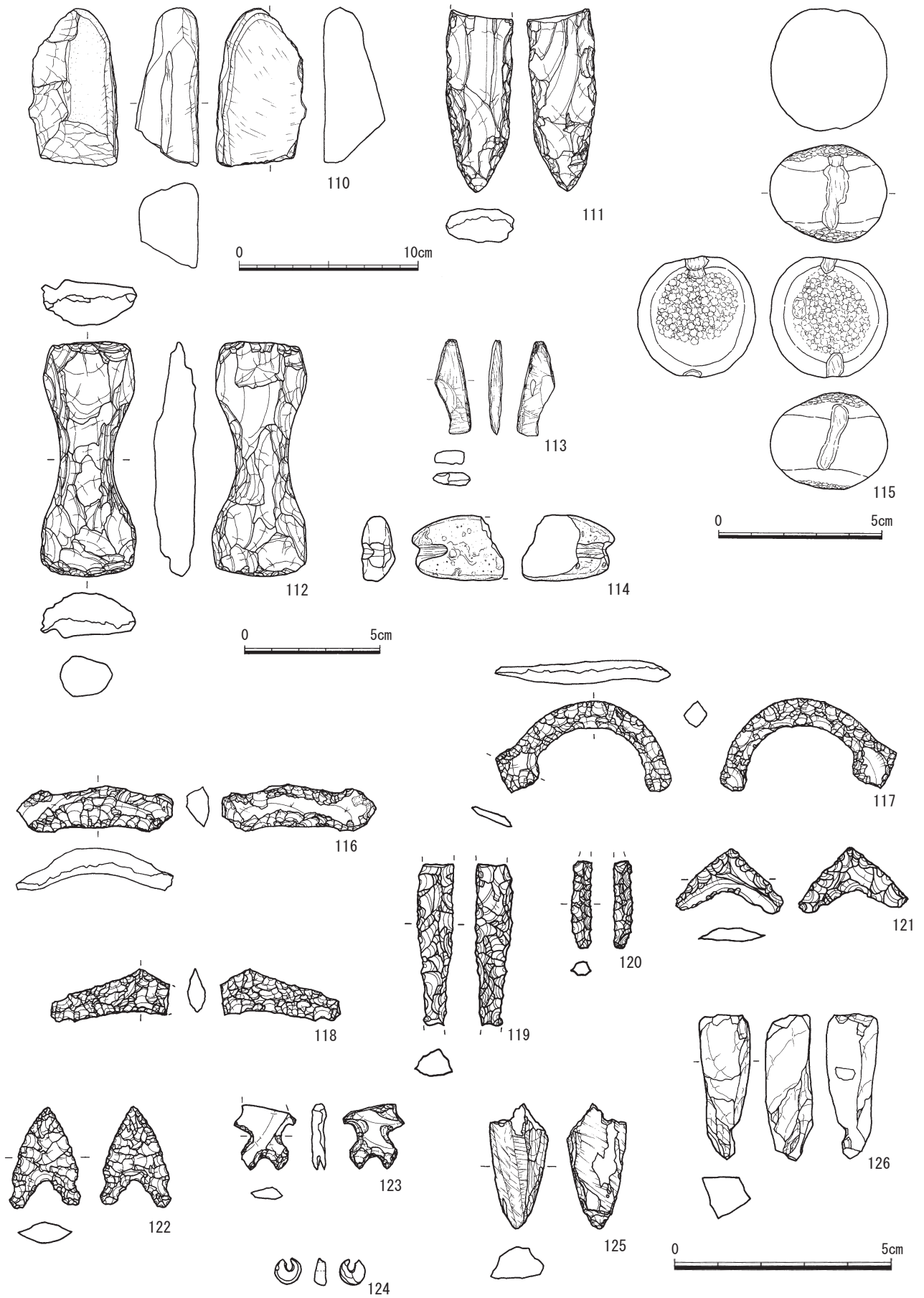
105



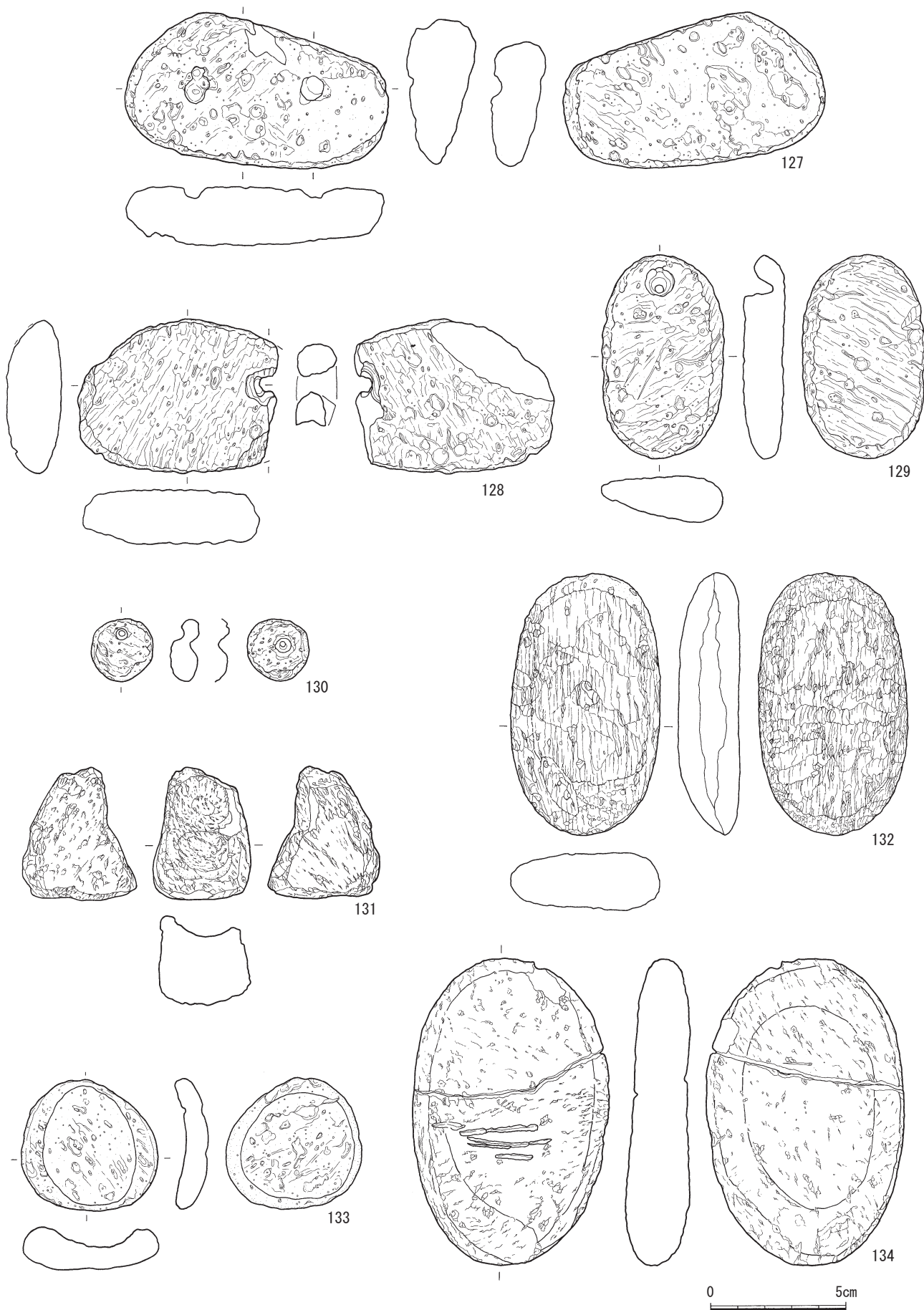
第 38 図 縄文時代の石器 7



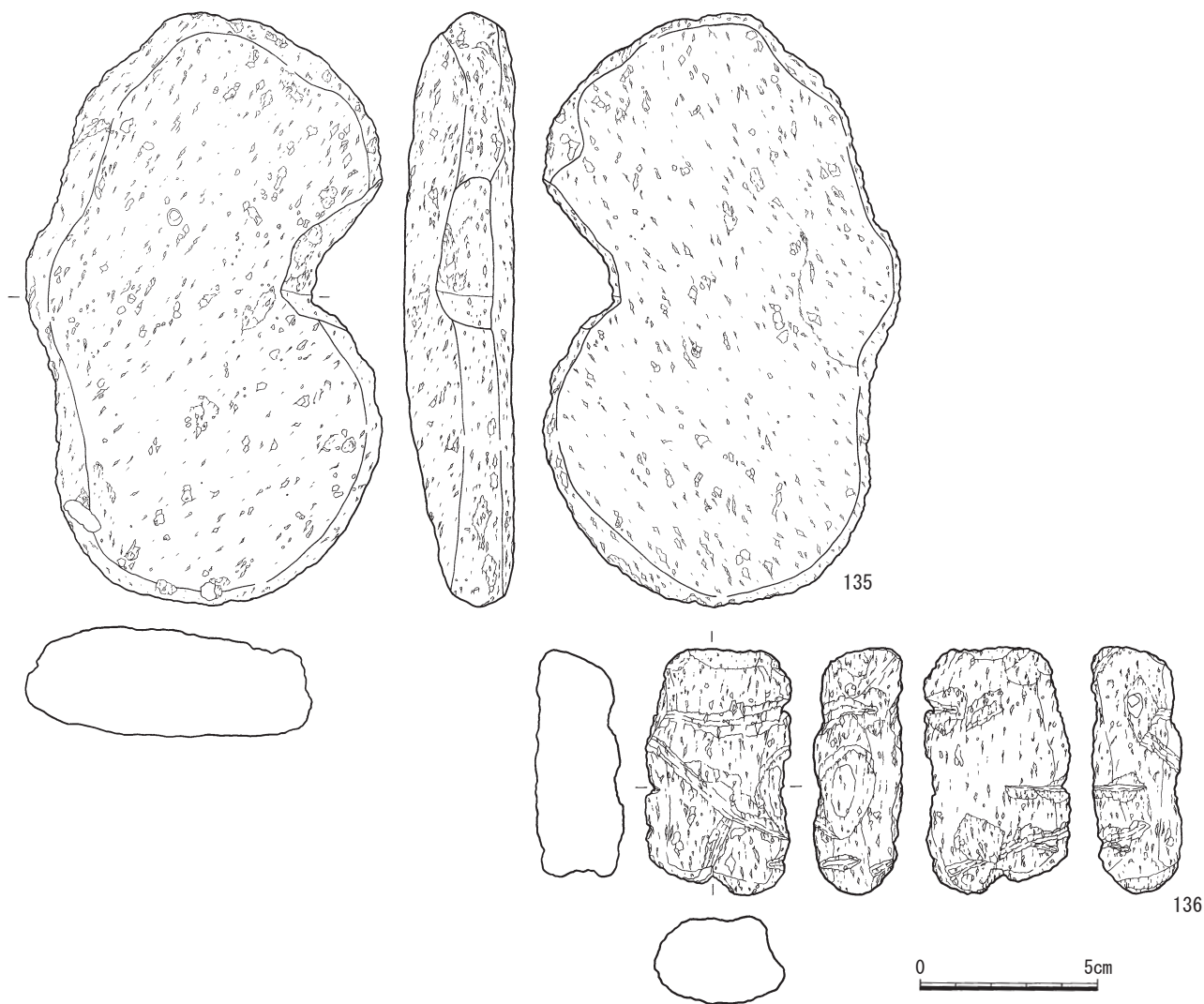
第 39 図 縄文時代の石器 8



第 40 図 縄文時代の石器 9



第 41 図 縄文時代の石器 10



第 42 図 縄文時代の石器 11

には折れが生じている。左右側辺及び下辺の3か所に半円状の挟りが入り、脚部が丸みをもつ形状となっている。

玉類 (第 40 図 124 ~ 126)

124 は直径 6 mm, 厚さ 3 mm ほどの光沢のある緑色の石材の小玉である。表裏面は中央に向かって擦りくぼみ、径 1.5 mm 程度の穿孔が施される。上部および裏面の一部を欠損する。125 は滑石に似た緑灰色の石材で、裏面及び背面の一部に明瞭な研磨の痕を認める。玉類の未製品とみられる。126 は 125 と同じ石材で、加工の痕跡はみられないが、玉類の石材と考えられる。

軽石加工品 (第 41, 42 図 127 ~ 136)

穿孔・線刻や人為的な形状加工が認められるものを軽石加工品とした。127 は表面及び右側縁裏面側に磨面があり、表面の2か所に径 8 mm の円形の貫通しない穿孔がある。128 は表面が凹面を呈し、右側縁の欠損部分に接して径 9 mm 程度の表裏からの穿孔が施されている。129 は表面上部に口幅約 1.1 cm の貫通しない孔がある。130 は直径 2.3 cm 程の裏面が平坦な軽石円礫で、表裏に

径 7 mm の穿孔が施されるが貫通していない。裏面の孔の周囲は赤みを帯びる。

132 は表裏に平坦面がある軽石礫で、穿孔等はないが、人為的に整形されたとみられる。131 は表面が凹み裏面が平坦で、右側面に明瞭な擦り凹みが認められる。133 は小型の軽石礫で、裏面は丸みをもって整形され、表面は上縁および左右側縁に縁を残し、下縁に開く凹面の磨面となっている。134 は長径が約 11 cm の扁平な軽石礫で、表裏面はわずかに磨り凹む磨面で、表面下半には横位の刻線が数条認められる。

135 は長径約 16.7 cm の扁平な軽石礫で、裏面は平坦な磨面となっている。左側縁は上下が削り込まれ、中央が突起し、右側縁には三角形に削り込みが入る。

136 は最大長約 7 cm の軽石礫で、表裏及び側面に横位・斜位に溝状の刻線が認められるほか、下面にもやや幅広の「V」字状の切り込みが施されている。左側面上位には右上方向に径 3 mm, 深さ 10 mm の穿孔も施されている。特異な資料で岩偶の一種の可能性もある。

表4 出土石器観察表1

挿図 番号	掲載 番号	器種	調査 年次	調査区		層 (遺構名)	法量 (cm)			重量 (g)	石材	文献	備考	遺物注記	カード注記	
							長 さ	幅	厚 さ							
9	1	石鏃	4次	b	I'	土坑1	2.2	1.7	0.3	0.78	安山岩	文献3		注記なし	KC UEK 4-B・I'・2-11	
	2	石鏃	4次	b	I'	土坑1	1.4	1.3	0.3	0.42	黒曜石	文献3		注記なし	KC UEK 4-B・I'・2-20	
	3	石鏃	4次	b	I'	土坑1	1.0	1.2	0.2	0.30	黒曜石			注記なし	上加世田ビットNo.20 B-1' . II層 S45.12.29	
	4	石鏃	4次	b	I'	土坑1	0.8	1.0	0.2	0.10	黒曜石			注記なし	UEK4 B-1' . 2層 11 S45.12.28	
	5	石鏃	4次	b	V'	土坑2	2.6	1.6	0.4	1.50	安山岩	文献3		注記なし	KC UEK 4-B・5'・2-30	
	6	石鏃	4次	b	V'	土坑2	1.3	1.5	0.3	0.60	チャート			注記なし	上加世田No.29 B-5' . 2層 S46.1.1	
	7	二次加工剥片	4次	b	V'	土坑2	5.1	6.6	1.1	44.90	ホルンフェルス			UEK4 B.5' .?Pit① A110203-16	-	
	8	スクレイパー	4次	b	I	土坑1	3.4	4.1	1.9	23.50	頁岩			KC UEK4 B.1.3 Pit16. 21	-	
	9	スクレイパー	4次	b	I	土坑1	4.2	5.9	1.3	26.40	安山岩			上カセダ①B.1.2 22 45.12.29	-	
32	41	石鏃	5次	A	VI	3上	1.5	1.4	0.3	0.48	安山岩			注記なし	上カセダ②A. VI. 3上 S47.1.6	
	42	石鏃	4次	d	II	3	1.9	1.5	0.4	0.90	頁岩			注記なし	上加世田①D. III. 3 (124) S46.1.4	
	43	石鏃	4次	d	III	3	2.0	1.7	0.5	2.15	チャート			注記なし	上加世田①D. III. 3 (165) S46.1.5	
	44	石鏃	4次	c	III	3	1.9	1.0	0.4	0.49	玉随			注記なし	上加世田①C. III. 3 (75) S45.12.31	
33	45	石鏃	4次	c	II	2	1.2	0.9	0.2	0.20	安山岩			注記なし	C-2・2(9) S45.12.26	
	46	石鏃	4次	e	III	3	1.3	1.2	0.4	0.37	頁岩	文献3	風化	注記なし	KC UEK 4-E・III・3-89	
	47	石鏃	4次	c	II	3	1.8	1.4	0.3	0.50	黒曜石		腰岳	注記なし	C- II・3(80) S45.12.31	
	48	石鏃	4次	d	II	3	1.7	1.3	0.3	0.43	安山岩	文献3		注記なし	KC UEK 4-D・II・3-108	
	49	石鏃	4次	e	III	2	2.2	1.4	0.3	0.80	頁岩			注記なし	E- III・2(37) S45.12.29	
	50	石鏃	4次	e	IV	3	2.2	1.3	0.2	0.80	頁岩			注記なし	E-4・3(61) S45.12.31	
	51	石鏃	4次	A	8	2上	1.5	1.5	0.3	0.50	安山岩		第二地点	注記なし	A-8・2上(12) S45.12.27	
	52	石鏃	4次	e	III	3	1.8	1.4	0.3	0.60	安山岩			注記なし	E-3・3(60) S45.12.31	
	53	石鏃	4次	c	IV	3	1.8	1.1	0.3	0.30	黒曜石	文献3	腰岳	注記なし	KC UEK 4-C・IV・3-117	
	54	石鏃	4次	c	IV	2	1.6	1.5	0.2	0.50	黒曜石			注記なし	C-4・2(4) S45.12.26	
	55	石鏃	4次	d	III	2下	2.2	1.1	0.3	0.60	黒曜石		腰岳	注記なし	D-3・II・下部(11) S45.12.29	
	56	石鏃	4次	e	IV	3	2.1	1.4	0.3	0.80	安山岩			注記なし	E-4・3(62) S45.12.31	
	57	石鏃	4次	e	IV	2	2.1	1.6	0.3	1.00	頁岩			注記なし	E- IV・2(14) S45.12.28	
	58	石鏃	4次	A	III	2上	2.4	1.3	0.3	0.80	安山岩			注記なし	A-3・2上(4) S45.12.27	
	59	石鏃	4次	e	IV	3	2.5	1.6	0.2	1.20	安山岩			注記なし	E-4・3(77) S46.1.1	
	60	石鏃	4次	d	IV	3	2.4	1.8	0.3	1.00	安山岩	文献3		注記なし	KC UEK 4-D・IV・3-119	
	61	石鏃	4次	c	II	3	1.5	1.0	0.2	0.40	安山岩			注記なし	C- II・3(66) S45.12.31	
	62	石鏃	4次	A	IV	2上	1.4	1.6	0.2	0.60	黒曜石		腰岳	注記なし	A-4・2上(2) S45.12.27	
	63	石鏃	4次	d	III	上	1.4	1.5	0.2	0.60	黒曜石		腰岳	注記なし	D-4・III上部(19) S45.12.30	
	64	石鏃	4次	e	IV	3	3.1	1.6	0.4	1.30	安山岩	文献3		注記なし	KC UEK 4-E・IV・3-181	
	65	石鏃	4次	d	III	上	2.0	1.5	0.3	0.80	ホルンフェルス			注記なし	D-4・III上部(24) S45.12.30	
	66	石鏃	4次	c	II	2	2.7	1.7	0.4	2.40	安山岩			注記なし	C-2・2(10) S45.12.26	
	67	石鏃	4次	c	II	2	1.4	1.4	0.2	0.50	頁岩			注記なし	C-2・2(15) S45.12.26	
	68	石鏃	4次	c	IV	3	1.9	1.5	0.4	1.20	玉随			注記なし	C- IV・3(78) S45.12.31	
	69	石鏃	4次	c	II	2	2.0	1.8	0.4	1.10	黒曜石		腰岳	注記なし	C-2・2(14) S45.12.26	
	70	石鏃	4次	d	II	3	1.6	1.3	0.2	0.40	黒曜石		腰岳	注記なし	D- II・3(15) S45.12.29	
	71	石鏃	4次	e	II	3	3.6	1.7	1.1	4.60	頁岩	文献3		注記なし	KC UEK 4-E・II・3-168	
	72	石鏃	6次	C	I	3下	2.6	1.2	0.2	1.10	安山岩	文献5		注記なし	上カセダC・I・3下 48.3.7	
	34	73	石匙	4次	c	III	3下	8.6	5.5	0.9	38.90	ホルンフェルス	文献3		①上カセダC・3・3下-162 S46.1.4	KC UEK 4-C・3・3下-162
		74	石匙	6次	F	VI	3下	6.5	4.5	0.5	15.70	粘板岩	文献5		KC UEK 6-F・VI・3下-17	KC UEK 6-F・VI・3下-17
		75	石匙	4次	e	IV	3	6.9	4.9	1.8	47.87	チャート	文献3		上加世田①E・4・3・93 S46.1.1	KC UEK 4-E・IV・3-93
		76	石匙	6次	D	II	3下	5.5	4.5	1.5	25.65	チャート	文献5		KC UEK 6-D・II・3下	KC UEK 6-D・II・3下
		77	石匙	6次	J	I	3下	6.2	5.7	1.2	36.81	安山岩	文献5		KC UEK 6-J・I・3下-808	KC UEK 6-J・I・3下-808
78		石匙	4次	c	III	2	6.4	4.4	0.6	18.70	粘板岩	文献5		KC UEK 4-C・III・2-26	KC UEK 4-C・III・2-26	
79		石匙	4次	d	IV	3上	6.8	4.9	0.8	23.06	玉随	文献5		上カセダ①D・IV・3上・20 45.12.30	KC UEK 4-D・IV・3上-20	
80		石匙	4次	d	II	3	7.8	3.4	1.2	30.58	安山岩	文献3		上カセダ①D・II・3・79 S46.1.3	KC UEK 4-D・II・3-79	
35	81	石匙	6次	B	I	3下	4.6	4.7	0.8	17.61	ホルンフェルス	文献5		KC UEK 6-B・I・3下-621	KC UEK 6-B・I・3下-621	
	82	石匙	4次	c	II	3	5.0	7.7	1.2	36.02	安山岩	文献5		上カセダ①C・II・3・39 S45.12.29	KC UEK 4-C・II・3-39	
	83	石匙	4次	c	III	3	5.5	1.9	0.9	7.67	安山岩	文献5		上カセダ①C・III・3・85 45.12.31	KC UEK 4-C・III・3-85	
	84	石匙	6次	K	III	3下	6.0	7.0	1.3	46.52	安山岩	文献5		KC UEK 6-K・III・3下-47	KC UEK 6-K・III・3下-47	
	85	石匙	6次	C	VI	3下	7.9	8.0	1.8	74.21	安山岩	文献5		KC UEK 6-C・VI・3下-684	KC UEK 6-C・VI・3下-684	
	86	石匙	6次	H	IV	3下	4.2	4.7	0.8	13.93	頁岩	文献5		KC UEK 6-H・IV・3下-1005	KC UEK 6-H・IV・3下-1005	

表5 出土石器観察表2

挿図 番号	掲載 番号	器種	調査 年次	調査区		層 (遺構名)	法量 (cm)			重量 (g)	石材	文献	備考	遺物注記	カード注記
							長さ	幅	厚さ						
35	87	石匙	6次	J	I	3下	4.3	5.1	0.6	16.97	頁岩	文献5	磨斧片転用か	KC UEK 6-J・I・3下-637	KC UEK 6-J・I・3下-637
	88	スクレイパー	6次	D	II	3下	5.8	7.6	1.3	27.98	安山岩	文献5	未製品?	KC UEK 6-D・II・3下-556	KC UEK 6-D・II・3下-556
	89	スクレイパー	4次	e	IV	2	2.0	2.9	1.0	4.35	黒曜石	文献3	腰岳	注記なし	KC UEK 4-E・IV・2-17
36	90	磨製石斧	4次	B	V'	2下	10.0	5.8	2.1	119.47	ホルンフェルス	文献5	※転用? 遺構内遺物?	上カセダ①B・V'・2・26 S45.12.30	KC UEK 4-B・V'・2下-26
	91	磨製石斧	4次	d	II	3	11.3	5.6	3.3	232.00	砂岩	文献3		上加世田①D・II・3(146) S46.1.5	KC UEK 4-D・II・3-146
	92	磨製石斧	4次	e	III	3	10.1	5.7	1.9	125.98	ホルンフェルス	文献3	半磨製	上加世田①E・3・3・95 S46.1.1	KC UEK 4-E・3・3-95
37	93	打製石斧	4次	e	IV	3	11.3	7.1	1.6	146.91	ホルンフェルス	文献3		上加世田①E・4・3・123 S46.1.2	KC UEK 4-E・IV・3-123
	94	打製石斧	4次	d	II	3	13.4	7.4	2.1	198.16	頁岩	文献5		上加世田①D・2・3・67 S46.1.3	KC UEK 4-D・2・3-67
	95	打製石斧	4次	e	II	2	13.3	7.6	1.8	240.00	安山岩	文献5		上カセダ①E・II・2・3	KC UEK 4-E・II・2-3
	96	打製石斧	4次	c	II	3	12.0	8.8	2.0	250.00	ホルンフェルス	文献3		上カセダ①C・II・3・29 45.12.28	KC UEK 4-C・II・3-29
	97	打製石斧	4次	e	II	2	11.9	8.8	1.3	200.00	安山岩	文献5		上カセダ①E・II・2・33 45.12.29	KC UEK 4-E・II・2-33
	98	打製石斧	4次	e	IV	3	12.3	7.8	1.6	190.44	安山岩	文献3	舌状	上カセダ①E・北断3層 S46.1.5	KC UEK 4-E・IV・3
	99	打製石斧	4次	d	IV	3	12.8	5.2	1.1	89.44	ホルンフェルス	文献5	短冊型	上カセダ1 D・IV・3・90 S46.1.3	KC UEK 4-D・IV・3-90
	100	打製石斧	4次	e	III	3	7.4	7.1	1.6	109.27	ホルンフェルス	文献5		上加世田①E・3・3・174 S46.1.3	KC UEK 4-E・III・3-174
	38	101	石鍾	6次	F	IV	3下	7.6	8.7	3.1	220.50	花崗岩	文献5		KC UEK 6-F・IV・3下-810
102		石鍾	6次	B	I	3下	6.8	6.5	1.5	71.00	砂岩	文献5		KC UEK 6-B・I・3下-621	KC UEK 6-B・I・3下-621
103		石鍾	6次	E	IV	3下	8.3	6.5	2.0	135.87	砂岩	文献5		KC UEK 6-E・IV・3下-726	KC UEK 6-E・IV・3下-726
104		石鍾	5次	F	VI	2下	4.9	3.5	2.3	44.87	花崗岩		有溝	注記なし	上カセダ②F・VI・2下 46.12.31
105		円盤形石器	2次	B	VI	2	13.7	13.3	1.8	340.10	安山岩			KC UEK2.B.6.2 A110207-9	-
39	106	円盤形石器	1次	A	III	4	8.3	8.7	2.0	169.88	砂岩			KC UEK1.A.Ⅲ.4A109202-13 S43.10.21	KC UEK1.A.Ⅲ.4A109202-13 S43.10.21
	107	円盤形石器	2次	B	VII	2	9.5	8.0	1.4	158.03	ホルンフェルス			KC UEK2.B.7.2 A109301-3P13	-
				B	VIII	1								KC UEK2.B.8.1 A10207-11	-
	108	円盤形石器	1~3?	-	-	-	6.5	6.6	1.3	75.87	花崗岩			KC UEK A111101-13④	-
109	円盤形石器	2次	A	II	2	8.0	9.2	1.5	149.07	粘板岩			KC UEK2.A.Ⅱ.2 A109301-4P13	-	
40	110	有溝砥石	不明	-	-	-	8.8	4.9	3.2	168.06	砂岩			KC UEK A110301-5①177	-
	111	打製石槍	4次	e	II	2	10.0	3.8	1.9	83.96	ホルンフェルス	文献3		上カセダ①E・II・2・19 45.12.29	KC UEK 4-E・II・2-19
	112	分銅形石製品	6次	B	I	3下	8.6	3.5	1.7	54.20	ホルンフェルス	文献5	分銅形	KC UEK 6-B・I・3下-393	KC UEK 6-B・I・3下-393
	113	石斧形 ミニチュア石製品	1次	A	III	2	3.5	1.2	0.5	2.46	頁岩		焼土内	KC UEK1.A.3.2 S43.10.10	-
	114	石製品	1次	A	II	3	2.4	3.4	1.2	6.72	凝灰岩			UEK1.A.Ⅱ.3 S43.11.3	-
	115	切目石鍾	5次	-	-	-	3.7	3.6	3.0	53.91	安山岩			KC UEK5 A109306-7	-
	116	異形石器	4次	d	II	3	3.6	1.0	0.5	1.97	黒曜石	文献3	腰岳	注記なし	KC UEK 4-D・II・3-93
	117	異形石器	6次	C	I	3下	4.1	2.1	0.5	1.62	黒曜石	文献5	腰岳	注記なし	上カセダC・I・3下 P268 48.3.7
	118	異形石器	6次	J	I	3下	1.0	2.7	0.4	1.06	黒曜石	文献5	腰岳	注記なし	上カセダJ・I・3下 P702 48.3.11
	119	異形石器	1次	A	I	3	3.2	0.8	0.6	2.05	黒曜石		腰岳	注記なし	KC UEK 1-A・I・3 ④ S43.10
	120	異形石器	4次	b	VI	2	3.0	0.5	0.3	0.33	黒曜石		腰岳	注記なし	上加世田① B.6.2 (27) S45.12.30
	121	異形石器	4次	e	III	2	1.5	2.5	0.3	0.66	黒曜石		姫島?	注記なし	上加世田① E.Ⅲ.2.36 45.12.29
	122	異形石器	6次	L	III	3下	2.4	1.7	0.5	1.19	黒曜石	文献5	針尾?	注記なし	上カセダL・III・3下 P143 48.3.5
	123	異形石器	4次	d	I	3	1.5	1.4	0.3	0.48	安山岩			注記なし	上加世田①D.1.Ⅲ S46.1.1
	124	小玉	5次	M	III	3下	0.6	0.7	0.3	0.12	クロム白雲母?			注記なし	上カセダ③MⅢ.3下 S47.1.12
	125	玉類未製品	6次	H	IV	3下	2.9	1.4	0.7	3.15	滑石?			注記なし	上カセダH.Ⅳ.3下 P65 48.3.4
	126	玉類石材	6次	H	IV	3下	3.4	1.2	1.0	4.74	滑石?			注記なし	上カセダH.Ⅳ.3下 P64 48.3.4
	41	127	軽石加工品	不明	A	I	?	5.8	9.3	2.6	29.25	軽石			A.1.? 8
128		軽石加工品	4次	c	IV	2	5.7	7.4	2.0	25.19	軽石			KC UEK4.C.Ⅳ.2.31 A110305-14	上加世田①C.Ⅳ.2(31) S45.12.28
129		軽石加工品	4次	c	III	3	7.6	4.5	1.7	15.14	軽石			注記なし	上加世田①C.Ⅲ.3(84) S45.12.31
130		軽石加工品	3次	F	IV	3	2.3	2.3	1.0	1.43	軽石			注記なし	上カセダF.Ⅳ.3写7 44.8.17
131		軽石加工品	3次	F	II	3	4.9	3.6	3.0	15.17	軽石			KC UEK3-F.Ⅱ.3 A110301-3 P8	上加世田 F.Ⅱ.3 S44.8.16
132		軽石加工品	4次	c	III	3	9.7	5.5	2.2	33.43	軽石			KC UEK4-C.Ⅲ.3 77A110305-14	上加世田①C.Ⅲ.3(77) S45.12.31
133		軽石加工品	3次	F	IV	3	4.8	5.1	1.6	5.75	軽石			注記なし	上カセダF.Ⅳ.3 44.8.16
134		軽石加工品	3次	X	-	2	11.4	7.3	2.4	51.44	軽石			KC UEK3 X.Ⅱ A110301-3 P4	上カセダ X-2層 S44.8.14
42	135	軽石加工品	3次	F	III	3	16.7	9.2	3.0	123.30	軽石			KC UEK F.Ⅲ.3 A111101-3	F.Ⅲ.3 S44.8.17
	136	軽石加工品	不明	-	-	-	7.0	4.1	2.5	17.63	軽石			注記なし	KC UEK

第4節 自然科学分析

(1) 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ
伊藤 茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・
Zaur Lomtadize・山本 華

① はじめに

上加世田遺跡より出土した試料について、加速器質量分析法 (AMS 法) による放射性炭素年代測定を行った。

② 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表6のとおりである。試料 No.1 (PLD-44798) は、B I 土坑1から出土したイチイガシ炭化子葉である。試料 No.2 (PLD-44799) は、B V 土坑2から出土した炭化材で、最終形成年輪が残存していない部位不明の破片である。調査所見によると、遺構の時期はいずれも縄文時代後期から晩期と推測されている。

試料は調製後、加速器質量分析計 (パレオ・ラボ、コンパクト AMS : NEC 製 1.5SDH) を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

③ 結果

表7に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、第43図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.27% であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 ± 40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.4 (較正曲線データ : IntCal20) を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する

68.27% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は 95.45% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

④ 考察

試料について、同位体分別効果の補正および暦年較正を行った。以下、各試料の暦年較正結果のうち 2σ 暦年代範囲 (確率 95.45%) に着目して結果を整理する。なお、縄文時代の土器編年と暦年代の対応関係については小林 (2017) を、弥生時代については藤尾 (2013) を参照した。

B I 土坑1から出土したイチイガシ炭化子葉 (試料 No.1 : PLD-44798) は、1367-1359 cal BC (1.15%), 1284-1153 cal BC (83.53%), 1149-1125 cal BC (10.76%) の暦年代を示した。これは、縄文時代後期後葉から晩期前葉に相当し、調査所見による遺構の推定時期と整合的である。種実試料の場合、測定結果は種実の結実年代を示す。

B V 土坑2から出土した炭化材 (試料 No.2 : PLD-44799) は、125-229 cal AD (95.45%) の暦年代を示した。これは弥生時代後期に相当し、調査所見による遺構の推定時期よりも新しい。木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると内側であるほど古い年代が得られる (古木効果)。試料 No.2 は最終形成年輪が残存しておらず、残存している最外年輪のさらに外側にも年輪が存在していたはずである。したがって、木材が実際に枯死もしくは伐採されたのは、測定結果の年代よりもやや新しい時期であったと考えられる。

【引用・参考文献】

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.
- 藤尾慎一郎 (2013) 弥生文化像の新構築. 275p, 吉川弘文館.
- 小林謙一 (2017) 縄文時代の実年代—土器型式編年と炭素 14 年代—. 263p, 同成社.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」: 3-20, 日本第四紀学会.
- Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen,

U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere

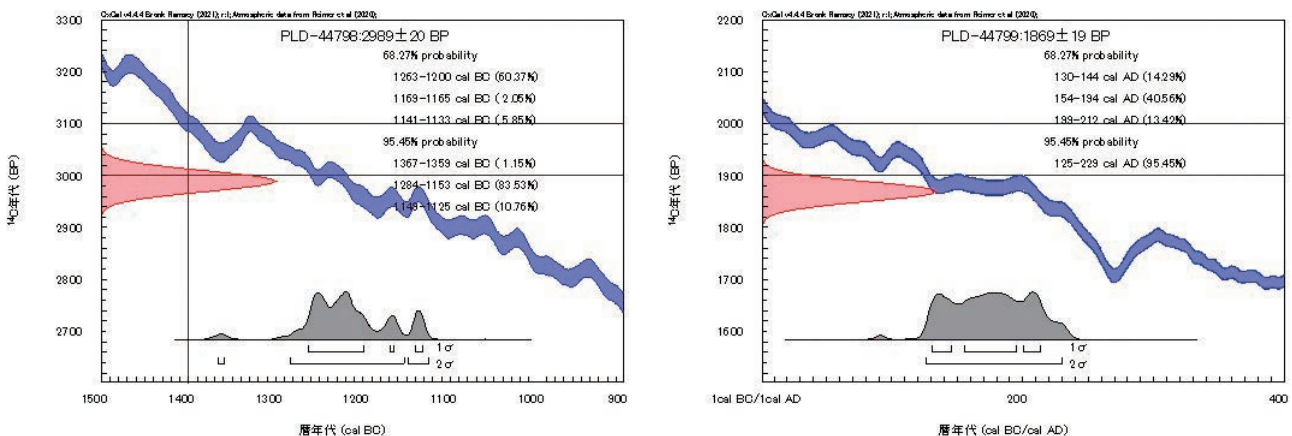
radiocarbon age calibration curve (0–55 cal kBP). Radiocarbon, 62(4), 725757, doi:10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020)

表 6 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-44798	遺構：B I 土坑 1 試料No. 1 遺物No. 575-⑥ 1-a	種類：イチイガシ炭化子葉 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2mol/L)
PLD-44799	遺構：B V 土坑 2 試料No. 2	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2mol/L)

表 7 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年較正した年代範囲	
				1 σ 暦年較正範囲	2 σ 暦年較正範囲
PLD-44798 試料No. 1 遺物No. 575-⑥ 1-a	-26.74 ± 0.18	2989 ± 20	2990 ± 20	1263–1200 cal BC (60.37%) 1169–1165 cal BC (2.05%) 1141–1133 cal BC (5.85%)	1367–1359 cal BC (1.15%) 1284–1153 cal BC (83.53%) 1149–1125 cal BC (10.76%)
PLD-44799 試料No. 2	-28.87 ± 0.23	1869 ± 19	1870 ± 20	130–144 cal AD (14.29%) 154–194 cal AD (40.56%) 199–212 cal AD (13.42%)	125–229 cal AD (95.45%)



第 43 図 暦年較正結果

※ 本項中の B I 土坑 1 と B V 土坑 2 は、それぞれ本文中 (P12) の 1 号土坑 と 2 号土坑 に該当する。

(2) 上加世田遺跡から出土した炭化種実

パンダリ スダルシャン (パレオ・ラボ)

① はじめに

鹿児島県南さつま市加世田川畑に所在する上加世田遺跡は、薩摩半島の南端近くに立地する、縄文時代を中心とした遺跡である。ここでは、縄文時代後期後葉～晩期前葉と推定された土坑より出土した炭化種実の同定を行い、当時の利用植物について検討した。なお、一部の試料については放射性炭素年代測定も行われている (P 55, 56 参照)。

② 試料と方法

試料は、肉眼で確認・採取された炭化種実 4 試料である。試料の内訳は、B I 土坑 1 の No. 575-⑥-1 より得られた全炭化種実から 30 点、No. 575-⑦-1 より得られた全炭化種実から 50 点、No. 575-⑦-2, 3, 8 より得られた全炭化種実から 60 点、No. 576-10 ~ 12 より得られた全炭化種実から 30 点である。なお No. 575-⑥-1 から得られたイチイガシ炭化子葉 1 点 (PLD-44798) を用いて年代測定が行われ、測定結果は 2 σ 暦年代範囲で 1149-1125 cal BC (10.76%), 1284-1153 cal BC (83.53%), 1367-1359 cal BC (1.15%) で縄文時代後期後葉～晩期前葉の暦年代を示した (放射性炭素年代測定の項参照)。

抽出・同定・計数は、現生標本と比較し、肉眼および実体顕微鏡下で行った。試料は、鹿児島県立埋蔵文化財センターに保管されている。

③ 結果

同定した結果、木本植物のイチイガシ炭化子葉のみ、1 分類群が得られた。表 8 に遺構や試料別にまとめた同定数を示し、表 9 に試料名別の同定結果を示す。

以下に、出土した炭化種実を試料名別に記載する。

No. 575-⑥-1 : イチイガシが 29 点 (完形 17 点, 半割 13 点) 得られた。

No. 575-⑦-1 : イチイガシが 50 点 (完形 33 点, 半割 17 点) 得られた。

No. 575-⑦-2 : イチイガシ半割が 12 点得られた。

No. 575-⑦-3 : イチイガシ完形が 18 点得られた。

No. 575-⑦-8 : イチイガシ完形が 30 点得られた。

No. 576-10 : イチイガシ半割が 5 点得られた。

No. 576-11 : イチイガシが 5 点 (完形 2 点, 半割 3 点) 得られた。

No. 576-12 : イチイガシが 20 点 (完形 10 点, 半割 10 点) 得られた。

次に、得られた分類群の記載を行い、図版 I に写真を示して同定の根拠とする。なお、分類群の学名は米倉・梶田 (2003-) に準拠する。

(1) イチイガシ *Quercus gilva* Blume 炭化子葉
ブナ科

楕円体～長楕円体で、側面観は俵形。先端の突出はあまりない。縦方向に明瞭な溝が 1 本確認できたが、溝が浅いものや複数あるもの等、変異の幅が大きい。完形個体の大きさは、高さ 12.7mm, 幅 9.4mm (図版 1-1), 高さ 11.4mm, 幅 9.3mm (図版 1-2), 高さ 10.1mm, 幅 7.8mm (図版 1-3), 半割の個体の大きさは、高さ 12.8mm, 幅 9.8mm (図版 1-4), 高さ 11.1mm, 幅 8.0mm (図版 1-5, PLD-44798)。

④ 考察

縄文時代後期後葉～晩期前葉とされる B I 土坑 1 から出土した炭化種実を同定した結果、食用可能な野生植物のイチイガシが得られた。イチイガシは生食可能なドングリ類であり、縄文時代早期以降の鹿児島県では最もよく利用されていたとされ (小畑 2011), 産出した部位は食べられる部位である子葉であった。ただし、イチイガシ等のドングリ類の果皮は薄く、炭化すると取れやすくなるため、果実の状態が炭化したのか、子葉の状態が炭化したのかは不明である。加工時や保管中などに何らかの要因で炭化して堆積した可能性も考えられる。試料産出地点よりイチイガシが大量に得られている点から、遺跡周辺にはイチイガシのカシ林などが存在していた可能性が高いと考えられる。

【引用文献】

小畑弘己 (2011) 東北アジア古民族植物学と縄文農耕. 309p, 同成社.
米倉浩司・梶田 忠 (2003-) BG Plants 和名-学名インデックス (YList), <http://ylist.info>

表 8 上加世田遺跡から出土した炭化種実 (括弧内は破片数)

試料 No.	3	4	5	6
遺構名	BI 土坑 1			
試料名	No. 575-⑥-1	No. 575-⑦-1	No. 575-⑦-2, 3, 8	No. 576-10 ~ 12
分類群	縄文時代後期後葉～晩期前葉			
イチイガシ 炭化子葉	17 (13)	33 (17)	48 (12)	12 (18)

表 9 上加世田遺跡出土の大型植物遺体

試料 No.	遺構名	試料名	分類群	部位	
3	BI 土坑 1	No. 575-⑥-1	イチイガシ	炭化子葉	17 (13)
4		No. 575-⑦-1	イチイガシ	炭化子葉	33 (17)
5		No. 575-⑦-2	イチイガシ	炭化子葉	(12)
		No. 575-⑦-3	イチイガシ	炭化子葉	18
		No. 575-⑦-8	イチイガシ	炭化子葉	30
6		No. 576-10	イチイガシ	炭化子葉	(5)
		No. 576-11	イチイガシ	炭化子葉	2 (3)
		No. 576-12	イチイガシ	炭化子葉	10 (10)



スケール 1-5:5mm

図版 I 上加世田遺跡B 1 土坑 1 から出土した炭化種実

1. イチイガシ炭化子葉 (完形) (No. 575 - ⑥ - 1), 2. イチイガシ炭化子葉 (完形) (No. 576 - 12), 3. イチイガシ炭化子葉 (完形) (No. 575 - ⑦ - 8), 4. イチイガシ炭化子葉 (半割) (No. 575 - ⑥ - 1), 5. イチイガシ炭化子葉 (半割) (No. 575 - ⑥ - 1, PLD-44798)

※ 本項中のB I 土坑 1 は、本文中 (P12) の 1 号土坑に該当する。

(3) 上加世田遺跡出土の石製玉類の蛍光 X 線分析

竹原弘展 (パレオ・ラボ)

① はじめに

南さつま市加世田川畑に所在する上加世田遺跡より出土した石製玉類について、蛍光 X 線分析を行い、石材を検討した。

② 試料と方法

分析対象は、石製玉類 3 点である (表 10, 図版 II-1a, 2a, 3a)。時期は縄文時代後期後葉～晩期前半とみられている。

表 10 分析対象

試料番号	試料名	備考
1	管玉未製品 No. 199	長さ 2.8, 幅 0.9, 厚さ 0.8 (cm)
2	勾玉 No. 200	長さ 1.8, 幅 1.5, 厚さ 0.45 (cm)
3	獣形勾玉 No. 218	長さ 3.1, 幅 4.9, 厚さ 1.4 (cm)

分析装置はエスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光 X 線分析計 SEA1200VX を使用した。

装置の仕様は、X 線管が最大 50kV, 1000 μ A のロジウム (Rh) ターゲット, X 線照射径が 8 mm または 1 mm, X 線検出器は SDD 検出器である。また、複数の一次フィルタが内蔵されており、適宜選択、挿入することで S/N 比の改善が図れる。検出可能元素はナトリウム (Na) ~ ウラン (U) であるが、ナトリウム, マグネシウム (Mg), アルミニウム (Al) といった軽元素は、蛍光 X 線分析装置の性質上、検出感が悪い。

測定条件は、管電圧・一次フィルタの組み合わせが 15kV (一次フィルタ無し)・50kV (一次フィルタ Pb 測定用・Cd 測定用) の計 3 条件で、測定時間は各条件 500 ~ 1000s, 管電流自動設定, 照射径 8 mm, 試料室内雰囲気真空に設定した。定量分析は、酸化物の形で算出し、ノンスタンダード FP 法による半定量分析を行った。

また、電子天秤 (株式会社エー・アンド・デイ製 GR-60 に同比重測定キット AD-1653 を使用) で空気中重量と水中重量を測定し、比重を算出した。

③ 分析結果

図版 II に測定位置および測定位置周辺の実体顕微鏡写真を示す。表 11 に、半定量分析結果および比重を示す。

蛍光 X 線分析の結果、ナトリウム (Na₂O), マグネシウム (MgO), アルミニウム (Al₂O₃), ケイ素 (SiO₂), リン (P₂O₅), 硫黄 (SO₂), カリウム (K₂O), カルシウム (CaO), チタン (TiO₂), クロム (Cr₂O₃), マンガン (MnO), 鉄 (Fe₂O₃), ニッケル (NiO), 亜鉛 (ZnO), ルビジウム (Rb₂O), ストロニウム (SrO), ジルコニウム (ZrO₂), バリウム (BaO) が検出された。

比重測定では、2.7 ~ 3.3 の値を示した。

④ 考察

試料番号 1 は、比重が 2.7 であり、ヒスイとは明瞭に異なる。マグネシウム (MgO), アルミニウム (Al₂O₃), ケイ素 (SiO₂), 鉄 (Fe₂O₃) が多かった。特にマグネシウム (MgO) の多量の検出は特徴的である。以上の特徴より、蛇紋岩や滑石の類と考えられる。

試料番号 2 は、比重が 2.8 であり、ヒスイとは明瞭に異なる。アルミニウム (Al₂O₃), ケイ素 (SiO₂), カリウム (K₂O) が多く、クロムの検出が特徴的であった。以上の測定結果や色調といった特徴は、比佐・大坪・小畑 (2008) で紹介されているクロム白雲母とよく一致しており、クロム白雲母製と考えられる。

試料番号 3 は、比重が 3.3 と他試料よりも高かった。アルミニウム (Al₂O₃), ケイ素 (SiO₂), カルシウム (CaO) が多く、ナトリウム (Na₂O), マグネシウム (MgO) もやや多い。比重が高く、ナトリウム (Na₂O), カルシウム (CaO) が特徴的に含まれるため、ヒスイと推定される。

ヒスイ (硬玉) は、微細なヒスイ輝石 (NaAlSi₃O₆) を主体とした岩石で、日本では新潟県糸魚川周辺地域の産出が特に有名である。白色と半透明緑色が混ざった色調のものが代表的であるが、ヒスイという岩石の中には、ヒスイ輝石だけでなくオンファス輝石 ((Na, Ca) (Al, Mg, Fe)Si₃O₆) も含まれており、ヒスイの緑色部の多くはオンファス輝石中の鉄に起因すると考えられている (宮島 2004)。ヒスイの産出地としては、糸魚川周辺地域の他に、鳥取県若桜, 兵庫県大屋, 岡山県大佐, 長崎県三重, 北海道神威古潭, 静岡県引佐, 高知県円行寺, 熊本県泉などが、現代においては知られている。

表 11 比重および半定量分析結果 (mass%)

試料番号	比重	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	SO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	Cr ₂ O ₃	MnO	Fe ₂ O ₃	NiO	ZnO	Rb ₂ O	SrO	ZrO ₂	BaO
1	2.7	—	26.85	27.92	32.73	0.55	0.15	0.90	0.65	0.14	0.26	0.27	9.34	0.18	0.01	—	—	—	0.05
2	2.8	—	2.82	36.34	43.28	0.84	0.46	9.36	2.23	1.28	1.11	0.05	1.68	0.01	0.01	0.01	0.01	0.02	0.50
3	3.3	4.50	4.71	16.62	58.51	0.43	0.88	0.25	10.78	0.38	0.13	0.03	2.45	0.05	—	—	0.21	0.09	—

【引用・参考文献】

比佐陽一郎・大坪志子・小畑弘己（2008）縄文～古墳時代の装身具に用いられる石材の蛍光X線分析について．日本文化財科学会第25回大会研究発表要旨集，250-251．

宮島 宏（2004）とっておきのひすいの話増補改訂版．40p，フォッサマグナミュージアム．

中井 泉編（2005）蛍光X線分析の実際．242p，朝倉書店．



図版Ⅱ 分析対象遺物の測定位置 (a) と実体顕微鏡写真 (b) (右上数字は試料番号)

第3章 上加世田遺跡発掘調査の総括

本章では、発掘調査そのものとその調査によって得られた上加世田遺跡の評価について整理してみたい（敬称略）。

第1節 発掘調査の総括

上加世田遺跡のスタートは、当時吹上高等学校の2年生で加世田市民体育大会に参加していた当房満也が、競技場近くの県道工事で掘削された崖壁面から、数点の遺物を採集したことであった。昭和43（1968）年9月8日のことである^{註1）}。当房の旧師で、当時ラ・サール高等学校で教鞭をとっていた上村俊雄に連絡。さらに上村が考古学における自身の恩師である河口貞徳に伝え、一気に上加世田遺跡の存在が認識されることとなった（第2章第2節）。

上村の通報から1週間後に現地確認を行った河口は、その時のことについて「現地で見えたものは黒川式よりも古い、縄文晩期の一型式であり、鹿児島県では初めて見るものであった。帰路吹上高校に立ち寄り同校社会研究クラブが採集していた上加世田遺跡出土の土器を見せてもらった。その後2回の現地調査を行い、遺跡が縄文晩期の新しい形（ママ）式を出土する単純遺跡であり、かなり大規模で、従来南九州では発見されたことのない好い遺跡であることを確認した」とある（表2文献5）。

いわゆる工事中発見である。当房満也（吹上高等学校社会研究クラブ）→上村俊雄→河口貞徳という流れは、偶然なのか必然なのか。まさに運命的な発見であったと考へざるを得ない。遺跡の発見とはそもそもそういうものかもしれない。その後の調査成果を考えると、発見の意義の重大さにあらためて気づかされる思いである。

発見から1か月足らずで最初の発掘調査が実施されて以来、平成8（1996）年度の調査まで、約30年間に計12回の発掘調査が実施された。

その概要については、表1に示した通りである。本事業のベースとなる「河口コレクション」関係でいうと、1～6次がその対象となっている。調査主体者として、河口自身の他、鹿児島県史蹟調査会や加世田市教育委員会があるが、最初の6回の調査責任者は河口であった。

11次調査のように、遺跡範囲の確認を目的とした調査も実施されたが、7～10、12次調査は、加世田川のルート変更工事や急傾斜崩壊対策工事、宅地造成工事など、開発に伴う記録保存調査であった。なお、7次以降の調査主体は加世田市教育委員会であったが、これらの調査でも調査指導者としての河口の存在があった。

これまで12回の発掘調査について、その位置関係を示

したのが第44図である。これによると、現在の県道石垣・加世田線（旧向江白亀線）の工事で分断された台地の北側部分に調査エリアが集中していることがわかる。

加世田川のルート変更工事による7次調査で発掘対象地となった県道より東南部域（第Ⅱ地点）においても、縄文時代後～晩期の遺構・遺物が発見されていることから、県道部分はもちろん、宅地化が進んだ県道より南側のエリアへも遺跡が広がっていたものと考えられる。

さて、今回は「河口コレクション」として収蔵・保管されている上加世田遺跡資料のうち、4～6次調査の資料整理を対象とした。ただ、この4～6次調査については、遺跡所在地の南さつま市（調査当時は加世田市）にも大量の遺物が保管されていた。この市保管の資料については、市教育委員会によって、令和2（2020）年3月に『南さつま市埋蔵文化財発掘調査報告書（12）上加世田遺跡4～6次調査』として刊行（表2文献15）され、本報告においても、その成果を活用させていただいた。4～6次調査成果については、市教委と県立埋文センターの報告を合わせて捉えていただきたい。

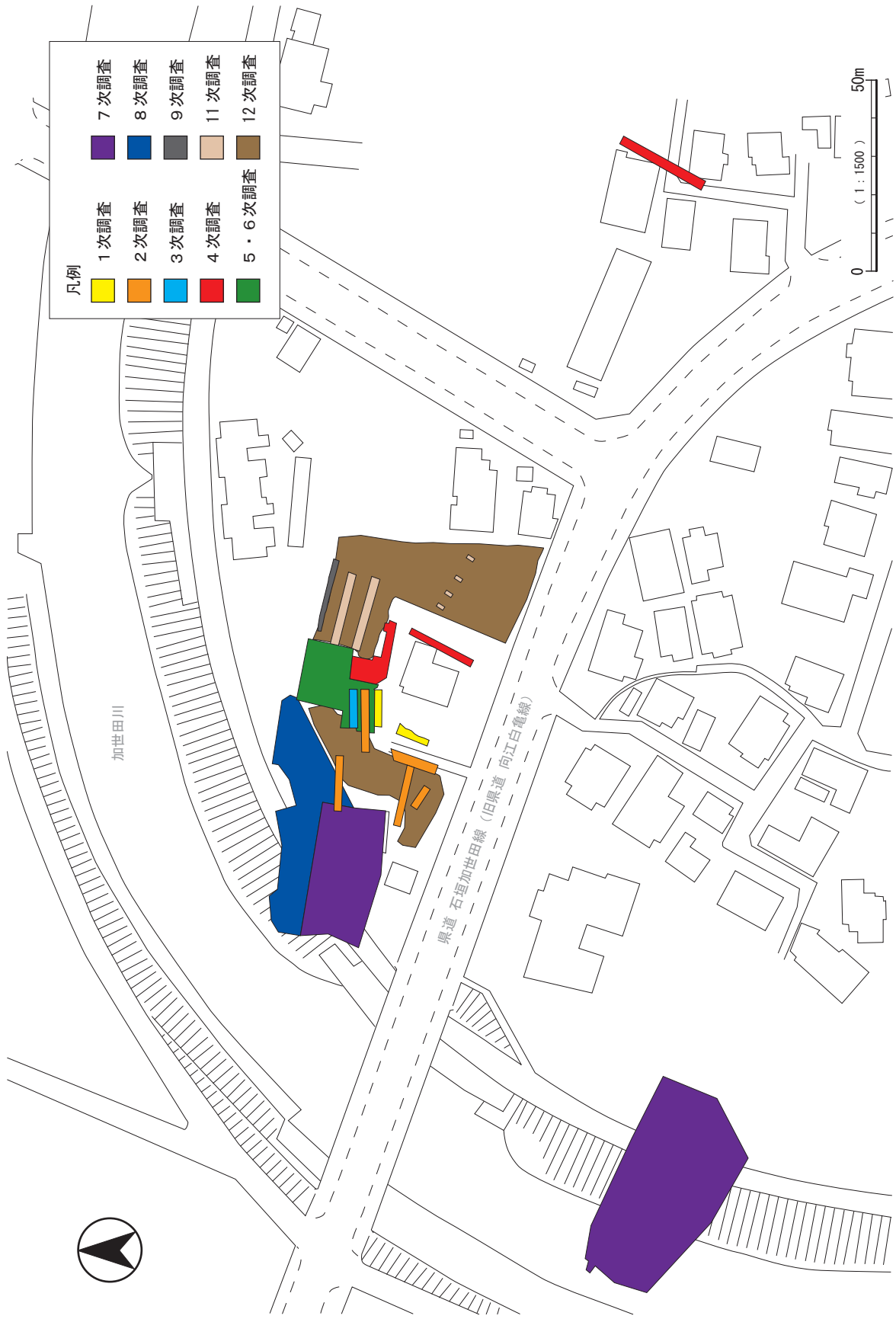
結果的に記録保存調査となったわけであるが、発見当初の1960年代の鹿児島には、工事中発見の遺跡発掘調査を担う行政機関は存在しなかった。本格的に稼働するのは1970年代に入ってから、特に九州縦貫自動車道関係の発掘調査が契機となった。これは全国的な傾向でもあった。そのような中で取り組まれた上加世田遺跡の発掘調査は、まさに考古学・埋蔵文化財を取り巻く局面が変容する過渡期のイベントであったといえるであろう。

その様相が顕著に表れているのが、発掘調査の担い手、つまり調査担当者や発掘作業に従事する参加者の在り様である。1～6次調査と7～12次調査とでは大きく異なっている。

表12は1～6次の調査者・参加者の動向を整理したものである^{註2）}。

1～6次調査は、中心人物で調査責任者である河口貞徳を軸に進められていることがわかる。河口は昭和42（1967）年春に17年勤務した玉龍高等学校を退職していた。1次調査では、同好者や吹上高等学校・加世田高等学校生の支援があるものの、河口によるところが大きかった。河口一人で調査した日もあったようである（表2文献16）。

2～5次調査は、夏休みや冬休み期間が調査期間となっている。これは、調査参加者の多くが公立・私立を問わず高等学校や小・中学校の教員有志であったことにもよるものと考えられる。河口がかつて在籍していた玉



第44図 1～12次調査位置図 (表2文献15より転載)

龍高等学校の考古学クラブ（河口が顧問）の初期メンバーである池水寛治・上村俊雄・出口浩をはじめ、河野治雄・盛園尚孝・諏訪昭千代・平田信芳・本蔵久三・酒匂義明・戸崎勝洋等がそうである。

また、当時大学生や高校生で、のちに県内外の大学教育や文化財行政の担い手となる橋口達也・立神次郎・池畑耕一・桑原道雄・青崎和憲・弥栄久志・中間研志・牛ノ濱修・吉永正史・本田道輝・長野真一・西田茂・片岡英治・中村耕治・池崎讓二・旭慶男・中島哲郎等も参加している。女性の参加も多く、楠原郁子や青木富子・月野真紀等は実測図にも名を残している。

これらのうち、特に本田道輝は4～6次調査において、河口とともにほぼフルに参加し、実測図も多く残した。実測図に関しては、河口の他、上村・出口・諏訪・弥栄・中村・吉永署名の図面を多く確認できた。また、主として5次調査に参加した有元彰順は多くの場面を写真に残し、図版18にあるスナップ写真の一部も撮影し、当時の空気感を今日に伝えてくれた。さらには加世田市教育委員会の職員はもちろん、久保好実・牛山好治・今給黎正人等、地元の研究者・郷土史家の参加もあった。そして何よりも吹上高等学校・加世田高等学校・加世田農業高等学校等の若者たちが参加し、郷土の遺跡発掘調査・歴史の探索に大きく貢献したことも忘れてはならない。

このように、埋蔵文化財保護行政が本格的に始まろうとするまさにその前夜、上加世田遺跡の発掘調査は実施されたと言えるのである。

上加世田遺跡は、世代や立場を越えつつも、考古学そして遺跡を愛する情熱のもと、多くの人々が集い・掘り・語り・問い・笑い・泣き・飲み・喰らい・格闘した舞台であった。各人が過去を探りつつ、希望ある未来を見つめた時間を共に過ごしたことであろう。

上加世田遺跡の発掘調査は、まさに世代を繋ぐ記念碑的なイベントであった。偶然の発見から歴史的意義の確認へと展開することとなったのである。

6次調査の最年少調査員として初めて参加した鹿児島大学2年の旭慶男が、昭和48（1973）年3月5日の調査日誌に次のような記録を残している。

「今日で4日目だが依然として日記に書く事がない。それだけ知らないということである。ポールもちばっかりしていてもあまりわからない。土器の口縁とか底部もまだはっきり見分けることができない。もちろん土器の形式などがわかるはずがない。知らない言葉ばかりである。“知らない事、わからない事があったら何でも質問しろ”と先輩方がおっしゃってくださった。うれしかった。わからないことばかりで何から聞いていいのかわからない状態だけど、1つ1つ勉強していこうと思う。すばらしい先輩たちをもって、本当にうれしいのです。」

新たな波を引き起こす世代間交流の現場であったこと

がわかる。旭はその後、中学校教員として、また県の埋蔵文化財保護行政担当職員として活躍し、昭和60（1985）年には上加世田遺跡の8次調査を担当、昭和62（1987）年にはその調査成果を整理・報告した（表2文献9）。享年36歳、平成元（1989）年の12月末に不慮の事故で帰らぬ人となったが、上加世田遺跡の調査記録と共にその活動の痕跡も永久に刻まれることとなった。

第2節 上加世田遺跡の総括

これまで12回の発掘調査を経た結果として、上加世田遺跡とはどのような遺跡なのか整理してみたい。

そもそも遺跡としては縄文時代（早期・後期・晩期）・弥生時代・古墳時代・古代・中世・近世と多くの時代の遺構遺物が発見されたいわゆる複合遺跡である。古墳時代や中世には、それぞれ堅穴住居跡や掘立柱建物跡等をはじめとする多くの遺構が検出され、相応の集落跡の存在が想定されている。

とは言え、圧倒的な情報量を誇るのが、縄文時代後期後葉から晩期前半期の資料であった。本節では、この時期の上加世田遺跡の特徴について、「上加世田式土器」・「第二の道具たち」・「楕円形窪地」の3つをキーワードとして、整理してみたい。

（1）土器の標式遺跡として

上加世田遺跡は「上加世田式土器」の標式遺跡として知られている。型式設定者は河口貞徳で、型式設定は昭和46（1971）年3月に加世田市教育委員会から刊行された、4次調査の概要報告書である『上加世田遺跡』であった。その「IV 総括」の冒頭で河口は、「本遺跡から出土する主要土器は単純な一つの形式と見られる。これを上加世田式と呼称したい。上加世田式は御領式に続く型式で、縄文時代晩期初頭に位置づけされる」と述べている（表2文献3）。

さらに河口は、5次調査の概要報告書である、加世田市教育委員会刊行の『上加世田遺跡発掘調査概要』（1972）の中で、「南九州縄文晩期土器型式編年表」を発表し、上加世田式―入佐式―黒川式―井手下式という流れを、器種ごとに模式図（第45図）を用いて示した（表2文献4）。

上加世田式土器について河口は、「器形によって分類すると、深鉢形土器、浅鉢形土器、マリ・皿形土器がある。このうち、深鉢形土器と浅鉢形土器が出土量が多く、深鉢形土器は大形のものが多い。マリ・皿形土器は出土量が少なく、小形土器がほとんどである。

この時期になると磨研する手法が用いられ、ほとんどの土器が篋磨きされているが、大形の深鉢の場合は部分的に磨研されたものが多い。小形の土器、特に浅鉢形土器、マリ、皿形土器などは黒色で美しく磨研されたものが多い。胎土は粒子が細くなり、とくに砂粒を含まな

	深鉢型土器	浅鉢型土器	マリ・皿型土器
上加世田式	1, 2, 3, 4	5, 6, 7, 8, 9, 10	11, 12
入佐式	1, 2, 3	4, 5	6, 7
黒川式	1, 2, 3, 4	5, 6, 7	8, 9, 10, 11
井手下式	1, 2	3, 4, 5, 6, 7, 8	9

第45図 南九州縄文晩期土器型式編年表(表2文献4より)

いもので黒色磨研土器は焼きがとおらず、もろいのがしばしばみられる」と概説している。

この型式設定後、南九州の縄文時代晩期初頭を飾る土器として、上加世田式土器が認識されることとなった。今回、報告の対象となった5次と6次の調査区では、「楕円形窪地」エリアを中心として、大量の遺物が出土している。土器についても完形土器やそれに近い土器が数多く出土しているが、ほぼ上加世田式土器の範疇で捉えられる土器が中心となっている点、まさに標式遺跡の資料として貴重な情報源となっている。

上加世田遺跡のエリア全体でみると、7次調査の第1地点で入佐式土器期の堅穴住居跡が検出されているように、上加世田式土器に後続する入佐式土器も一定程度出土している。また、この2型式に前後する、御領式土器や黒川式土器も少量ながら出土していることから、これらの変遷が、遺跡の消長を示しているといえよう。

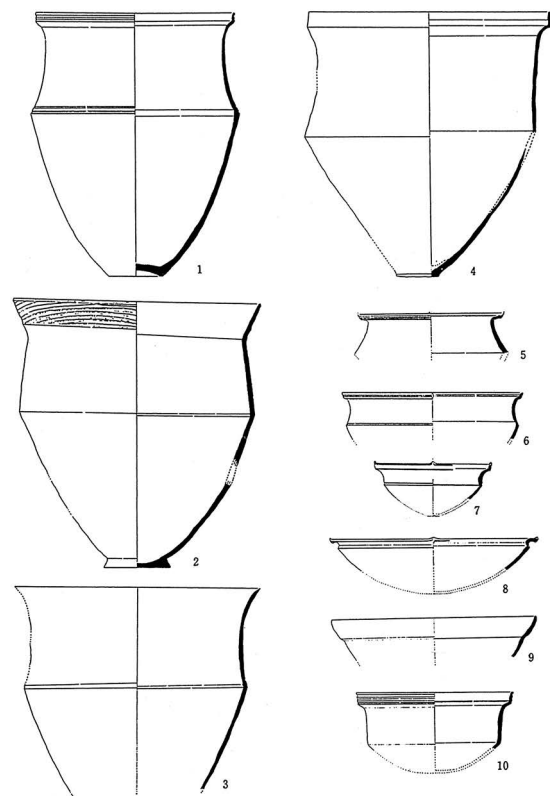
(2) 上加世田式土器の時間的位置づけ

上加世田式土器の時間的な位置づけについて整理しておきたい。前項で南九州の縄文時代晩期初頭を飾る土器というフレーズを用いたが、今日的には、縄文時代後期後葉の土器としての位置付けが定着してきた。

そもそも上加世田式土器の時期設定を晩期初頭とする位置づけは、後期末に位置付けられてきた御領式土器に後続する土器型式であるということからであったことは言うまでもない。

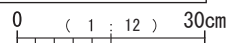
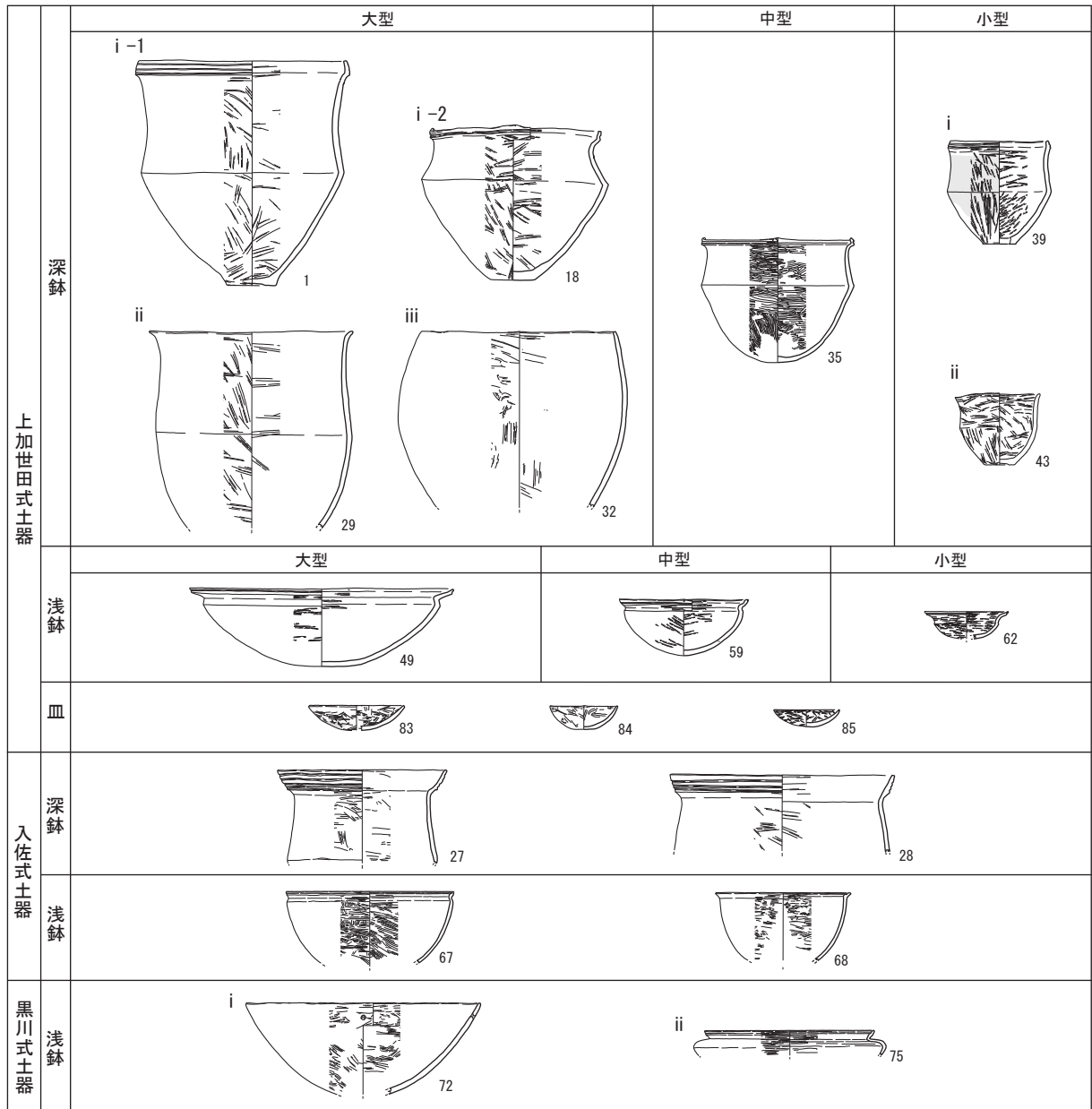
御領式土器は小林久雄によって昭和6(1931)年に型式設定された土器型式で、阿高式土器と共に九州の縄文土器の中で最初に設定されたものとして知られてきた。その編年上の位置づけについては、後期末あるいは晩期初頭と、研究者間のずれがあったが、九州以外の他地域との併行関係から、近年の後期後葉とする見解が定着することとなった。

上加世田式土器が設定された後の九州の縄文土器を扱った概説文として、昭和56(1981)年に刊行された『縄文文化の研究4 縄文土器Ⅱ』(雄山閣刊)がある。「4. 晩期の土器 九州の土器」を担当した山崎純男と島津義昭は、九州島を大きくⅠ北部・Ⅱ中部・Ⅲ南部に分けて捉え、地域ごとの様相を示した。「九州縄文晩期土器編年関係表」と題された表によると、Ⅲ地域の晩期前半期前葉の



時期	地域	Ⅰ地域	Ⅱ地域	Ⅲ地域	諸要素
前半期	前業	広田式	天城式	上加世田式	頸部横ネクタイ リボン状鱗状突起 壺
中業	(+)		古閑式	入佐式	
後業	宮の本式	磯石原式	(+)	黒川式 田村上層式 (上管生B式)	
後半期		夜白Ⅰ式 夜白Ⅱa式 夜白Ⅱb式	山ノ寺式 (原山式)	下黒野式 井手下式	列目突帯文土器 組織縄文土器

第46図 九州縄文晩期土器編年関係表(上は天城式土器)



第 47 図 上加世田遺跡 4～6 次調査出土縄文土器 (表 2 文献 15 より)

土器型式として上加世田式土器を置き、Ⅰ地域の広田式土器、Ⅱ地域の天城式土器や大石式土器との併行関係が示されている。さらにⅢ地域の上加世田遺跡に後続する晩期前半期の土器型式として、河口の分類を基本とする入佐式、黒川式土器に加え、松添式土器の存在を示している (第 46 図)。

この九州広域土器編年は、九州各地域の併行関係を確認する意味で、今日の土器編年観をより具体的なものとしてくれる研究の基礎となった。

その後、いわゆる亀ヶ岡式併行期をもって晩期の始まりとするという観点から、入佐式土器を新古に 2 分し、その新古の境界を後期と晩期とする研究の流れが生ま

れ、今日では、上加世田式土器は後期の末、後期最終末には古段階の入佐式土器を置く案がおおむね定着することとなった^{註 3)}。

第 47 図は南さつま市教育委員会が刊行した 4～6 次調査で出土した縄文後期後葉～晩期前半期土器の編年図である。本報告でも深鉢よりも器高の低い鉢形土器として、中鉢という段階を設定したが、この図でも深鉢と浅鉢のそれぞれに大型・中型・小型が存在することを提示している。

上加世田遺跡では、上加世田式土器－入佐式土器－黒川式土器と、ほぼ連続した土器編年を示す資料が出土しており、集落の継続性を検討する好資料となっている。

(3) 第二の道具たち

上加世田遺跡の特徴の一つに、いわゆる「第二の道具」の多さをあげることができる。

土偶・軽石加工品（岩偶・岩版等）・玉類（勾玉・管玉・小玉等）・異形石器等がそうである。

土偶は4点出土している（表2文献15：南88～91）。胴部と腕部がそれぞれ1点、脚部が2点であるが、土偶の様相を良く伝えているのが胴部（南88）の資料である。本県において、明らかに土偶の形態を伝えているのは、縄文時代早期後半期の霧島市上野原遺跡から出土した土偶（重要文化財）と本例しかない。

胴部のみ出土している土偶について報文を引用すると、「残存長8cm、最大幅6.4cm、最大厚4.2cmで、全体的にミガキ調整が施されているため光沢を有している。表面には、片方が欠損しているが乳房が表現され、膨張した腹部は妊婦を連想させる。腕から腰にかけてはほぼ直線で、骨盤が張り出したような腰の誇張表現はみられない。裏面には、肩の中央部分に張り出す形で突起のようなものがみられ、腰のあたりには直径3cmほどの窪みがみられる」とある。

土偶は4次調査で出土したが、その第一発見者である諏訪昭千代は昭和46(1971)年1月5日の調査日誌の中で、「本県最初の本格的土偶検出。我が眼を疑うなり」との所見をやや興奮気味に書き残している。

土偶と同様に人形（ヒトガタ）を表現したものとして軽石製の岩偶がある。これまで複数の岩偶が出土しているが、2次調査で出土したほぼ完形の岩偶は、本遺跡を代表する出土品である（表2文献16）。

人形を表す全形のうち、両腕部を欠いている以外、残存状況は良好である。最大長12.1cm、最大幅6.2cm、最大厚2.9cmで、表面が比較的強固な軽石で製作されている。特徴的なのは線刻によって作出された頭部と円形の貫通孔がある腰部である。頭部には顔を示したと考えられる円形の凹点が片側に施されている。縊れを強く表現した腰部や全体的に丸みを帯びた両脚部等、まさに“上加世田ヴィーナス”とでも呼ぶべき逸品といえよう。

軽石加工品には、線刻のある岩版的なものや石棒的なもの等、精神性を感じられる遺物も多く出土した。

玉類の出土も特徴的である。勾玉・管玉・小玉等が出土しているほか、玉の原石や未製品、砥石等も併せて出土した。玉文化の研究者である大坪志子は、縄文時代後期末葉～晩期前葉（IV期）における玉類の生産遺跡と流通遺跡の関係について語る中で、南九州の様相にも触れ、西北部の出水市大坪遺跡を紹介した後、「玉の製作のもう一つの遺跡が、学史的に著名であり、クロム白雲母という石材の判明につながった南九州南西部の鹿児島県上加世田遺跡である。上加世田遺跡ではクロム白雲母製玉が約160点出土しており、うち9点が未製品、原石7点

が出土している。また、滑石製玉も数点ある。上加世田遺跡周辺には、クロム白雲母製玉を1～5点出土する遺跡が多数密に分布しており、上加世田遺跡で製作された玉がもたらされたと考えられる」とし、上加世田遺跡が玉の製作地であるとともに周辺にも製品をもたらした流通拠点であったと述べた^{註4)}。

また、南九州東北部のIV期の様相を語る中で、「III期にヒスイを重用していた南九州東北部には、IV期になると鹿児島県大坪遺跡と上加世田遺跡という一大製作遺跡が出現し、クロム白雲母製玉の流通の拡大、すなわち、九州ブランドの意識の浸透をみるができる」、「元来東日本からヒスイを得ていたこの地域は、逆にクロム白雲母製玉を東日本へ流通させる拠点としての役割を果たすようになった」と述べ、上加世田遺跡で製作されたクロム白雲母製玉類の流通・展開について評価した^{註5)}。

表13は、これまでの上加世田遺跡発掘調査で出土した石器・石製品の数量を示したものである。各調査次の報告や「河コレクション」収蔵・保管の資料をカウントしたものである。ここでも玉類関係遺物が183点出土という結果が出ている。

従来、緑色の玉類は、概してヒスイ製とされる傾向が強かったわけであるが、大坪らの研究により、クロム白雲母という石材が意識されるようになり、上加世田遺跡は“九州ブランド”的なクロム白雲母製玉類の製作場所かつ流通拠点であることが判明したということになる。

そのような中、上加世田遺跡出土の玉類には、ヒスイ製と考えられているものも存在する。獣形勾玉である（表2文献16:P64、本報告の第2章第4節-P59,60参照）。

発掘調査での出土品ではなく、採集品であるという点で正確な位置関係は不明であるが、採集の経緯について記された当時の記録に加え、採集者である牛山好治への取材・確認^{註6)}を整理した結果が、第2次調査の報告に記されている（表2文献16:P21）。

この獣形勾玉は、これもまた類例のない双口土器と共に、2次調査中の休日に採集されたもので、その採集地点は調査地に近い東側の台地で、工事によって掘削された壁面にのぞいていたとのこと。もちろん出土品と採集品は区別しておく必要があるが、両者ともに上加世田遺跡に埋蔵されていた遺物のラインナップに入れておくべき重要な資料であることには変わりなく、引き続きその位置づけについて意識する必要があることを再確認することができた。

第二の道具という観点から表13をみると、異形石器48点、特殊石器12点という内容が目にとまる。特に異形石器については、軽石加工品や玉類とともに上加世田遺跡の出土品として、古くから注目されてきた。九州の縄文時代後期～晩期にかけての異形石器について検討を行った堂込秀人によると、「後期から晩期の異形石器は、

表 13 上加世田遺跡から出土した石器・石製品の数量

(点)

No.	種類	調査次													合計
		1次	2次	3次	4次	5次	6次	4～6次 市教委分	7次	8次	11次	12次	不明次		
1	石鏃	12	12	53	118	73	15	99	49	24	31	149	22	657	
2	石槍	1	0	0	2	0	0	0	0	0	4	0	0	7	
3	尖頭状石器	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	3	
4	投弾	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
5	石錘	6	17	6	2	3	4	24	4	3	2	11	8	90	
6	切目石錘	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	
7	磨石・敲石	54	46	24	18	24	11	365	5	9	10	32	39	637	
8	棒状敲石	5	0	2	0	5	1	10	0	0	0	0	0	23	
9	凹石	0	1	0	2	0	0	0	1	0	0	0	1	5	
10	石皿・台石	16	21	28	2	7	0	115	0	5	3	12	9	218	
11	砥石	2	5	2	4	5	2	40	0	1	3	3	5	72	
12	有溝砥石	0	0	0	0	4	1	4	0	0	0	1	1	11	
13	打製石斧	33	32	23	68	24	15	223	20	15	4	67	19	543	
14	磨製石斧	8	26	19	10	8	4	81	8	11	3	17	5	200	
15	局部磨製石斧	2	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	5	
16	小型磨製石斧	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	
17	小型磨製石斧未成品	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
18	ノミ状石器	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	2	
19	礫器	2	4	1	3	0	0	0	0	0	0	2	2	14	
20	楔形石器	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	7	
21	スクレイパー	13	10	14	14	10	2	12	2	0	21	14	33	145	
22	削器	0	0	0	0	0	0	0	0	7	0	0	0	7	
23	石匙	1	2	1	4	10	14	11	4	0	0	8	3	58	
24	石鎌	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
25	石包丁	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	2	
26	石刃	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
27	横刃形石器	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	
28	石錐	2	1	4	9	11	1	11	0	1	1	11	0	52	
29	抉入石器	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
30	加工痕のある石器	20	37	9	2	0	0	0	0	0	4	0	6	78	
31	使用痕のある石器	0	7	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8	
32	擦痕のある石器	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	3	4	
33	円盤形石器	4	3	0	0	4	1	6	4	0	0	0	3	25	
34	十字形石器	0	0	0	0	0	1	0	2	0	0	1	0	4	
35	勾玉	0	0	1	0	5	0	0	0	0	1	8	0	15	
36	獣形勾玉	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
37	管玉	0	5	1	5	29	6	0	0	0	3	46	2	97	
38	小玉	0	0	1	0	1	0	0	0	0	1	0	0	3	
39	丸玉	0	0	0	2	1	1	0	0	0	0	0	0	4	
40	玉類	0	0	0	0	0	0	51	0	0	0	8	0	59	
41	玉類原石	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
42	玉未成品	0	0	1	0	0	2	0	0	0	0	0	0	3	
43	石刀	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
44	線刻礫	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
45	軽石製品	4	5	7	22	10	3	108	0	3	1	12	11	186	
46	岩版	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
47	岩偶	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	
48	異形石器	3	1	1	6	10	2	10	1	2	2	10	0	48	
49	特殊石器	1	2	4	1	0	0	0	0	0	0	0	4	12	
50	石製品	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	3	
51	磨製石器	5	9	9	0	0	1	0	1	0	0	0	4	29	
52	打製石器	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	
53	加工痕のある剥片	14	37	56	31	1	0	0	0	0	0	4	55	198	
54	使用痕のある剥片	2	12	18	4	0	0	0	0	0	0	0	7	43	
55	擦痕のある剥片	0	0	0	3	1	0	0	0	0	0	0	0	4	
56	石核	1	1	0	6	0	0	36	0	0	1	0	1	46	
57	フレイク・チップ	0	0	1	0	0	0	3256	0	0	0	0	0	3257	
58	その他	3	8	6	1	0	0	20	1	0	0	0	2	41	
合計		216	317	298	344	248	87	4482	104	82	95	420	252	6945	

※ 石器・石製品等の種類・名称については、各調査次の報告書記載のものをそのまま使用した。

鋸歯状尖頭器や石鋸の組み合わせ銚や、結合式釣り針という西北九州漁撈文化を代表する漁撈具が、漁撈による成果の大きい地域、東シナ海沿岸部や離島を有する南九州地域や周防灘に面する北九州に拡散し、その漁撈や漁獲物の儀礼化により儀器化し、それが河川沿いに内陸まで伝えられた」として、「異形石器を漁撈具に由来するモノ」とした^{註7)}。

以上のような第二の道具たちの多くが「楕円形窪地」部分と重複する形で出土した(図11)。もちろんすべてが明瞭に分布するわけではなく、「楕円形窪地」の東西部分を調査した12次調査において出土した多くの遺物の中にも、軽石加工品や玉類・異形石器が含まれていた。とは言え、調査区全体を俯瞰すると、「楕円形窪地」およびその周辺部に多く分布している傾向が強くみられるということには異論はなからう。

次項では、第二の道具の出土状況や各種遺構の在り方も含め、「楕円形窪地」の実態について整理してみたい。

(4)「楕円形窪地」は何を語る

上加世田遺跡の4次調査で意識され、5次、6次でその全貌を知ることとなった「楕円形窪地」とは、いったいどのようなものなのだろうか。

1～6次調査の責任者であった河口は、5次調査の報告文(表2文献6)の結びで、「この窪地は、生産と消費のいとなみをふくめた、原始宗教的な行事も行われる、集落の集会場であったと思われる」と述べている。

また、鹿児島島の古代遺跡について概要をまとめた書物の中で、薩摩半島西岸地域の遺跡の一つとして上加世田遺跡を取り上げ、「楕円形窪地」について触れている。少し長い以下に引用する^{註8)}。

「縄文時代晩期初頭の遺跡で、1968～71年(昭和43～47)に発掘調査を行った(ママ)。縄文時代晩期の集落地の北西に隣接してつくられた集会場遺構である。長径23m、短径16mの楕円形のナベ底状の窪地で、中央の最深地点では2.15mの深さがある。

遺構内には、配石遺構、炉跡、埋め甕、岩偶をおさめた甕、軽石を入れた甕などの遺構がある。

配石遺構のなかには石棒を立てたものが2基あり、遺跡一面に配置した岩偶、石棒、ヒスイの勾玉、管玉、小玉、岩偶内蔵の甕などとともに、性器信仰が重要な位置を占めていたことをしめしている。

多量の土器や石器、獣骨や魚骨の散布、石器の原石、ヒスイの原石、攻玉(玉の加工)用の砥石などが出土して、集落のあらゆる行事がおこなわれる場所であったことをしめしている」と述べ、「集会場」として「集落のあらゆる行事が行われた場所」という評価を行っている。

そもそもこの窪地については、第12図で示したように、人工的に掘削されたものではないことは確かである。また、「楕円形窪地」のスケール感を第10図で確認すると、

長径18m、短径12m、深さ1.5mと前述した河口の表記よりも規模が小さいのがわかる^{註9)}。

ところで、考古学的用語として、あまり馴染みがない「集会場」という用語が登場することに注目してみたい。

そもそも、上加世田遺跡が発見され、発掘調査された昭和43(1968)年当時、「集会場」という用語は、九州の縄文時代研究者にとって、ホットな響きであったと考えられるのである。

それは大分県豊後大野市(調査当時直入郡)緒方町に所在する大石遺跡の発掘調査で検出された大形の円形堅穴との関係からであった。

大石遺跡は、大分県東南部の祖母・傾山系の北麓に位置する火山灰台地上の遺跡(標高350m前後)で、縄文時代晩期前半の大石式土器の標式遺跡として知られている。別府大学で教鞭をとっていた賀川光夫らによる昭和35(1960)年の試掘調査にはじまり、昭和41(1966)年12月の4次調査まで4回の調査が行われている。黒色磨研の深鉢や浅鉢、勾玉・管玉・土偶・石棒等の第二の道具や土掘り具と考えられる打製石斧、加工具の磨石や石皿等、大量の遺物が出土した。中でも多量の打製石斧や収穫具的な石包丁様、石鎌様石器の出土は、加工具の存在と共に農耕文化の存在を示唆するものとして、大いに発信され注目された。賀川光夫の名は、九州縄文農耕の代名詞的な存在であった。

その4次調査で、今日でも稀有な例と言える遺構が検出された。大型の円形堅穴である。その内容について賀川による説明文を少し長い引用する^{註10)}。

「大石遺跡は台地の東側に位置するが、集落のほぼ中央に集会所が設けられている。直径7.8m、深さ2.8m、中央のステージは径3m弱である。堅穴には三段を築き、ステージまでは粘土でつき固めた長方形の階段で上り下りする。会議や催しものをするのであればゆっくりと数十人の人員を収容できる広さである。この大きな堅穴は上部の構造が明らかでない。周辺に2、3の柱穴があったが、全体を屋根で覆うことはなかったようだ。したがって露天のスタジアムということになる」と述べている。

この文献は、昭和46(1971)年5月刊行、上加世田遺跡の「楕円形窪地」認識は同年12月末なので、河口が直接この文章を読んでいた可能性もあるが、いずれにしても大石遺跡での事例発見からは5年経過しているので、上加世田遺跡発掘調査のメンバー達は、「集会場(所)」的な遺構の存在について、当然意識していたと考えられる。

共に大型ではあるが、規模に違いがあることや、大石遺跡の場合、内部に粘土で突き固めた階段状のステップがあること、上加世田遺跡の場合、「楕円形窪地」内の遺物の量が尋常ではないのに対し、大石遺跡の場合、内部であまり遺物が出土しないことなど、相違点が多いことも事実である。とは言え、遺跡全体の様相としての類似

点は多く、今日でもなお注目される事例であることには変わりはない。

このような大型の竪穴遺構（窪地）の類似例が、鹿児島県内にある2つの遺跡で検出されている。まず、前述したように、玉類の製作遺跡として上加世田遺跡と並び称される出水市の大坪遺跡である。縄文時代後期後葉～晩期前葉の「埋設土器」が37基も検出された遺跡で、「大型凹地」とされた遺構が検出されている。長径15.8m、短径5.8m、深さ1.15mの長楕円形をした凹地に多量の土器や焼土塊が出土したとされる。入佐式土器期と考えられている¹¹⁾。

また、薩摩郡さつま町の水天向遺跡からも大型土坑が検出されている。遺跡は上加世田遺跡や大坪遺跡とほぼ同時期で、大型土坑は確認されているだけで東西9.1m、南北5.7mの方形プランで深さが3.0m以上と報告されている。多くの土器や石器の欠損品と共に獣骨や魚骨片、ベンガラ片なども出土しており、廃棄場的な機能も語られているが、上加世田遺跡との類似性が注目される¹²⁾。

以上のように、いくつかの類似例があるとはいえ、上加世田遺跡の「楕円形窪地」は異色である。前項の第二の道具と、第2章第3節「楕円形窪地」エリアの遺構で取り上げた礫群や焼土域、灰土域等の遺構との関係が極めて重要になってくる。「楕円形窪地」エリアを彩る数々の構成内容、具体的には礫群（特に小礫群）・人骨片・獣骨片・焼土域・灰土域・埋設土器・数々の玉類・土偶・岩偶などの軽石加工品等がどのような関係にあったのか、どのような有機的つながりが存在したのかしないのか。

礫群の項で、個々の礫群及びその周辺の在り方について述べ、関係性の高いと考えられる要素についても可能な限り触れたが、不確定要素もあり、限界を感じることもあった。

我々が目にする考古学的物体や事象は、日常と非日常が背中合わせ的な部分も多い。日常容器を棺に転用したり、愛用の品を副葬品として機能転化する例などがそうである。

ただし、上加世田遺跡には強力な祭祀的機能を持ち合わせていたであろう土偶や軽石製の岩偶が数点出土している。しかも「楕円形窪地」内から。第27図にあるJ I区の東壁付近の様相は象徴的である。土偶1点（南88）と軽石製岩偶2点（南338、南344）が1.5mの間に集中して出土している。特別な空間を意識せざるを得ない。

「楕円形窪地」は、自然の窪地を利用しながら日常と非日常の行為が行われる集落の重要エリアであった。日常の行為とは、生活する上で欠かせない調理や解体、道具の製作、さらには不必要品の廃棄などである。一方で、墓域として、あるいは祭祀空間としてのエリアでもあったことは間違いない。しかも複雑で濃厚な行為の蓄積の場であったと考えられ、「楕円形窪地」が極めて重要な空

間であり、縄文時代後期後葉～晩期前葉社会を把握する上で欠かせない情報源であること再認識させてくれることとなった。

（5）地域の中の上加世田遺跡

本書冒頭の第1図にあるように、上加世田遺跡が所在する地域には、多くの著名な遺跡が集中する。薩摩半島の南西部、東シナ海に面する吹上浜を突き破るように万之瀬川が流れている。その下流域に発達した平野部には万之瀬川の支流である堀川や加世田川が流れ、阿多平野を形成している。かつて穏やかな内海であったと考えられるこの平野を臨む微高地に著名な遺跡が存在する。

ひとたび海に出ると、九州西海岸はもとより、南西諸島や朝鮮半島・大陸とも広くつながっていたと考えられる地域であり、上加世田遺跡はもちろん、各地との交流が見受けられる弥生時代前期の高橋貝塚や古代～中世の持株松遺跡などの存在は、時空を超えたこの地域が持つ役割や可能性を語っているものとする。

上加世田縄文人たちが、「楕円形窪地」からいつも眺めていたであろう地域のランドマーク：金峰山は、今もかわらず地域を見守ってくれている。

今回の報告は、膨大な調査記録の概要である。保存・保管された膨大な考古資料は、これからもまた、歴史を解明する研究対象として、歴史を後世に伝える資料として、大いに活用していかねばならないと考える。これは最終章ではなくスタートラインであることを肝に銘じて。

【 註 】

- 1) 具体的内容は、有元彰順氏のご教示による。
- 2) 後に考古学や（埋蔵）文化財保護関係者となった方々を中心として作成した。
- 3) 堂込秀人 1997「南九州縄文晩期土器の再検討」『鹿児島考古』31 鹿児島県考古学会
清田純一 1998「縄文後・晩期土器考」『肥後考古』11 肥後考古学会 等がある。
- 4) 大坪志子 2015『縄文玉文化の研究』雄山閣 P102
- 5) 大坪志子 2015『縄文玉文化の研究』雄山閣 P109
- 6) 採集の経緯について、2021（令和2）年12月21日に前迫が牛山好治氏から直接伺うことができた。
- 7) 堂込秀人 2016「九州地方の縄文時代後・晩期の異形石器考」『広島大学考古学研究室開設50周年記念論集』広島大学大学院文学研究科考古学研究室
- 8) 河口貞徳 1988『日本の古代遺跡28 鹿児島』保育社
- 9) どこを測定の起点とするかで数値は変化する。
- 10) 賀川光夫 1971『大分県の考古学』吉川弘文館や賀川光夫 1972『農耕の起源』講談社に大石遺跡の概要が記されている。
- 11) 鹿児島県立埋蔵文化財センター『大坪遺跡』県埋文報（79）
- 12) さつま町教育委員会『水天向遺跡2』町埋文報（6）

圖 版



長屋山頂より加世田市街地方面を望む
(矢印付近が上加世田遺跡)



上加世田遺跡(右の森)付近から金峰山・
中岳を望む



上加世田遺跡の近景
(中央の森付近が調査地点)

遺跡の遠景・近景 (2021年8月)



遺跡南側から山々を望む（中央の台地が遺跡）
左：金峰山（636.3m）・中央：中岳（287.5m）・
右：田上岳（305.8m）



発掘調査風景（4次）



発掘調査風景（4次）

遺跡の近景・発掘調査風景1



遺物出土状況と実測風景
(4次：CIV区付近)



遺物出土状況
(5次：JIV区付近)



発掘調査風景
(5次：A～D-I～VI区付近)

発掘調査風景2



発掘調査風景
(5次：A～D - Ⅲ～Ⅵ区付近)



発掘調査風景
(5次：A～D - Ⅲ～Ⅵ区付近)



発掘調査風景 (5次)

発掘調査風景 3



発掘調査風景
(5次：多くの高校生が参加)



発掘調査風景
(重機・ベルトコンベアーの導入)



雪の上加世田遺跡
(4次：1971年1月4日)

発掘調査風景 4



Mトレンチ南側から金峰山・中岳・田上岳を望む



東側からK～Mトレンチ方向を望む



Mトレンチの調査状況（東側から）

発掘調査風景5



第2地点Aトレンチ発掘調査風景
(南側から)



第2地点Aトレンチ発掘調査風景
(西側から台地上の調査区を望む)



楕円形窪地 (北西から・掘り下げ中)

発掘調査風景6・楕円形窪地1



楕円形窪地内遺物出土状況



楕円形窪地完掘状況
(南側から金峰山・中岳を望む)



楕円形窪地完掘状況 (南側から近景)

楕円形窪地 2



楕円形窪地内土層堆積状況
(西側から・4次調査区北壁実測中)



楕円形窪地内土層堆積状況
(南西側から・4次調査区北壁)



楕円形窪地内土層堆積状況
(南側から・4次調査区西壁実測中)

楕円形窪地 3



1号土坑検出状況（南西側から）



1号土坑とbトレンチ
（東南側から・手前の石列部分が1号土坑。
トレンチの奥で2号土坑検出）



1号土坑完掘状況（南西側から）

遺構検出状況 1



2号土坑検出状況
(東南側から・bトレンチ部分のみ)



礫群1と深鉢形土器 (南側から)

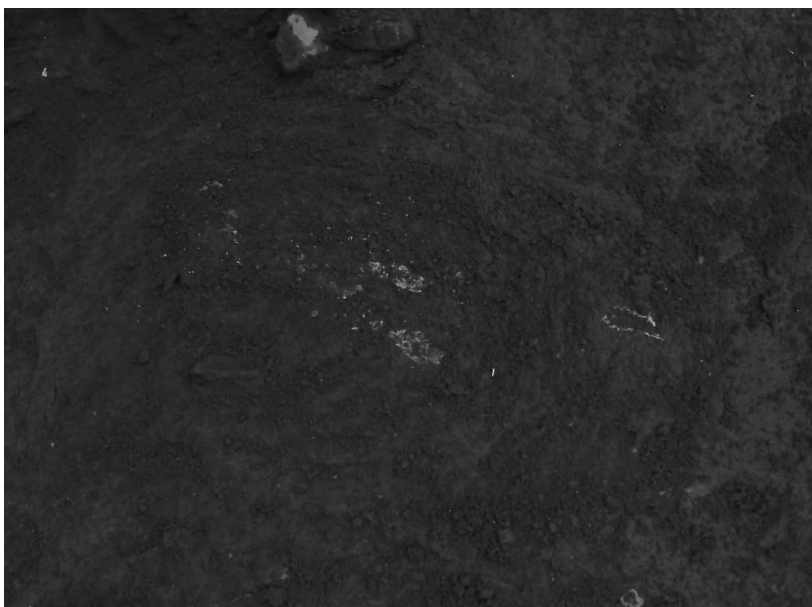


礫群1検出状況 (南側から)

遺構検出状況2



礫群 6 検出状況 (南側から)



礫群 6 下位検出の骨片
(人骨の可能性あり)



礫群 10 検出状況 (南側から)

遺構検出状況 3



礫群 11 検出状況（北側から）



礫群 14 検出状況（北側から）



焼土 2 検出状況（南側から）

遺構検出状況 4



焼土 1 検出状況（北側から）



焼土 1 堆積層半裁状況（南側から）



骨片出土状況（礫群 9 下位か）



带状硬化面検出状況
（東側から・5次調査で検出。道跡か）

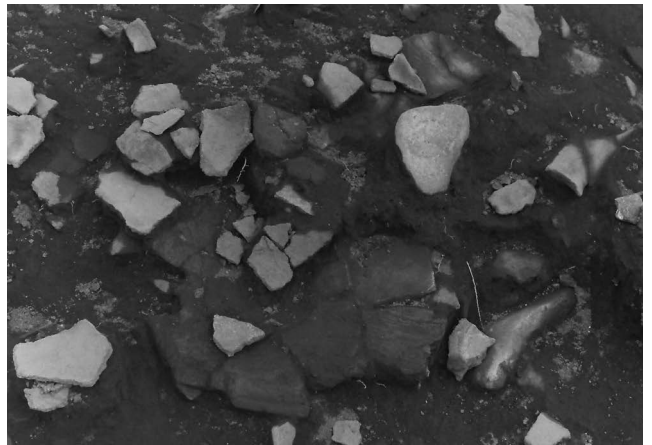
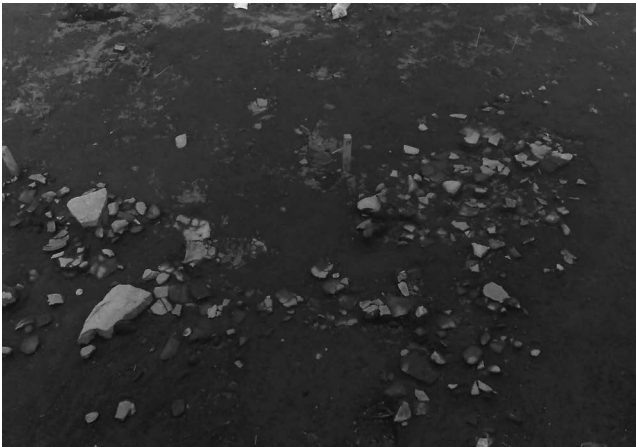
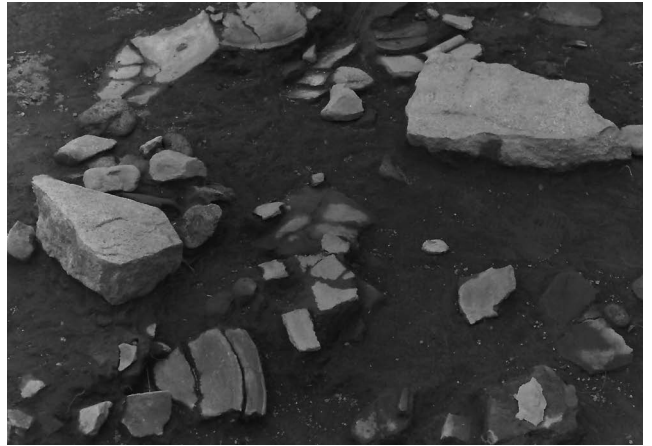
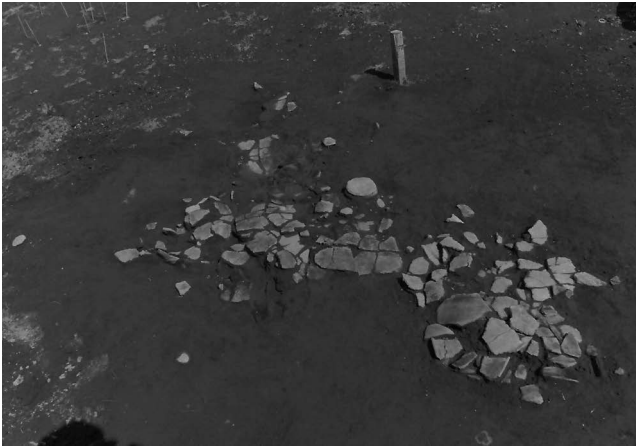
遺構検出状況 5



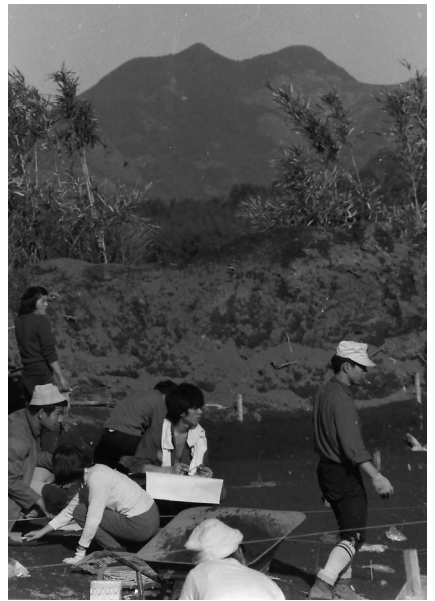
4次調査遺物出土状況



5次調査遺物出土状況



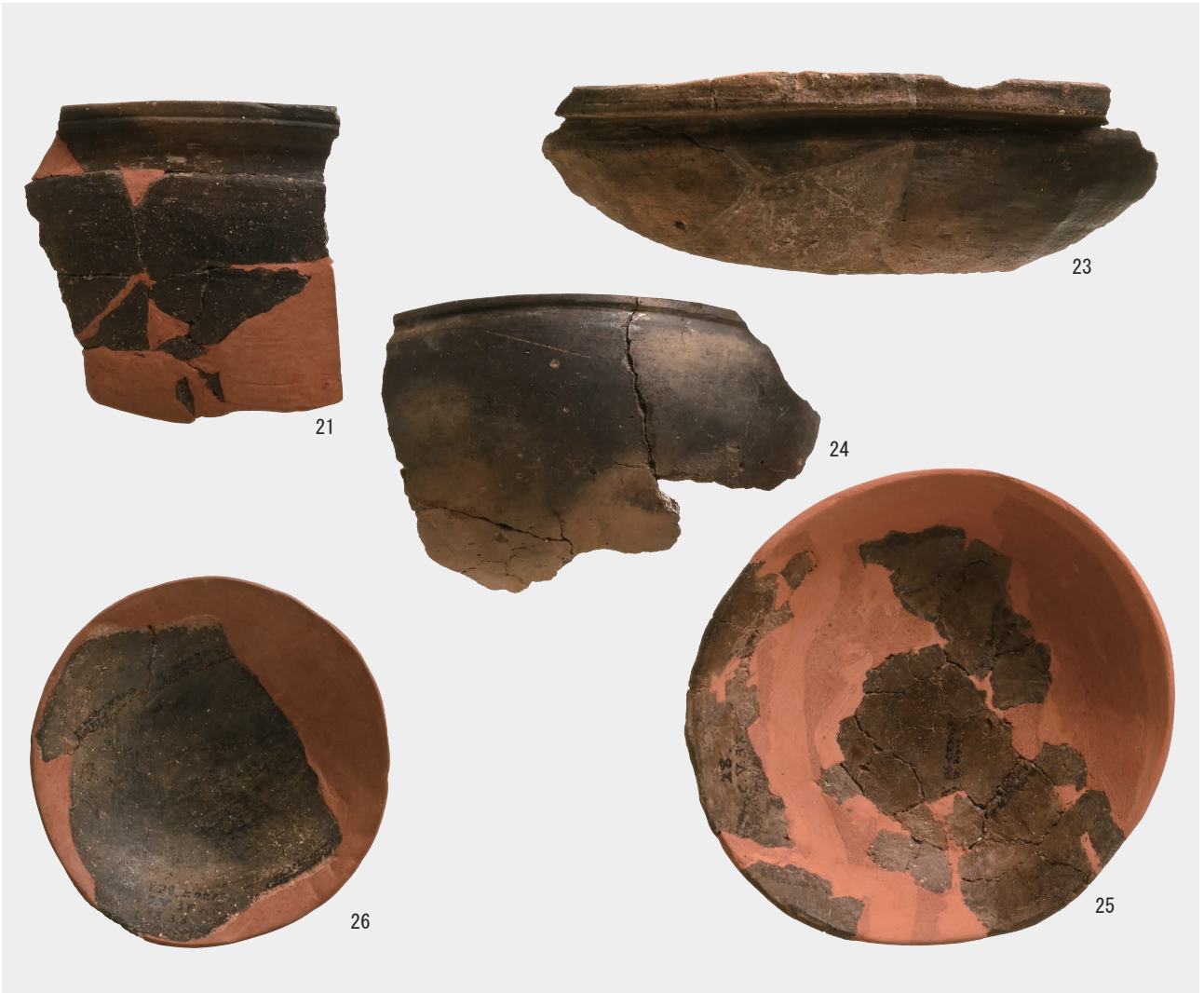
6次調査遺物出土状況



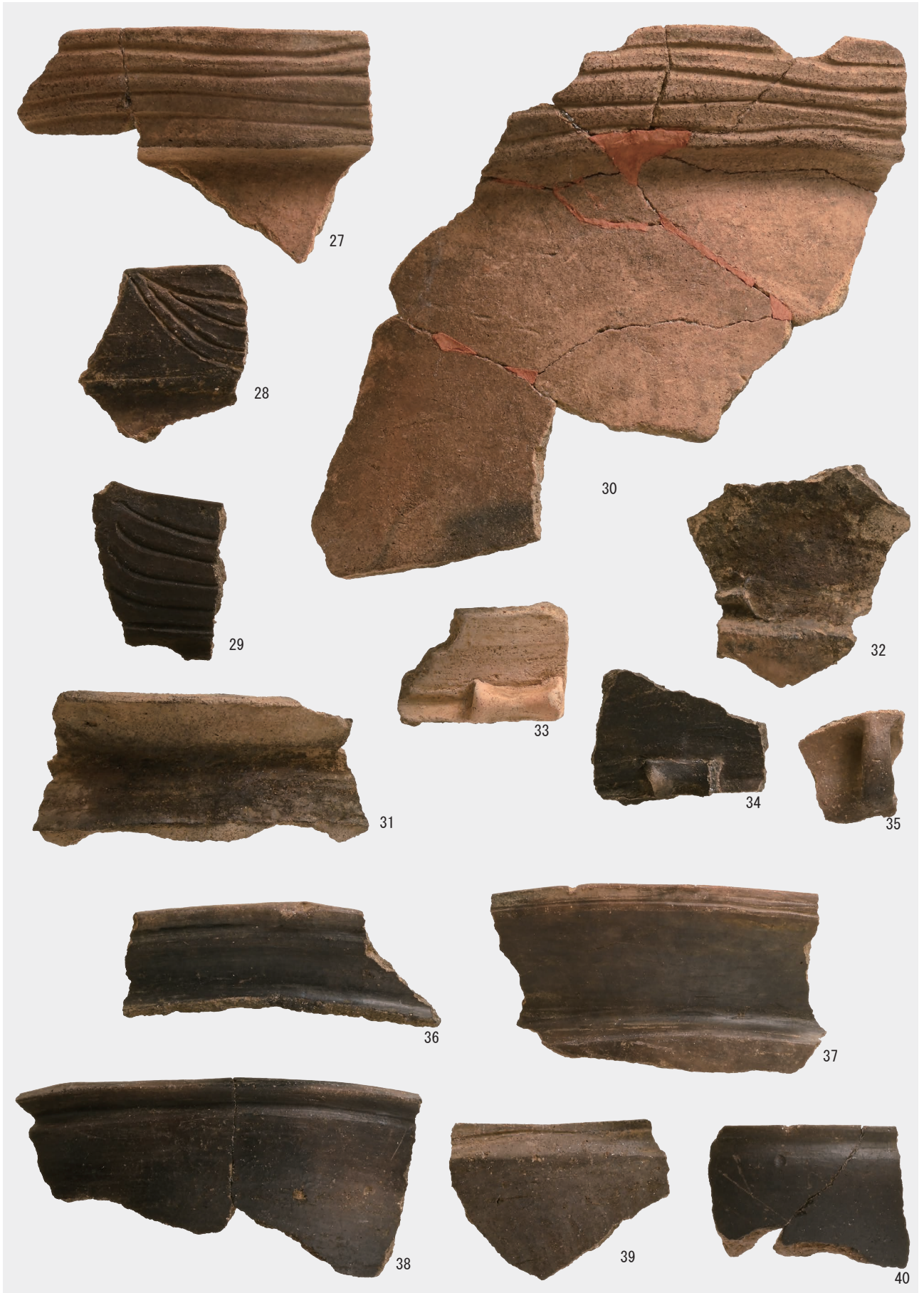
熱きあの日のアルバム -夢はイセキを駆けめぐる-



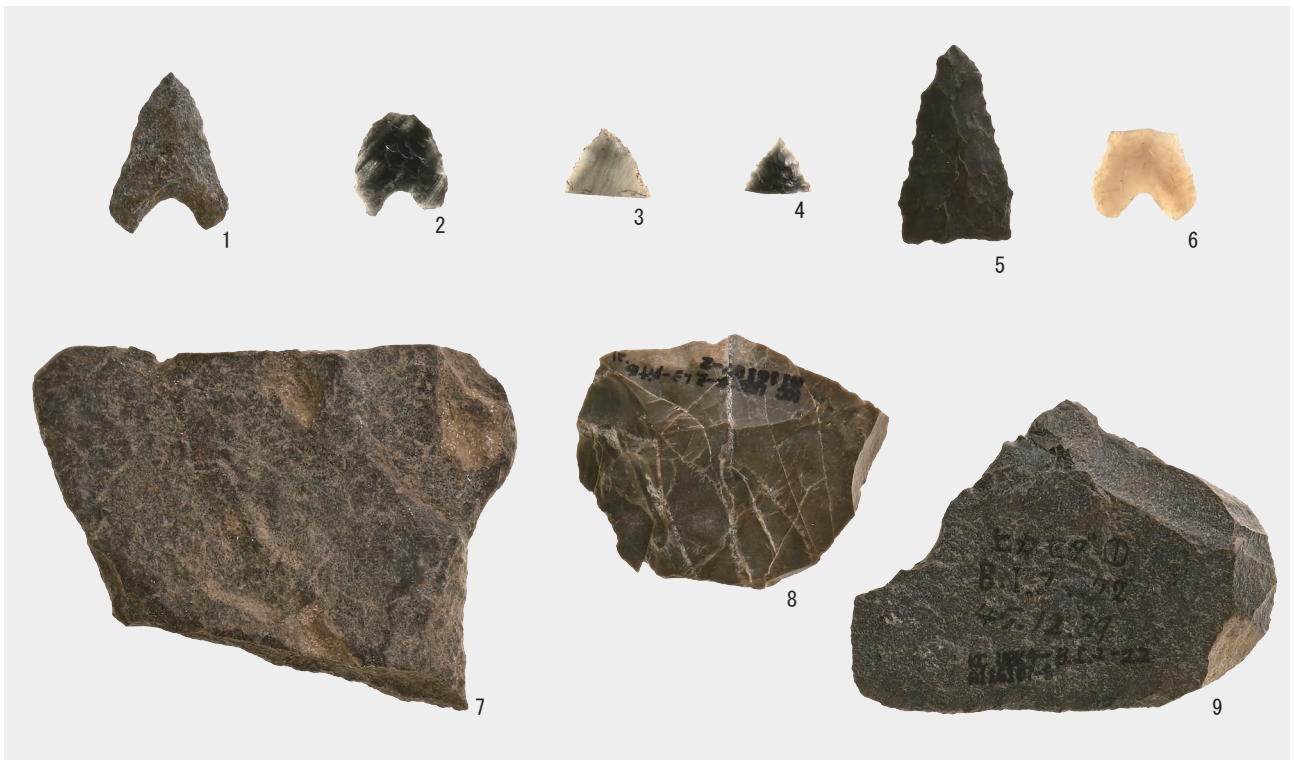
縄文土器 1



縄文土器 2



縄文土器 3



縄文時代の石器 1



縄文時代の石器 2



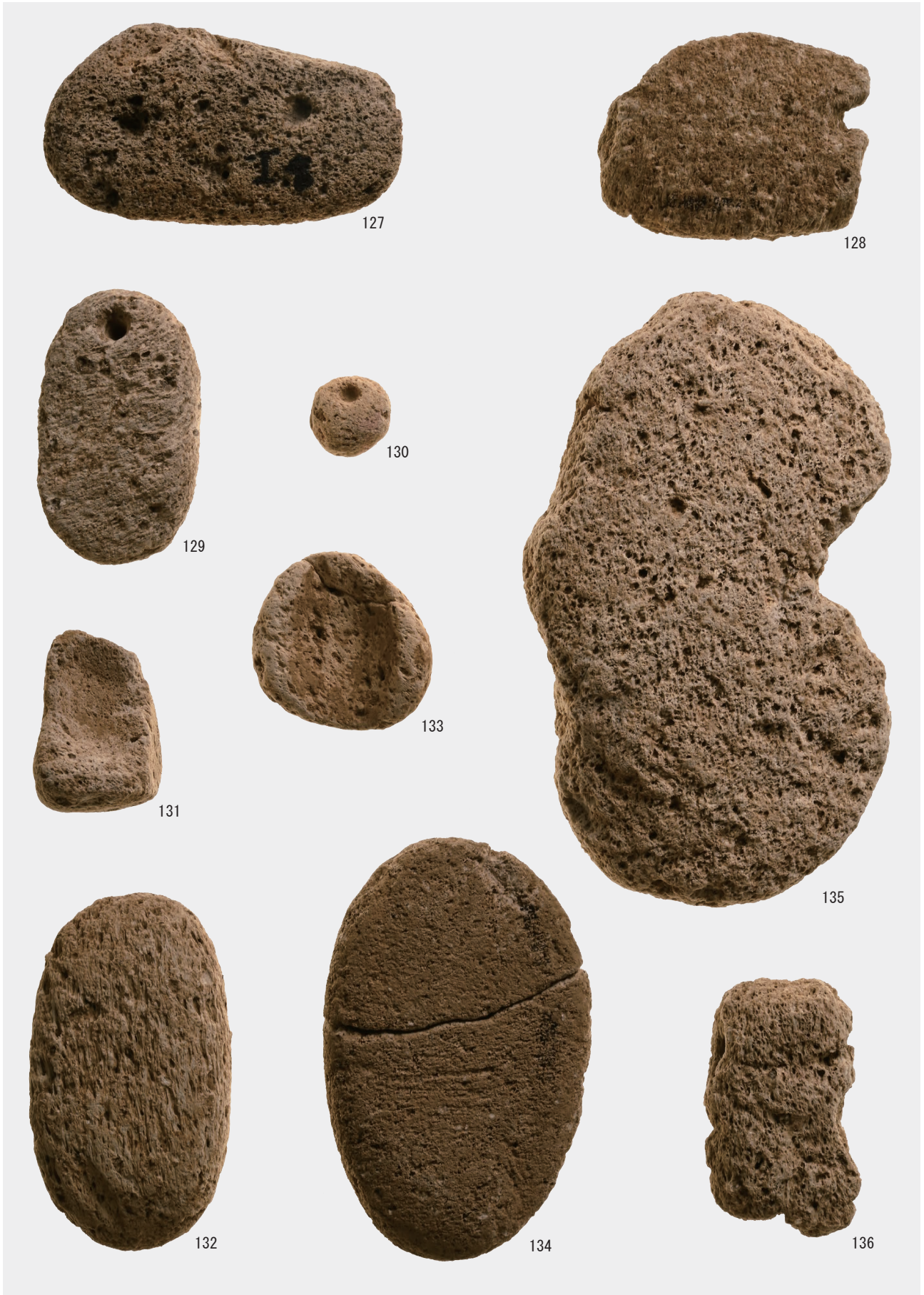
縄文時代の石器 3



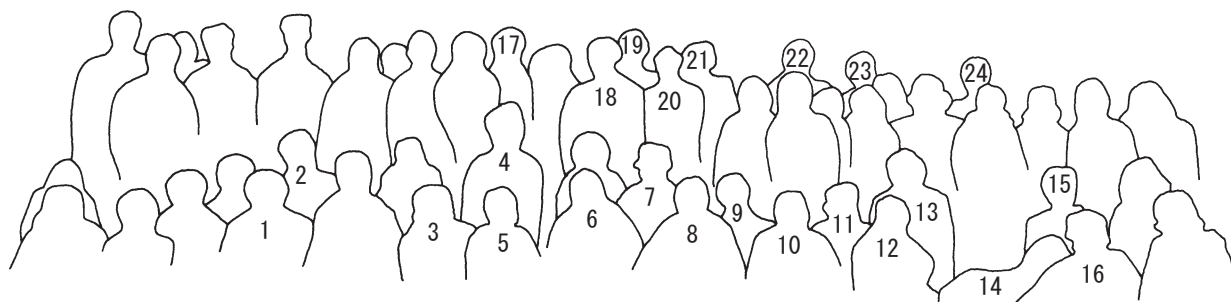
縄文時代の石器 4



縄文時代の石器 5



縄文時代の石器 6



1. 当房 満也 2. 瀬戸 久夫 3. 中村 耕治 4. 尾ノ上 道雄 5. 楠原 郁子 6. 池水 寛治 7. 中島 哲郎 8. 河口 貞徳
9. 池崎 譲二 10. 上村 俊雄 11. 牛ノ濱 修 12. 出口 浩 13. 戸崎 勝洋 14. 西田 茂 15. 徳留 孝次郎 16. 酒匂 義明
17. 有元 彰順 18. 本田 道輝 19. 福間 啓造 20. 吉永 正史 21. 下野 龍博 22. 片岡 英治 23. 木下 孝司 24. 立神 次郎

発掘調査（5次）参加者集合写真

※ 調査日誌や参加者の記憶等により，昭和46（1971）年12月28日撮影と推察される。

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（216）

上加世田遺跡 2

県内遺跡発掘調査事業に伴う河ロコレクション発掘調査報告書

発行年月 令和4（2022）年3月

編集・発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4318
鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号
TEL 0995-48-5811 FAX 0995-48-5812

印刷 株式会社 国分新生社印刷
〒899-4301 鹿児島県霧島市国分重久 620-1
TEL 0995-45-4880 FAX 0995-45-6979

